
バツラブ

スラ ラノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バツラブ

【Nコード】
N0500K

【作者名】
スラ ラノ

【あらすじ】
『学校の美人に告白する』
それは何て事ない罰ゲームのはずだった。
話した事もない女子に告白の言葉を伝え、あっさりと振られ、それで終わるだけのつまらない罰ゲーム。
しかし、返ってきた言葉は断りの言葉ではなく、
「私も好きです」
だった。

罰ゲームから始まる恋の物語。

プロローグ

アスファルトの上。

1匹の黒猫が駆け回っている。

「待つてよ！」

後ろで少年が呼び止めると、猫は足を止め、後ろを確認する。

しかし、少年がすぐ後ろまで迫ると、また猫は走り出した。

そのまま、少年と猫の追いかっこは数分間続いた。

少年はすっかり息が上がり、少しずつペースが落ち始める。

そんな少年の様子に気付いているのか、猫も少年に合わせ、ペースを落とす。

しかし、少年を待つ様子は全く見せず、猫は一定の距離を保ち続けている。

その時、猫は公園の中に入って行った。

少年は猫を見失わないよう、足を速める。

公園の中に入ると、猫は周りを確認し、そのままベンチに座る少女の下に向かった。

そして、猫は少女の足下で、1回だけ鳴いた。

少女は猫に視線を送った後、そのまま少年の方を向く。

「……こんにちは」

「うん……こんにちは」

ふと、視線を下に向けると、猫は少年から逃げる事を止め、2人の間を行ったり来たりしている。

その様子を見て、2人は笑った。

「あなたの猫？」

「ううん、捨て猫なんだ……。飼ってあげたいんだけど、家じゃ飼えないんだって……」

その時、猫は少女の膝の上に飛び乗った。

「私、気に入られちゃったみたい」

「そうみたいだね」

猫の様子を見て、2人はまた笑う。

「……家なら飼えるかもしれないよ」

「え、ホント!？」

「お母さんに聞いてみる。きっと大丈夫だよ」

「飼い主が見つかって良かった」

少年は嬉しそうに猫の背中を撫でる。

「ねえ……?」

「ん?」

少女は勇気を振り絞るように大きく深呼吸をした後、不安げな目で少年を見る。

「良かったら……私と友達になってくれない?」

「うん、良いよ」

答えがすぐ返ってきたため、少女は少しだけ驚いた様子を見せた後、嬉しそうに笑う。

その様子を見て、少年も笑った。

6月1日（火）

チャイムが鳴る中、二和木高校ふたわきに全力疾走で入って行く2人の男子生徒がいた。

学校に入った後も、2人は誰もいない廊下をそのままのペースで走り続ける。

「おら、諦めるなよ。お前の方が出席後なんだから、余裕だろ」

「いや……無理。時間稼ぎして……」

1人は少しずつペースを落とす。

しかし、前に行く生徒は構うことなく、階段を2段抜かしで上っていく。

3年生の教室がある階に到着すると、A組、B組の教室の前を通過し、C組の教室に入る。

「及川 秀人」

「はい！」

丁度、自分の名前を呼ばれ、秀人は即座に返事をした。

「及川、いつも言っているが……」

「説教は後で聞くから、早く出席取ってくれ」

「全く……次、久保 和孝」

「遅刻みたいだな」

「全く、お前らは……」

担任の村雨むらいめはため息をつく。

「次……」

「はい、久保います！」

和孝は肩で息をしながら教室に入ってきた。

「残念だったな。もう遅刻だよ」

「嘘！？」

「俺が時間稼ぎしたけど、無理だったよ」

秀人の言葉が嘘と知っているためか、周りの生徒は軽く笑う。

「とりあえず、これで俺の貯金は10だな」

「及川、久保、もつと早く来い。時間通りに来た日より、遅刻の方が多いぞ」

「俺は今日、間に合っただろ？」

「今日の話をしてるんじゃない」

それから、しばらく村雨の説教が続いた後、出席の続きを行い、朝のホームルームは終わった。

1時間目の授業が始まるまでの間、席が隣でもある秀人と和孝は適当に雑談をしていた。

「絶対、出席番号で不利だよな。俺、5番だよ？」

「そんな事で文句言うなよ。それに俺は4番でお前より不利だよ」

「あまり変わらないでしょ！というか、今日、時間稼ぎしてませんよね！？」

「俺、とても頑張ったんだ。今日の昼は奢ってもらいたいぐらいだよ」

「俺、遅刻したんですけど？」

「そもそも、お前、家から学校まで歩いて来れる距離じゃねえか。電車も使ってる俺に比べれば、お前の方が有利だろ」

その時、和孝の背後に1人の生徒が立っていたため、秀人はそちらに目をやる。

「お前達、相変わらず、反省の色が見えないな」

そこには険しい表情の遠野とのおの 夢ゆめがいた。

「もう夢ちゃんったら、朝から怖い顔しないで……」

その時、鋭い音が教室に鳴り響き、和孝は引っくり返る。

「久保、私を名前で呼ぶなど何度言えばわかる？」

「だからって、殴る事ないでしょ……」

「2人共、相変わらず仲が良いな」

「これをどう解釈したら、そう思えるの？」

和孝は起き上がると、席に座る。

「お前達、もつと早く来いといつも言っているのに、どうして聞かないんだ？」

「村雨と同じ事言うなよ。まあ、俺は進学考えてねえし、多少の遅刻は問題ねえだろ」

「そんな事言つて、卒業すら怪しいじゃないか」

「俺は和孝より10回も遅刻が少ねえんだよ。和孝が退学になったとしてもまだ余裕があるつて事だ」

「秀人、そういう所が汚いよね」

「和孝、殴つても良いか？」

「ごめんなさい」

「むしろ、俺よりも進学考えてる和孝の方が深刻だろ」

その時、1人の男子生徒が秀人に近付く。

「及川、ちよつと良いか？」

「ああ、大丈夫だけど、どうした？」

「今度の日曜、フットサルの大会出るんだけど、人数が足りないんだよ。悪いんだけど、また出してもらえないか？」

「日曜は空いてるから大丈夫だよ」

「マジか！？ありがとな。じゃあ、いつもの場所に12時集合だから」

「了解」

「あ、他から誘われても、その日は空けたままにしてくれよ？」

「だったら、大事な用事が入らねえよう祈つてろ」

「まあ、そう言つて、いつも来てくれるか。じゃあ、頼むからな」
秀人が誘いを受けたため、男子生徒は嬉しそうに席に戻る。

「秀人、相変わらず人気あるね。一昨日はバスケだったでしょ？」

「それは単なる練習だよ」

休日、秀人は他の男子生徒から助っ人のような形で呼ばれる事が多い。

どの部活にも所属していないが、秀人の運動神経は人並み以上で、様々な場面で大きな戦力になる存在だ。

「及川、スポーツも大事だが……」

「遠野、お前がやってる事、お節介って言うのわかってるか？」

「私は学級委員だから……」

「他のクラスというか、今までのクラスの学級委員はここまで口うるさくなかったよ」

「それは……」

夢は言葉を詰まらせる。

「それに遅刻なんて大した問題じゃねえだろ。俺はもっと他にすることあると思うけどな」

「私はただ……」

「わかってるよ。夢ちゃんは俺に気があるんだよね。だから俺と一緒に卒業したくて……」

直後に2発のパンチを受け、和孝はまた引っくり返る。

「何で、2発……？」

「名前で呼んだのと、気に障る事を言ったのとで2発だろ」

「あなたは友達が殴られてるのに随分と冷静ですね」

「正直、見慣れてるしな」

合計3発も殴られ、和孝はフラフラと立ち上がると、また席に座る。

「とにかく、2人共、明日は時間通り来い。良いな？」

「考えとくよ」

「……考えるだけか？」

夢は少しだけ寂しそうな表情を浮かべる。

「まだ何かあるのか？そろそろ授業始まるし、戻ったらどうだ？」

「……わかった」

夢は悔しそうに唇を噛んだ後、自分の席に戻った。

午前中の授業が終わり、ほとんどの生徒は昼食を買いに教室を出て行く。

昼食時、生徒の多くは構内で売られている弁当やパンを買っている。秀人や和孝もそれについては同じだ。

そして、弁当を買った後は立ち入り禁止となっている屋上に行き、2人で食べるのが日課になっている。

「あ、秀人、今日も学校終わったら、家寄ってくよね？」

「ああ、そのつもりだけど、何かあるのか？」

そこで和孝は意味深な笑みを浮かべる。

「何だよ？」

「来てのお楽しみだよ」

「だったら良いや」

「諦め早過ぎません！？もっと興味持ちましょうよ！」

関心を向けない秀人に和孝は泣きそうな表情を浮かべる。

「でも、俺たちって、ずっと男2人で華がないよね」

「むしろ、男2人で華があったら気持ち悪いだろ」

「あの……何でそんな話になるんですかね？」

和孝は呆れたような表情を見せる。

「最後の高校生活を満喫するためにナンパでもしようかね」

「生きる希望を失いたくねえなら、やめとけ」

「その言葉に生きる希望を失いそうなんですけど……」

冷めた表情の秀人を見て、和孝はため息をつく。

「秀人、女に興味ないわけ？」

「男に興味があるみたいだな聞き方するな」

「秀人、スポーツマンだし、もてるんじゃないの？」

「まあ、少なくともお前よりはもてるだろうな」

「あの……何でそこで俺を挑発するんですか？」

秀人はパンを食べ終えると、ジュースも飲み干す。

「恋愛とかバカらしいだろ」

「何で、そんな事言うのかな？結構、秀人って隠れファンいると思うんだけどね」

「俺は恋愛なんてしねえでも、今を楽しんでる。それで十分だろ？」

「秀人がそう思うなら、別に良いけど……」

和孝はそこで、もう1度ため息をつく。

「俺、先に戻るな」

「あ、待ってよ！」

和孝は慌ててパンを口の中に詰め込むと、秀人を追いかけた。

学校が終わると、秀人は和孝の家に遊びに行き、遅くまで入り浸る事が多い。

和孝の両親は共働きで、いつも帰りが遅い。

そのため、和孝にしてみれば、一人で過ごす暇な時間が減るという事で秀人を快く迎えている。

この日も学校が終わわり、秀人は和孝の家を訪れた。

「ちよつと準備するから、そこで待っててよ」

秀人をリビングに残し、和孝は自分の部屋に向かう。

そして、少しした後、駆け足で戻ってきた。

「準備出来たよ！早く来てよ！」

「ジュース、飲み終わってからな」

「何で、ジュース飲んでるんですか!？」

秀人は勝手に冷蔵庫を開けると、中にあったジュースを飲んでいた。

「ご馳走様」

秀人はジュースを飲み終わると、ようやく和孝の部屋に向かう。

「秀人、きつと驚くからね」

「謎の地球外生物を飼い始めたとか、その程度じゃ驚かねえからね」

「あの……ハードル高くないですか？」

バカな会話をしながら、2人は和孝の部屋に入る。

「は？」

「全自動麻雀卓を買ったんだよ！」

そこには部屋のほとんどを占有する形で、全自動麻雀卓が置かれていた。

「何でまた……?」

「この前、面白い噂を聞いてさ、俺も興味持つちゃってね」

「寝る時とかどうするんだよ？」

「大丈夫、これ、何とか押入れに入るから」

和孝は子供のように、はしゃいでいる。

しかし、秀人は冷めた表情を浮かべたままだ。

「2年前、この辺りの雀荘を荒らした伝説の高校生がいたらしくてね。俺もそんな伝説を作りたいと思って練習用に買ったんだよ」

「お前、この前、マジシャンになるとか言ってたか？」

「あれは俺に向いてなかったんだよ。これからは伝説の雀士を目指すよ」

「そっか、頑張れよ……」

和孝が突然、何かのめり込もうとする事はよくある事だ。

そして、その度にいつも無駄な浪費をするだけして、結局、何も得ないのだ。

3年連続で同じクラスとなり、自然と関わる事も多い和孝の性格を秀人はよく理解し、そして諦めてもいる。

「……で、これから、どうしようとしてる？」

「どうするって一緒にやろうよ。秀人、麻雀のルール知ってる？」

「知ってるけど……2人でやるのかよ？」

「別に4人じゃなくても出来るでしょ」

「2人でやってもつまらねえだろ」

秀人はため息をつきながら、麻雀牌に目をやる。

「俺の最大のライバルとしては秀人が1番相応しいからね。お互いに練習して強くなるうよ」

「いや、俺はそんな伝説を作るまで、やり込む気ねえんだけど……」

「ま、とにかくやろうよ」

「わかった、やれば満足なんだろう？」

他にやる事もないため、秀人は渋々承諾する事にした。

「あ、負けたら罰ゲームね」

その言葉に秀人は反応する。

「何か、やる気が出てきた」

「え？」

秀人が殺気立った気配を見せると、和孝は苦笑する。

「……じゃあ、始めようか」

サイコロを振った後、秀人の親から麻雀を始めた。

「ロン」

秀人の声。

「ツモ」

これも秀人の声。

「それは通らねえよ。ロン」

数分が過ぎ、3局終わった段階で、秀人は圧勝となっていた。

「秀人……麻雀強いね」

「お前が弱いだけだよ」

秀人は和孝に目をやると、笑みを浮かべる。

「罰ゲーム、遠野に決闘を挑むってのはどうだ？」

「俺、死んじゃうよ！」

「むしろ、決闘で勝つにするか。勝つまで挑戦し続けねえといけね

えとか」

「一生終わらないよ！」

そんな事を言いながら、2人は最後の配牌を終える。

和孝は手牌を確認すると、そこで固まった。

「どうした？早く捨てるよ」

「ちよっと待ってね」

和孝はしばらくの間、考え込む。

「何か、捨てる牌がないんだけど……」

「は？」

一瞬、その言葉の意味がわからなかったが、秀人は慌てて和孝の手牌を確認する。

「和がってる？」

「え……てことは？」

まだ、和孝が状況を理解していないようだったが、秀人は肩を落と

す。

それは、和孝の大逆転勝利を表していた。

麻雀牌をしまいながら、和孝は機嫌良さそうに笑みを浮かべている。

「天和なんて、単なるラッキーじゃねえか」

「俺、日頃の行いが良いからね。いや、これが伝説の始まりなのかもね」

「記憶つて、どれぐらい殴れば消えるんだろうな」

「真剣な目で怖い事言わないで下さい！」

「まあ、一生分の運を使い果たした訳だし、何もしなくても明日には死ぬか」

「不吉な事も言わないで下さい！」

「和孝君がどんな罰ゲームにしてくれるか、俺は楽しみでしようがないですよ」

妙に丁寧な言い方で秀人は和孝を威圧する。

「秀人、何か怖いよ……」

「ほら、和孝君、罰ゲームは何にするか決めましたか？」

秀人の迫力に和孝は顔を強張らせる。

「じゃあさ、秀人の好きな人を発表するとか……あ、その人に告白するとか……」

「恋愛に興味ねえって言っただろ。好きな人なんていねえよ」

秀人はある事を閃くと、笑みを浮かべた。

「いつそのこと、和孝が遠野に告白すれば良いだろ」

「え!？」

「お前ら、前から仲良いと思ってたんだよ」

「俺、本当に明日で命落としちゃうよ!それに俺の罰ゲームになつてるよ!」

「勝った事で遠野に告白する権利を得たって事にしろよ」

「……とても欲しくない権利なんですけど」

そこで、和孝は困ったような表情を見せる。

「秀人？」

「ん？」

「今、俺に言った事、夢ちゃんには言わないようにね」

「え？」

「俺と夢ちゃんが仲良いとかさ」

和孝がなぜ、そんな事を言うのかわからず、秀人は固まる。

「もしかして、本当に遠野の事、好きなのか？」

「違うよ！」

「今まで気付かなくて悪かったな。今度から気を使うよ」

「いや……まあ、良いや」

和孝は諦めた様子で、ため息をつく。

「あ、でも、誰かに告白するって良いかも。秀人、今まで誰かに告白した事ある？」

「ねえけど？」

「じゃあ、今回、練習って事で告白しようよ」

「告白って……じゃあ、相手は遠野か？」

「いや、それはダメだよ！」

「ああ、お前が狙ってるんだもんな」

「だから違うよ！とにかく、夢ちゃんはなしね」

「じゃあ、誰にするんだよ？」

「そうだね……」

和孝は少しの間、考えた後、何か閃いたのか笑みを浮かべる。

「ここは、学校一の美人にした方が盛り上がるよね」

「学校一の美人？」

「A組の立石たていし春奈はるなって知ってるよね？」

「知らねえよ」

「え！？嘘でしょ！？」

「他のクラスの生徒まで覚えてる訳ねえだろ。今までのクラスにもそんな名前の奴いなかったし」

スポーツを通して、男子とは関わりの多い秀人だが、女子とはそこ

まで関わりを持つ事がないため、クラスが同じになつた事がなければ、ほとんどの女子は他人になつてしまう。

「秀人、文化祭のミスコン知らないの？」

「ミスコン？」

「毎年、男子から票を集めて、うちの高校で1番の美人を選ぶってイベントがあるんだけど……」

「ああ、そういえば、投票用紙渡されたけど、毎年捨ててたな」

「何で、そんなことするかな？」

「というか、好みなんて人それぞれなんだし、そんなの集計してもしょうがねえだろ。好きなら直接伝えるつての」

「まあ、とにかく、そのミスコンに2年連続で選ばれてるのが、A組の春奈ちゃんなんだよね」

「そいつは美人なの？」

「うん、将来はモデルになるんじゃないかってぐらい美人なんだよね。春奈ちゃん、演劇部に所属してるんだけど、1年の文化祭の劇で、脇役なのに主役以上に目立っててさ……って文化祭の劇も見えないの？」

「いつも屋上で寝てるからな」

「今年は見ただ方が良いよ。あ、それで……」

秀人の知らない事が多過ぎるため、和孝の話は脱線を繰り返す。

「1年の時の劇で一気に男子の人気を集めて、1年なのにミスコンに選ばれた後、2年でも選ばれて、今度の文化祭では3連覇がかかっているつて、みんなの注目を集めてるんだよ。今度の劇は春奈ちゃんが主役をやるだろうし、3連覇は固いと思うんだけどね」

「で、その立石春奈つてのがどうしたんだ？」

「ああ、何だっけ？つて……」

和孝は自分が目的を見失っていた事に気付いた様子だ。

「秀人が春奈ちゃんに告白するのが罰ゲームなんだよ！」

「ああ、そうだったな。でも、俺はそいつの事、知らねえし、おかしくねえか？」

「その点は大丈夫なんだよね。春奈ちゃん、ミスコンに選ばれたぐらだから、色々な男子から告白されてるんだよ。ただ、春奈ちゃんには告白されても毎回、『他に好きな人がいるので、ごめんなさい』の一言で断ってるんだよね」

「告白を断る時の台詞としては定番だな」

「まあ、女子から妬まれる事も多くて、友達いないみたいだし、色々と苦労もしてるみたいだけどね」

和孝はそこで少しだけ言葉を詰まらせる。

「……春奈ちゃん、堂々として、人を寄せ付けない雰囲気みたいな持ってるからね」

「そんなのに告白して良いのか？」

「まあ、告白しても、みんなみたいにすぐ断られるだけだろうし、問題ないでしょ？」

和孝の言っている事が、いい加減に聞こえ、秀人はため息をつく。

「というか、随分と詳しいな」

「女子の情報なら俺に任せてよ」

和孝は自慢げな表情を見せる。

「というより、知らない方がおかしいよ」

「まあ、まとめると、A組の立石春奈って女子に告白するってのが罰ゲームで良いのか？」

「ここまでの詳しい説明を随分と簡略化してくれますね」

和孝は疲れ切ったような表情を見せる。

「あ、決行は明日ね」

「わかったよ。お前と遠野の決闘も明日な」

「え、何で俺まで罰ゲームする事になってるの!？」

和孝の慌てた様子を見て、秀人は笑う。

「やり方は、手紙で放課後、屋上に呼び出すとかにしようか？」

「お前に任せるよ」

「手紙の内容は……」

「お前に任せるよ」

「告白の言葉……」

「お前に……」

「これ、あなたの罰ゲームですよね!？」

「そうだけど、よくわからねえから、お前に任せるよ」

秀人はわざとらしく、大きな欠伸をした。

6月2日（水）

朝から和孝は上機嫌だった。

「秀人、放課後が楽しみだね」

和孝の言葉に、秀人は冷めた表情で特に反応しない。

「及川、久保」

振り返ると、そこには夢が立っていた。

「ちよっと待ってよ」

和孝は髪を掻き揚げる仕草をする。

「夢ちゃん、これから俺の事は伝説の雀士と呼んでくれないかな？」

「その前に私の呼び名を変えろ」

いつも通り和孝はパンチを受け、その場に崩れる。

「お前達、今日も遅刻だったな？」

「俺は昨日、間に合ってるから良いんだよ。サンドバッグ役は和孝だけにしろ」

「あなた、自分さえ良ければ良いんですかね!？」

「進学する気がないとしても、就職で内申が低かったら……」

「ああ、別に就職も考えてねえよ」

「……お前、将来どうするつもりだ？」

「別に決めてねえよ」

「もう高校3年生だぞ？少しぐらい……」

「進路相談は担任とやるもんだろ？お前にどうこう言われる筋合いはねえよ」

そこまで言われ、夢は諦めるように自分の席に戻る。

「秀人、夢ちゃんに少し優しくしてあげれば？」

「遠野、和孝がお前の事、また名前と呼んで……」

「何、報告してるんですか!？」

その時、飛んできたバッグが頭に直撃し、和孝は倒れた。

午前中の授業が終わり、秀人と和孝は昼食を買った後、3年A組の教室に向かった。

秀人の手には手紙を入れた封筒がある。

「立石つてのはどれだ？」

「えっと、前の方の席で……」

「というか、お前が渡して来い」

「何だよ!？」

「告白する本人が渡すって、おかしいだろ。この手紙、放課後、屋上に来いとしか書いてねえんだし」

「いや、もつと色々書きましようよ……」

「気持ちとは会って伝えるもんじゃねえのか？」

「……わかったよ。先に進まないし、俺が渡してくるよ」

和孝は秀人から手紙を預かるとA組の教室に入って行った。

「えっと、立石春奈ちゃんだよな？」

和孝の声を背後に聞きながら、秀人は自分の教室に戻り、席に着いた。

それから少しした後、和孝も教室に入ってきた。

「何で戻ってるんだよ!？」

「近くにいたら、俺からの手紙だと思うだろ」

「秀人からの手紙でしょうが!」

和孝のツッコミを聞くことなく、秀人は昼食を食べ始める。

「何か、今のところ、俺の罰ゲームみたいなんですけど……」

「気のせいだよ」

秀人は黙々とパンを千切っては口に運んだ。

放課後になり、秀人と和孝は屋上に来ていた。

「告白の言葉は自分で考えてよね」

「はいはい」

「俺はそこに隠れてるからね」

「というか、これ楽しいか？」

「秀人がもう少しやる気を出してくれれば、とても楽しめたと思うよ……」

和孝は後悔しているのか、肩を落とす。

「まあ、秀人がどんな告白をするか楽しみにしてるよ。どんな風に振られるかもね」

「というか、ここって立ち入り禁止だし、普通は来ねえんじゃないか？」

「だったら、また別の手段を考えるよ。じゃあ、そろそろ来ると思うからしつかりね」

和孝は物陰に身を隠す。

それから数分後、1人の女子生徒が屋上にやってきた。

「あの……」

「あ、本当に来た」

「え？」

「あ、悪い。えっと……立石春奈さん？」

「はい、そうですけど？」

春奈の手には秀人の書いた手紙が握られている。

「俺、3年C組の及川秀人。よろしくな」

「あ、3年A組の立石春奈です。よろしくお願いします」

春奈は礼儀正しく頭を下げる。

「その……今まで話した事ねえし、こんな事言うのはおかしいんだけど……」

秀人は春奈の目を見る。

「俺、お前の事が好きだ。俺と付き合ってくれ」

「早いよ」

思わず、ツツコミを入れてしまい、和孝は慌てて口を押さえる。

幸い、春奈が和孝に気付いた様子はない。

春奈は少しだけ驚いた様子を見せた後、呆然としている。

しばらくの間、2人はその状態のまま、立ち尽くしていた。

「あのね……」

「あ、ごめんなさい！えつと、驚いてしまつて……」
「まあ、いきなり知らねえ奴から告白されたら……」
「いえ、そういう訳ではないんです。その、及川さんの事……」
春奈はそこで顔を赤くすると、真っ直ぐ秀人を見た。
「私も好きです」
「……え？」
「こんな私で良かったら……よろしくお願いします」
春奈は深く頭を下げる。
「えつと……俺で良いの？」
「はい」
「あ、そう……あれ？」
「今はまだ、お互いの事を全然知らない状態ですが、これから及川さんの事、もつともつと知ろうと思います。私の事もたくさん知つて下さいね」
「ああ、了解……」
「あ、ごめんなさい。私、これから部活なんです」
「ああ、演劇部だよな？」
「はい、なので行かないといけないんですけど……」
そこで、春奈は携帯電話を取り出す。
「連絡先、教えてくれませんか？部活終わったらメールしますから」
「ああ、そうだな……」
断る訳にもいかず、秀人は素直に携帯電話の番号とメールアドレスを教える。
「じゃあ、後で連絡しますね」
春奈は照れくさそうな表情を見せた後、階段を下りて行った。
「……和孝？」
秀人は和孝がいる方向を睨むように見る。
「……良かったね。春奈ちゃんと両思いだよ」
和孝は苦笑しながら出て来た。
「どうするんだよ!？」

「そんな事言われても……」

秀人の迫力に和孝は少しだけ後ろに下がる。

「面倒な事になったな」

秀人は深いため息をついた。

秀人はいつも通り、和孝の家に行き、2人で今日の事を考えていた。

「『好きな人がいる』って楽に告白を断るための嘘だと思ったら、本当だったんだね。その相手が秀人だったと……」

「そんな呑気に考察するな」

2人は特に何も賭ける事なく、のんびりと麻雀をしている。

「でも、春奈ちゃん……何で秀人なんだろうね？」

「俺、初対面のはずなんだけどな」

「どこかで会ってたんじゃないの？」

「そう言われても……」

秀人は少しだけ考えたが、心当たりはなかった。

「まあ、今日、メールするって言ってたし、そこで嘘でしたって言えば大丈夫か」

「それはいくら何でもひどいよ！」

「じゃあ、どうするんだよ？」

「……とりあえず、ふりで良いから、付き合ってみなよ」

「俺、あいつの事、全然知らねえし、正直面倒なんだよな」

「少し付き合ってみて、やっぱり上手くいかないからって理由で別れるのが、1番傷付けない方法だと思っただけ……ほら、恋人は

3の付く数字で別れる確率が高いって話があるでしょ？」

「てことは、3日付き合えば良いのか」

「短過ぎるよ！3週間目、3ヶ月目、3年目だから！」

和孝の言葉に秀人はため息をつく。

「じゃあ、15日は付き合わねえとな」

「1番短い期間をチョイスしましたね」

和孝は呆れている様子だ。

「そうだ、付き合ってるって事、夢ちゃんには知られないようにしないかね」

「何で、そこで遠野が出て来るんだよ？」

「それは……」

和孝は少しだけ言葉を詰まらせる。

「ほら、夢ちゃんって頭、固いでしょ？それに洞察力もあるから、すぐに嘘がばれて大騒ぎになっちゃうよ」

「全部和孝のせいだって理由付けを考える必要があるって事か」

「俺、生贄ですか！？」

その時、秀人の携帯電話が鳴る。

「あ、春奈ちゃんからメール？」

「いや……電話だな」

秀人は携帯電話を手取る。

「まあ、放つとくか」

「いや、出なさいよ！」

「冗談だよ」

秀人は電話に出た。

「もしもし？」

「あ、春奈です。今、大丈夫ですか？」

「ああ、まあ、大丈夫だよ」

「メールしようと思ったんですけど、及川さんの声が聞きたくて、電話してしまいました」

和孝は聞き耳を立てて、春奈の声を聞き取ると少しだけ笑う。

「私達、恋人なんですよね？」

「……ああ、そうだよ」

「信じられないです」

「俺もだよ」

「あ、でも……ごめんなさい」

「どうした？」

「その……文化祭が近いので、当分は部活で時間が取れないかもし

れません」

「俺はそれで構わねえよ」

「それ、ストップ!」

和孝は携帯電話を奪い、春奈に会話が聞こえないよう、手で覆う。

「部活で忙しくて会えないのに、構わないって言うのはおかしいでしょ」

「ああ、そうだな。悪い、会う時間が少ない方が良いつて本心で答えてた」

「秀人……さっきも言ったけど、とりあえず恋人のふりしようよ」

「わかったから、携帯返せよ」

秀人は携帯を取り返し、会話を再開する。

「悪いな」

「誰かと一緒なんですか?」

「ああ、友達の家にいるんだ。でも、存在感のねえ奴だから、気にするなよ」

「そこまで言う事ないですよね?」

「もしかして、久保さんですか?」

「え?」

秀人と和孝は同時に声を発した。

「そうだけど?」

「いつも一緒に、仲が良いんですね」

「ああ、まあ……」

「そういえば、及川さんの手紙も久保さんが持ってきましたよね」

「俺が直接渡すのはおかしいと思ったんだよ」

「あ、それで……放課後はどこかへ行く時間が取れないと思うんです。なので、昼食……一緒に食べませんか?」

「え?」

そこで、和孝は簡単なメモを秀人に見せる。

そこには『OKして』と書かれていた。

「ああ……構わねえよ」

「本当ですか！？あ、及川さんって、いつもはどこで食べてますか？」

「いつも屋上で食ってる」

「あそこって、立ち入り禁止じゃないんですか？」

「誰も来ねえし、教師にばれなきゃ大丈夫だよ」

「そうなんですか？」

春奈は少しだけ笑う。

「じゃあ、私、明日のお昼は屋上で待ってますね」

「え、でも……お前、いつも友達と食べたりしてねえのか？」

明日も和孝とバカな話をしながら2人で食べる予定だったため、秀人は何とかこの話を破綻させようと試みた。

しかし、それは別の問題を引き起こす言葉だった。

「あ、その……私、友達いなくて、いつも1人ですから……」

そこで、秀人は和孝が言っていた話を思い出す。

「悪い、嫌な事、聞いちまったな……」

「良いんです。それに明日は1人じゃないですから」

「いや、それは……」

「あ、電車が来てしまったので、切りますね。明日、待ってますから」

駅のホームから電話していたのか、春奈の電話はそこで切れてしまった。

「……明日は教室で食うか」

「いや、行きなさいよ！」

「面倒だな……」

その時、秀人の携帯電話がまた鳴る。

「今度はメールだな」

秀人がメールを開くと、和孝も覗き込んで、メールの内容を確認する。

「『明日は及川さんの分の弁当も作るので、昼食は買わないで下さい』って熱々だね」

「和孝、殴つても良いか？」

「良くないよ！まあ、2人で昼を食べるぐらい良いんじゃないの？」

「2人つて、お前は来ねえつもりか？」

「行けるわけないでしょ！2人で春奈ちゃんの弁当を食べてる横で俺だけパンですよ！」

「だったら……お前も立石の弁当を食べれば良いだろ」

「俺、かなり空気読めない人ですね」

「そうだよ。知らなかったのか？」

「いきなり傷付く事実を突き付けしないで下さい！とにかく、俺は行かないからね」

「たく、友達思いのねえ奴だな」

「あなたに言われたくないんですけど……」

和孝は少しだけ不機嫌な表情を見せる。

「そういえば、春奈ちゃんつて、少し印象と違うよね？」

「俺はお前の話を聞いただけだから、わからねえよ」

「あ、そうだったね。昨日も話したけど、春奈ちゃんつて堂々としてて……」

「別にそんな事どうでも良いよ」

秀人は明日の事を考え、深いため息をついた。

6月3日(木)

この日、秀人は午前中の授業がいつもよりも早く終わったような、そんな感覚を持った。

「もう昼か……」

「秀人、行ってらっしゃい」

「俺、体調不良だ。代わりにお前が行け」

「何言ってるんですか!？」

「たく、友達失くしても知らねえからな」

「だから、あなたに言われたくないんですけど……」

秀人は意を決すると席を立つ。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

「お前達、今日の昼は一緒じゃないのか？」

突然、夢から声をかけられ、秀人は足を止める。

「いつも2人、屋上で食べてるだろ？」

「何で、夢ちゃんがそれを知ってるのかな？」

「前に見かけた事があるからな。あ、決して尾行したとかそういう事はないからな」

「誰もそんな事、疑ってねえよ」

「あの……殴られた俺を無視しないで下さい」

気付いた時には和孝が倒れていた。

「それで、今日は一緒じゃないのか？もし良かったら、私も一緒に食べようかと思ったんだが……」

なぜ夢がそんな事を言うのか不明だったが、春奈と2人で食べるよりもマシだと秀人は考えた。

「今日、他の女子もいるけど、一緒に食うか？」

「え？」

「秀人、つまらない冗談言っちゃダメだよ」

和孝は秀人の耳元に顔を近付ける。

「夢ちゃんには内緒にしるって言ったでしょ？」

「ああ、忘れてた」

「俺の話、もつと真剣に聞いてくれませんか？とにかく、夢ちゃんを屋上に向かわせちゃダメだからね」

「わかったよ」

「良い？今日は春奈ちゃんと2人で昼なんだからね？」

和孝が離れると、秀人は少しだけ考える。

「遠野？」

「何だ？」

「実は、和孝から遠野に話があるみたいなんだ」

「え！？」

「だから、今日の昼は俺1人で食うよ」

「ちよつと！？」

「俺から伝えちゃって悪いな」

秀人は和孝の肩に手を置く。

「遠野を引き離すのが優先事項だろ？」

「あなた、鬼ですね」

「まあ、お互い様だろ」

「……久保、話って何だ？」

「じゃあ、頑張れよ」

秀人は和孝の肩を叩いた後、1人で教室を出て行った。

秀人が屋上に着いた時、既に春奈はそこにいた。

「悪い、遅れたな」

「いえ、大丈夫です」

そこで、春奈は顔を下に向ける。

「もしかして、他の友達から誘われてましたか？」

「え？」

「私……自分の事ばかりで、及川さんの事を考えていませんでした」

「ああ、別にいつもは和孝と食ってるけど、バカな話して終わるだけだし、気を使う必要ねえよ」

「そうですか。それなら良かったです」

春奈は安心したように息をつく。

「とりあえず、座るか」

「あ、はい」

2人は適当な場所に座る。

春奈は2つの弁当箱のうち、1つを秀人に渡す。

「美味しくないかもしれませんが……」

「……弁当なんて初めてだな」

「え？」

「いつも、パンを買って食ってるからな」

秀人はそう言うと、弁当箱を開ける。

「……すごいな」

今まで弁当を作った事は1度もないが、それが、とても手間のかかった弁当だという事は秀人にもわかった。

「そんな……大した事ないです」

春奈は恥ずかしそうに顔を下に向ける。

「じゃあ、頂きます」

秀人は箸を使い、唐揚げを口に運ぶ。

「……うん、美味しいよ」

「本当ですか!？」

「ああ、俺、唐揚げ好きだしな」

秀人の言葉に春奈は嬉しそうに笑う。

それから、秀人は1つずつ、おかずを口に運ぶ。

「ああ、ホントに美味しい」

「嬉しいです」

「というか、お前も食べるよ」

「あ、そうですね」

見ると、春奈は弁当箱を開けてもいない。

「お前、料理上手いんだな」

「そんな事ないですよ……」

「全部、自分で作ったんだろ？冷凍食品じゃねえみたいだし、作るの大変だっただろ？」

「私、いつも弁当ですから、少し量が増えるぐらい、大丈夫ですよ」
秀人はそこで、春奈に視線を移し、しばらくそのままでした。

春奈は少しの間、照れくさそうに弁当を食べていたが、秀人の視線に気付くと顔を赤くする。

「あの……顔に何か付いてますか？」

「あ、いや、大丈夫だ。その……」

秀人は言うべきか迷ったが、結局自分の考えを言う事にする。

「お前、印象と違うな」

「え？」

この時、秀人は和孝の話を思い出していた。

「お前の事、堂々としていて人を寄せ付けない雰囲気を持つてるなんて言ってる奴がいたんだ。でも、今のお前、全然そんなんじゃないから……」

「幻滅しましたよね」

春奈は泣きそうな顔になる。

「私……及川さんが思っていた印象と全然違いますよね」

「あ、別にそれが悪いわけじゃねえからな。むしろ、今言った印象ってデメリットで良い事じゃねえだろ」

春奈に泣かれては困るため、秀人は慌てた調子で続ける。

「それに俺が言いたいのは、周りの奴が言ってた印象と違うって話だ。少なくとも、俺は初めから、お前はこんな奴だろうって思ってた。だから、俺は今のお前と一緒にいて、幻滅なんてするわけねえだろ」

途中から文章がまとまっていなと感じたが、秀人は最後まで言い切った。

「……ごめんなさい。私、勘違いしてしまって」

「あ、いや、悪いのは俺で……」

「及川さん、私の事、わかってくれてたんですね」

「え……いや、知らねえ事ばかりだよ」

春奈の機嫌取りをするつもりだったが、結果的に自分への好意まで良くしてしまっただと感じ、秀人は苦笑する。

「あ、時間あまりねえな。早く食わねえと」

「あ、そうですね」

それから、2人はほとんど会話もないまま、弁当を食べ終え、そのまま別れた。

秀人が教室に戻った時、和孝は自分の席で、うな垂れていた。

「昼、楽しめたか？」

「これを見て、楽しめたように見える？」

「はしやぎ過ぎて疲れたって解釈も出来るだろ」

「秀人のせいひどい目にあつたよ」

和孝は顔を上げる。

「話なんてないから、急遽考えたんだよ。それで、しょうがないから成績の話してさ……」

そこで、和孝はため息をつく。

「そうしたら、土曜の補習出ろって話になっちゃって……夢ちゃん、毎週出てるみたいだし、出なかつたら許さないって……」

「デートの誘いつて考えれば良いだろ」

「いや、無理なんですけど」

この学校では、毎週土曜日に3年生を対象にした学年合同の補習がある。

内容は受験対策等だが、希望者のみの参加で良いため、秀人や和孝は今まで1度も参加していない。

「まあ、お前の場合、成績悪いんだから、丁度良いだろ」

「安心してらみたいけど、夢ちゃんは秀人も呼ぶつもりだったからね」

「何だよ？」

「いつも一緒にいるんだから、俺だけって話にはならないよ」

「親孝行な俺は土曜、親の手伝いがあるから、行けねえな」

「今まで、そんな設定なかったよね!？」

「とにかく、俺は行かねえからな。1人で頑張れ」

夢から誘いがあっても、秀人は無理やり断ろうと考えた。

「……それで秀人の方は昼、どうだったの？」

「まあ、普通に話したただけだし、特に報告する事ねえよ」

「相変わらず冷めてるね……。というか、これから毎日、昼一緒に飲んでしょ？」

「そうなのか？」

「普通そうだと思うけど……」

「面倒だな」

秀人はそこで、わざとらしく何かに気付いた反応を見せる。

「じゃあ、明日も遠野の足止め頼むな」

「いや、無理です!」

「昼一緒にして、好感度上げろよ。気があるわけだし、問題ねえだろ？」

「だから、気があるって言うのは秀人の勘違いなんだけど……」
和孝は深いため息をつく。

「あ、一応言っておくけど、春奈ちゃんと、あまり仲良くなならないようにしなね」

「え？」

「別れを切り出し辛くなったら困るでしょ？」

「ああ、そうか」

「まあ、秀人の場合はそんな心配いらないか」

いつもと変わりなく、冷めた様子の秀人を見て、和孝は笑った。

この日、和孝に予定があったため、学校が終わると、秀人は真っ直ぐ家に帰った。

「ただいま」

「あら、秀人君、今日は早いよね」

母、由香里ゆかりは笑顔で秀人を迎える。

「今日は和孝に予定があつたんだよ」

「あら、そうなの？彼女でも出来たのかしらね」

「それは絶対ねえな」

秀人は由香里との会話を切り上げると、自分の部屋に入る。

普段、和孝と2人でいる事が多いが、1人になった時、秀人は小説を読んで時間を潰す事が多い。

この日もカバンから小説を取り出すと、夕食の時間まで読み進める。

「秀人君、夕飯出来たわよ」

「ああ、すぐ行く」

秀人はキリの良い所まで読んだ後、しおりを挟み、食卓に向かう。

「親父、帰ってたんだな」

既に食卓に着いている父、弘ひろしに秀人はそれだけ言った。

「秀人、今日は早いな」

「和孝君に彼女が出来て、今日はすぐ解散になったそうよ」

「いや、違うから……」

「秀人、お前も彼女作れ」

「そうよ、秀人君、きつともてるんでしょ？」

「俺と由香里が会ったのも、高校生の時だったな」

「ええ、そうね」

「その話は何度も聞いたから、そこでやめろ」

秀人は不機嫌な態度を取る。

「秀人、良い話は何度聞いても良い話なんだぞ」

「両親の出会いの話なんて1、2回聞けば十分なんだよ」

その時、秀人の携帯電話が鳴る。

秀人はそれが春奈からの電話だと確認すると、食卓を離れてから電話に出る。

「もしもし？」

「あ、春奈です。今、大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だ。部活、終わったのか？」
「はい、さつき終わりました」
「それで、今日はどうしたんだ？」
「あ、その……もし良かったら明日も昼食、一緒に食べませんか？」
「ああ、別に構わねえけど」
「じゃあ、明日もお昼、屋上で待ってます」
「わかった……って、用はそれだけか？」
「はい……ごめんなさい」
「まあ、良いか。また明日な」
電話を切った時、背後で2人の足音が聞こえ、秀人はため息をつく。
秀人が食卓に戻ると、両親は妙に上機嫌だった。
「由香里、今日は赤飯に変更だな」
「今からだと時間がかつちゃうわよ」
「いや、いくら時間がかかっても……」
「普通のご飯で構わねえからな」
秀人は不機嫌な態度のまま、椅子に座る。
「秀人、相手はどんな人なんだ？」
「別に彼女とかじゃねえからな。勘違いするなよ」
両親と仲が悪いわけではないが、両親の大人気ない部分を秀人は好きになれないでいる。
「彼女じゃないなら何なんだ？」
「ちよつとした手違いがあったんだよ。とにかく、ご飯にしてくれ」
「はいはい」
由香里は笑顔でご飯をよそう。
「頂きます」
「秀人君、今度家に連れて来てよ」
「だから違うって言ってるだろ」
「きつと秀人の事だから、由香里に似た優しい美人を連れて来るだろうな」

「弘さん、お世辞が上手なんだから」

「お世辞なんかじゃない。俺は由香里と結婚出来て……」

両親の会話を無視するように秀人は1人、黙々と箸を進めた。

6月4日(金)

「遠野、和孝が今日の数学の授業でわからねえとこがあったらしい。教えてやってくれよ」

「そうなのか？」

「俺は友達と約束があるから、行かねえといけねえんだ。じゃあ、頼んだからな」

「秀人、せめて俺の許可を……」

「じゃあ、和孝、頑張れよ」

この日の昼も和孝と夢と一緒にした後、秀人は屋上に向かった。秀人が屋上に着いた時、今日も春奈は先に待っていた。

「今日も待たせちまって悪いな」

「あ、私も今来たばかりですから、気にしないで下さい」
頭を下げた秀人に春奈は笑顔を向ける。

そのまま、2人は昨日と同じように適当な場所に座る。

「今日の弁当は、自信作なんです」

「昨日の弁当も美味かったけどな……」

そこで、秀人は春奈が手に持っている物を見て、固まる。

「重箱？」

「あ、はい」

春奈は嬉しそうに重箱を開け、そこに並べる。

「2人で食べるなら、この方が良いとお母さんからアドバイスをもらったんです」

「……確かに豪華だな。豪華過ぎて食うのがもったいねえ気がするよ」

秀人は少しだけ呆れたように苦笑いを浮かべる。

「そんな事言わないで下さい。一緒に食べましょう」

春奈はそう言いながら、秀人に箸を渡す。

「何か、無理させてるみたいで悪いな」

「そんな事ないです。お母さんも言っていました。好きな人のためにお弁当を作る事は楽しいです……」
そこで春奈は顔を赤くする。

「あ、私、恥ずかしい事を言ってしまった」

「1人で盛り上がつてるとこ悪いけど、食って良いか？」

「あ、ごめんなさい。たくさん食べて下さい」

「じゃあ、頂きます」

「私も頂きます」

弁当を食べ始め、2人は自然と黙ってしまった。

次第に秀人は黙ったままの状態が気ましくなり、話題を振る事にする。

「そつえば……」

「はい？」

「立石って親と仲良いのか？」

「え？」

「さつき、弁当の事でアドバイスもらったとか言ってたたる？」

「あ、はい、良い方だと思えます」

春奈の穏やかな表情を見て、秀人は春奈と両親の仲が良いものなのだろうと感じた。

「私、友達がないので、悩みは全部、両親に相談してるんです」

「じゃあ、お前の親は、俺の事も知ってるのか？」

「あ、はい。いけなかつたでしょうか？」

「いや、別に構わねえけど……」

春奈の親公認の仲となっている事を知り、近いうちに別れを切り出そうと考えている秀人は複雑な気持ちになる。

「及川さんは両親に私の事、話していませんですか？」

「俺の親は子供っぽいと言つか、親らしくねえからな。昨夜、電話を盗み聞きしたのか、感付いてるみたいではあったけど、自分から報告する気はねえよ」

「もしかして、両親と仲が良くないんでしょうか？」

「いや、仲は良いよ。ただ、親子というより友達みたいな感覚なんだ。親の威厳なんて全くねえしな」

春奈が気を使うような雰囲気だったため、秀人は明るいう口調にした。「まあ、基本的に俺は、いつも放つとかれてるよ。親にとって、俺は大切な1人息子のはずなんだけどな……」

「……あれ、及川さん、お兄さんはいないんですか？」

「俺、1人っ子だよ。立石は兄弟とかいるのか？」

「……私も1人ですよ」

そこで、秀人は春奈が納得のいかない表情を見せている事に気付く。

「何かあったか？」

「あ、いえ、何でもないです」

「というか、さっきから全然食べてねえだろ」

「及川さんのために作ったんですから、及川さんに食べてもらえれば十分ですよ」

「いや、1人じゃこんなに食べねえから」

「あ、そうですね」

そのまま2人はまた会話がなくなり、食べる事に集中する。

そして、昼休みが終わる10分前に全部食べ終えた。

「ご馳走様。美味かったよ」

「良かったです」

そこで、春奈は秀人に気を使うような素振りを見せる。

「あの……及川さんって、休日は何してますか？」

「和孝と遊んだり、フットサルとかバスケやったり、そんな感じだけど？」

「私、明日は午前中に補習出た後、午後は部活で、時間が取れないんですけど……」

「休みの日まで学校に行くのか？」

「あ、はい。補習は毎週出てますし、部活はもうすぐ文化祭なので、練習しないといけないんです」

「大変だな」

「あ、それで……明後日は1日都合が空いているんです」
春奈は目を閉じると、深呼吸をする。

「良かったら、私とデートしてくれませんか!？」

不安げな表情を浮かべ、春奈は秀人の目を真っ直ぐ見る。

「ああ、えっと……」

明後日、秀人はフットサルの大会に参加する事になっている。

しかし、春奈が今、どれ程の勇気を振り絞っているのかと考えると、行けないとは言えなくなってしまった。

「……俺も明後日は予定ねえし、構わねえよ」

結局、秀人は春奈の誘いを受ける事にした。

「本当ですか？」

「ああ、ホントだよ。それで、どこか行きたい所あるのか？」

「あ、えっと……ウインドウショッピングはどうでしょうか？」

「ウインドウショッピング？」

「色々な店を見て回るんです。私、及川さんの事、もっと知りたいですし、私の事も知ってもらいたいので……」

「確かに、普段買ってる物なんかがわかって良いかもな。そういえば、立石の家ってどの辺なんだ？」

「三枝谷駅の近くになります」

「俺と同じ路線だったんだな。俺は鹿島野駅だから、お前よりも少し遠いけどな」

秀人はそこで少しの間、頭を働かせる。

「三枝谷駅から1駅の所にデパートあったよな？そこにするか？」

「はい、私はそれで構わないですよ」

その時、授業開始5分前を知らせる予鈴が鳴る。

「じゃあ、時間とかは電話かメールで決めるか」

「そうですね」

春奈は慌てて弁当をしまう。

「じゃあ、またな」

「はい、また」

秀人は屋上で別れを告げると、春奈を残して足早に教室に向かった。

教室に入ると、和孝は昨日と同じように、うな垂れていた。

「今日もはしゃいだようだな」

「いや、違うから……」

和孝はすっかり元気を失くしている。

その時、夢が険しい表情で近付いてきた。

「おい、及川？」

「何だよ？」

「明日の補習、お前も出る」

「出るわけねえだろ」

「久保も出るんだ。お前も一緒に出れば良いだろ」

「お前らと違って、俺は進学する気ねえんだから、補習出る意味ねえだろ」

「しかし……」

「それに明日は用事があるんだよ」

秀人はそこで、明後日の春奈との約束を思い出す。

「そういえば、和孝って明後日暇か？」

「え……まあ、暇だけど？」

「そっか」

秀人は席を立ち、先日、フットサルの大会に参加するよう、お願いしてきた生徒に近付く。

「なあ？」

「ん？」

「悪いんだけど、明後日、予定が入って大会出れなくなっちゃったんだ」

「え？」

「本当に悪いな」

「及川が断るなんて珍しいな。でも、そうすると、メンバーが足りないんだよな……」

「一応、俺の代わりに和孝が参加出来る」

「久保が？前に参加してもらったけど、戦力にならなかっただろ」

「メンバーさえ揃えば、大会には出られるだろ？」

「……この際、文句は言えないか」

「今度、埋め合わせするよ」

「いや、及川にはいつも助けてもらってるし、たまにはしょうがないと思うよ」

「悪いな。大会、頑張ってくれ」

秀人は安心したように息をついた後、席に戻る。

「どうしたの？」

「何でもねえよ」

断わる機会を与えないよう、秀人は明日、和孝に先程の話を伝える事にした。

この日も秀人は和孝の家に行き、数時間程遊んでいたため、帰りが遅くなった。

駅の改札を抜け、秀人はホームで電車が来る時間を確認する。

「及川さん」

そんな声をかけられ、秀人は振り返る。

そこには笑顔の春奈がいた。

「今、帰りですか？」

「ああ、和孝の家が近いから、よく寄ってから帰るんだ」

「私もさつき、部活が終わったところなんです。一緒に帰りませんか？」

「ああ、別に構わねえよ」

帰る方向が同じで、断わるわけにもいかないため、秀人は素直に春奈の提案を受ける。

秀人はふと、周りに目をやり、他の生徒がいないか確認する。

「他の部員はまだなのか？」

「あ、私より先に帰りました。私、部長ですから、後片付けもある

ので、いつも遅くなってしまうんです」

「お前が部長なのか？」

「はい、3年生、私しかいませんから……」

春奈は照れくさそうに笑う。

「先輩、厳しい方ばかりでしたので、同学年の方はみんな辞めてしまったんです」

「それは残念だな……」

春奈の言葉から、秀人は、この学校の部活に対する取り組み方を思い出していた。

「実力至上主義って言うんだらうな」

「え？」

「この学校の部活、大会で良い成績を残したりするのが全てって感じだろ？演劇部も毎年、大会に出てるって聞いたしな」

「……確かにそうかもしれませんが」

「競争意識を駆り立てるって点では良いかもしれねえけど、そのせいで躍起になる奴とかがいるんだよな。立石は劇で主役以上に目立つちまったらしいしな」

「え？」

「だから、先輩から目を付けられたんだろ。立石だけじゃなく、同学年の奴も標的にされたんじゃないかねえか？」

「……及川さんの言う通りですよ。私の学年に対しては特にひどかったです。それで、他の方はみんな辞めてしまいました」

春奈はその時の事を思い出しているのか、悲しい表情を見せる。

「嫌な話して、悪かったな」

「あ、いえ……今は先輩も卒業してしまっただけ、そんな事ないですから。それに今年から顧問をされている神楽先生はとても優しいんです」

「確か……英語の先生で、立石のクラスの担任でもあるよな？」

4月から英語を教えている女性教師、神楽の事を秀人は思い返す。

「はい、そうですよ」

その時、電車が来たため、2人は乗ると、空いている席に並んで座った。

「あの……？」

「ん？」

「及川さんは部活、入ってないんですよね？」

「時々、ヘルプで練習に参加したりする事はあるけどな」

「それって、先程話した事が理由ですか？」

「……そんなところだよ。色々な部活の見学に行ったけど、楽しいそんな雰囲気じゃなかったから、入らなかつたんだ。そもそも、特別やりたい部活もなかつたしな」

秀人は窓の外の景色に目をやる。

「部活動って大変ですからね」

「でも、お前は演劇部、楽しんでるんだろ？」

「はい、今は楽しいです。去年までは嫌な役ばかりでしたので、辛かつたんですけど……」

「今まで、どんな役だったんだ？」

「え？」

「あ、俺……文化祭はサボってる事が多くて、劇とか見てねえんだよ」

「そうだったんですか？」

「悪いな」

「いえ、先程も言いましたけど、嫌な役ばかりでしたから、あまり人に見せたくなくなつたですし……」

春奈は、ため息をつく。

「そんなに嫌だったのか？」

「主役に意地悪する悪人の役等でしたので……威張っていて、言葉使いも悪くて、好きにはなれない役でした」

春奈の話から、秀人は周りの人が持つている春奈の印象が、劇で演じた役のせいで作られたものなのだろうと考える。

「でも、主役より目立ってたんだろ？」

「私はそんなつもり、なかったんです。ただ、どんな役でも精一杯演じただけなんですけど……」

「でも、そんな役を演じてミスコンに選ばれるなんてすごいな。今年は3連覇がかかっているんだろ？」

「それも、あまり嬉しくないんです。気付いたら選ばれてしまった……」

「俺も好きじゃねえんだよな。好みのタイプなんて人それぞれなんだし、そんなもの集計しても意味ねえだろ？だから、いつも誰にも投票しねえで投票用紙、捨ててるんだよ」

「え？」

「そもそも好きなら直接伝えろっての」

そこで、春奈が笑っていたため、秀人は話を止める。

「どうした？」

「いえ、及川さんの言う通りだと思ひまして」

春奈の笑顔を見て、秀人も自然と笑顔になる。

「あ、そういうえば、お昼に言い忘れていた事がありました……」

「ん？」

「及川さん、補習は出ないんですか？」

「俺、進学とか考えてねえから、卒業さえ出来れば良いんだ。だから、出るつもりはねえよ」

「そうですね……」

「何かあるのか？」

「……私達、今まで一緒に授業を受けた事、ないじゃないですか？」

「まあ、クラスが一緒になった事ねえしな」

「でも、補習なら小講堂を使って学年合同でやりますし、席も自由なので、一緒に受けられるじゃないですか？」

「別に補習なんて、一緒に受けたところで何もねえだろ」

「そうかもしれませんが、私は及川さんと一緒に受けたくて……」

春奈は顔を下に向ける。

「ごめんなさい」

「別に謝る事ねえだろ」

春奈の様子を見て、秀人は困ったようにため息をつく。

「補習、何時からだ？」

「9時からですけど？」

「いつもより30分遅いんだな。あと、途中で抜けたりしても良いのか？」

「はい、途中から参加したり、抜けたりも出来ます。私も明日は部活があるので、午前中しか出ませんから」

「明日の科目は？」

「あ、日程表ありますよ。及川さんにあげます」

「お前の分がなくなるだろ」

「私、スケジュール帳にメモしてありますから、大丈夫です」

補習の日程表を渡され、秀人は少しだけ悩む。

その時、次の停車駅が三枝谷駅である事を伝えるアナウンスが聞こえた。

「私、次で降りますね」

「ああ……」

そこで、秀人は決心するように大きく息を吐く。

「気が向いたら、補習行くよ」

「え？」

「あくまで気が向いたらだからな。行くとしても遅れるかもしれないねえし……」

「はい、待ってます」

春奈は笑顔を見せる。

「気が向いたらって意味わかるか？あまり期待されても……」

「及川さん、きつと来てくれるって信じてます」

春奈の真っ直ぐな目を見て、秀人は何も言えなくなってしまうた。

その時、電車が三枝谷駅に到着した。

「じゃあ、また明日」

「ああ、また明日な」

春奈は電車から降りると、振り返り、電車が出発するまで秀人に笑顔に向けていた。

電車が駅を離れた後も秀人は春奈の笑顔を思い返す。

「行かねえとダメだよな……」

秀人は小さな声でそうつぶやいた。

6月5日(土)

9時から5分程遅れ、秀人は小講堂の前にいた。

駅から走れば間に合いそうではあったが、補習で出欠を取るわけでもないため、秀人はのんびりと歩いて来た結果、こうして遅刻してしまった。

秀人はなるべく音を立てないようにドアを開け、中に入る。

3学年全員が入れる小講堂の、半分近くの席が埋まっていたため、

秀人は予想以上に来ている生徒が多い事を知り、少しだけ驚く。

自由席のため、生徒は仲の良いもの同士、固まって座っている。

そのため、後ろの方の席に1人で座っている春奈を秀人はすぐに見つける。

そして、秀人は特に何も言う事なく、春奈の隣に座る。

「あ……」

「悪い、遅れた」

「でも、ちゃんと来てくれました」

既に補習が始まっているため、2人は声を落とす。

「いつもこの辺に座ってるのか？」

「はい、そうですね？」

女子生徒のほとんどは前に座っている。

きつと、その中には春奈のクラスメイトもいるはずだ。

しかし、春奈はその中に入る事が出来ず、こうして後ろの方の席に座っている。

秀人は春奈の性格からそんな事を考える。

「今、古典やってます」

「え、ああ……」

秀人はカバンから教科書を取り出すと、春奈が教えてくれたページを開く。

進学を考えていないため、真剣に勉強をする事はほとんどないが、

秀人は平均以上の成績を持っている。そのため、補習の内容も十分に理解する事が出来る。時々、秀人が春奈の方へ目をやると、自分の事を心配そうに見ていた春奈と目が合った。そして、春奈は少しだけ顔を赤くした後、すぐにまた前を向いた。そんな事を繰り返しながら、秀人と春奈は補習を受けていた。

9時50分になり1科目の補習が終わった。

このまま、10分の休憩となり、午前中はこうして12時前までに3科目を受ける事になっている。

生徒達は周りの友人と雑談をする等、普段の休み時間とほとんど変わらない時間を過ごしている。

「次は数学か？」

「はい。その後は神楽先生の英語です」

「数学は村雨なんだよな」

担任の村雨に見つかり、何か言われる可能性が高いため、秀人はため息をつく。

その時、秀人は周りにいる生徒の多くが自分と春奈を見ている事に気付く。

「何で秀人がいるの？」

「ああ、和孝もいたのか？」

和孝は驚いた表情を秀人に向けている。

「どこに座ってたんだ？」

「夢ちゃんに言われて、前の方に座らされたんだけど……」

そこで、和孝は春奈に目をやる。

「秀人が補習出るなんて珍しいよね」

「言いたい事はわかるから何も言っな」

「春奈ちゃん、俺、久保和孝！」

「はい」

「俺、今、麻雀にはまってて、伝説の雀士を目指してるんだよ！」

「そうですか」

「……………今日、良い天気だね！」

「そうですね」

春奈は和孝と目を合わせる事なく、素っ気ない返事をするだけだ。

「俺、避けられてるのかな？」

「和孝ごときと話す時間がもったいないねえんだろ」

「あなたはどうして人が傷付く事をバシバシ言うんですかね？」

和孝は春奈から相手にされなかったため、ため息をつく。

「というか、2人並んで座ってて良いの？」

「問題あるか？」

「いつも1人でいる女子が、今日だけは男子と一緒に座ってる。それを見て、秀人はどう思う？」

「何も思わねえけど？」

「秀人に聞いた俺がバカだったよ」

「ああ、お前はバカだよ。今頃気付いたのか？」

「あのね……………」

和孝は呆れたような表情を浮かべる。

「及川も来たのか？」

声が出た方に目をやると、そこには和孝同様、驚いた表情の夢がいた。

「えっと……………何か俺に会いたくて来たみたい」

「和孝、わきまえろ」

「それ、どういう意味ですか？」

夢はそこで春奈に目をやる。

「確か、立石だったな？」

「知ってるのか？」

「去年、同じクラスだった。ただ、話した事はほとんどない」

春奈は夢と目を合わせようとせず、下を向いている。

「及川、何で立石の隣に座ってるんだ？」

「あれだよ……………空いてる席に座っただけでしょ」

秀人と春奈の関係を隠すためか、和孝はそう言い訳した。

「席は他にも空いてるぞ？」

「ほら、1人だと寂しかったんだよ」

「私は及川に聞いてるんだが、何で久保が答えるんだ？」

夢の言葉に和孝はそれ以上何も言えなくなってしまう。

「立石もこんな奴が隣で嫌じゃないのか？」

「別に嫌じゃないです」

春奈は相変わらず、夢と目を合わせようとしない。

その様子は、まるで周りを拒絶しているようだ。

「そろそろ始めるぞ」

その時、村雨がそう言いながら入ってきたため、夢は自分がいた席に戻る。

「及川、久保、何でいるんだ？」

「別に参加するのは自由だろ？」

予想通り、村雨から声をかけられたため、秀人は不機嫌な態度を取る。

「俺は席に戻るからね」

和孝は前の方の席に戻った。

「……立石、どうかしたのか？」

秀人は春奈の方へ顔を向ける。

「あ、ごめんなさい」

「いや、別に謝る事はねえけど……」

和孝や夢に対する春奈の態度が、秀人にとっては疑問だった。

「私、初対面の人が相手だと緊張してしまっ……」

「いや、2人共、初対面ではねえだろ。遠野なんて同じクラスだったんだろ？」

「あ、その、何を話せば良いのかわからなくて……」

「人見知りって事か？」

「あ、はい」

その様子から、秀人は春奈に友人が出来ない1番の理由が何なのか

理解する。

「でも、俺とは普通……でもねえけど、話出来るだろ？」

「及川さんは特別なんです」

「特別って……？」

「よし、じゃあ始めるぞ」

その時、数学の補習が始まったため、2人は話を中断した。

数学の補習が終わった後の休憩時間、秀人は夢に何か言われる事を避けるため、トイレで時間を潰してから席に戻った。

「あ、及川さん？」

「ん？」

「今日のお昼……」

秀人はそこで春奈の荷物を確認する。

そして、春奈が今日も弁当を用意して来ている事に気付く。

「また屋上で食うか？」

「あ、はい」

秀人の言葉に春奈は嬉しそうな反応を見せる。

「でも、和孝とか遠野に捕まると面倒だな……」
前の方に座っている2人の背中を順番に確認し、秀人は頭を働かせる。

その時、神楽がやってきて、英語の補習が始まる。

神楽は若いいためか、男子生徒だけでなく、女子生徒からも人気がある。

この補習に限り、受ける生徒の人数が少しだけ多くなっている事もその表れだ。

また、勉強を教えるのも上手で、秀人にとっても英語の授業は好きな授業の1つとなっている。

ただ、この日は春奈の隣に座っているためか、頻繁に神楽と目が合う気がした。

「なあ、立石？」

「はい？」

補習が終わる10分前になり、秀人は春奈に声をかける。

「補習が終わったなら、すぐに出られるよう準備してくれ」

「え？」

「和孝や遠野に捕まる可能性があるんだ。出来れば……2人きりが良いだろ？」

少しだけ抵抗を覚えたが、和孝達に捕まるよりはマシと考え、秀人はそう提案した。

「あ、はい」

春奈は簡単に荷物をまとめる。

「じゃあ、今日はここまでです」

予定よりも3分程早く、英語の補習は終わった。

「じゃあ、行くか」

「はい」

秀人と春奈はすぐに席を立つと、誰よりも早く小講堂を出て、屋上に向かった。

屋上に出ると、秀人は大きく伸びをする。

「休みの日に勉強すると疲れるな」

「今日は来てくれて、ありがとうございました」

「立石は、この後、部活だろ？」

「はい」

「じゃあ、俺は昼食ったら帰るよ」

「え？」

春奈は少しだけ笑う。

「午後の補習は受けないんですか？」

「教科書もノートも持って来てねえんだよ」

「……私のために来てくれたんですね」

春奈は少しだけ顔を赤らめる。

2人はいつも通り、適当な場所に座り、春奈の弁当を食べ始める。

「立石、ホント料理上手だよな」

「ありがとうございます。でも、それはきっと、お母さんのおかげだと思います」

春奈は照れくさそうに笑う。

「あと、明日の事なんですけど、お昼に集合しませんか？」

「俺はいつでも構わねえよ」

「じゃあ、12時に集合して、一緒に昼食を食べませんか？」

「ああ、それで良いよ」

「それで、昼食を食べ終えた後、デパートに行きましょう」

春奈はスケジュール帳にメモを取りながら、明日の計画を立てた。

「そういえば、部活って何時からだ？」

「午後1時からです」

「そっか、頑張れよ」

「はい、頑張ります」

秀人は会話をしながら、春奈の様子を確認していた。

今の春奈は緊張している様子ではあるが、普通に会話の出来る女子と何ら変わらない。

先程、和孝や夢の前で見せた春奈の様子は、秀人にとって意外なものだった。

しかし、和孝の話を聞く限り、他の人にとっては、あれが春奈で、秀人と一緒にいるこの春奈の方が意外だと感じるのかもしれない。そんな事を秀人は考えていた。

2人は昼食を終えた後、大講堂に向かった。

「今日は当日と同じステージでの練習なんです」

春奈の嬉しそうな様子を見て、秀人は春奈が本当に演劇が好きなのだと感じる。

「俺はこのまま帰るからな」

「はい、今日は本当にありがとうございました」

春奈は足を止めると礼儀正しく頭を下げる。

「あ、やっぱり2人一緒だったのね」

そんな声が聞こえ、2人は声がした方に目をやる。そこには神楽がいた。

「立石さんと及川君、仲良かったのね」

神楽は少しだけ詮索するような目付きで2人を見る。

「もしかして付き合ってるのかしら？」

「そんなんじゃないです！」

春奈は顔を真っ赤にし、即座に否定した。

その様子を見て、神楽は笑う。

「お前、隠し事とか苦手だろ？」

「ごめんなさい……」

春奈は隠すように顔を下に向ける。

「じゃあ、俺は帰るから」

「及川君、午後の補習は出ないの？」

「はい、午後は用事があるんです」

「それじゃあ、しょうがないわね」

神楽は秀人の言葉が嘘だと気付いているのか、意味深な笑みを浮かべる。

「じゃあな」

「はい、明日、お願いします」

「あら、明日はデートかしら？」

「あ、今のはその……」

春奈と神楽のやり取りを見て、少しだけ笑った後、秀人は学校を後にした。

秀人は家に帰ると、読み途中だった小説の続きを読んでいた。

その時、携帯電話が鳴り、秀人はすぐに出る。

「もしもし？」

「秀人、何で途中からいなくなっただよ？」

和孝の泣きそうな声に秀人は笑う。

「お前と夢、2人きりにするべきだと思って、気を使ったんだ。感謝しろ」

「あの後、俺がどれだけフォローしたか、わかってます？」

「その場にいなかったんだ。わかるわけねえだろ」

「そうですね……」

「あ、和孝に言う事があったんだ」

「ん？」

「明日、俺、フットサルの大会出れなくなったから、お前が代わりに出る」

「え？」

「もう、他のメンバーには和孝が行くって伝えてある。行かなかったら信用問題になるから行けよ」

「あなたは本人の許可を取らずに何でそんな事、決めちゃんですかね？」

「あれだ。和孝、最近運動不足みただから、俺が気を使って、大会に参加出来るようにしたんだ。俺、えらいだろ？」

「一言ぐらい謝ってくれても良いんじゃないかな……」

「悪い」

「それだけですか!？」

「一言で良いって言っただろ」

和孝はそこで軽くため息をつく。

「もしかして、明日、春奈ちゃんとデート？」

「……まあ、そんなとこだ」

「秀人、春奈ちゃんと仲良くなり過ぎちゃダメって言ったの覚えてる？」

「しょうがねえだろ。断れなかったんだよ」

「用事あったんだから、それ言えば良かったんじゃないの？」

「まあ、そうなんだけどな……」

秀人は言葉を詰まらせる。

「……ところで、春奈ちゃん、秀人のどこを好きになったのか聞いて

た？」

「そんなの聞くわけねえだろ」

同じ質問を返される可能性が高いため、秀人はその事を聞かないようにしている。

「それで、明日はどこに行くの？」

「ウィンドウショッピングとか行ってた。2人で食事したり、買い物したりして、理解を深めたいらしい」

「秀人、繰り返すようだけど、あまり春奈ちゃんと……」

「わかってるよ」

「なら良いけどね」

和孝は軽く笑う。

「秀人君、そろそろ夕飯よー！」

由香里の声は電話先の和孝にも届いた。

「そろそろ夕飯みたいだから、切るよ。明日、大会の方、頼んだからな」

秀人は最後に集合場所や時間を和孝に伝えてから、電話を切った。

その後、秀人が食卓に行くと、妙に上機嫌な両親が待っていた。

「秀人君、明日はデートよね？」

「また盗み聞きかよ」

秀人は不機嫌な態度で椅子に座る。

「明日は昼も夜も飯いらねえから」

「どこで食べるつもりなんだ？」

「別にその場で決めるから、まだ決めてねえよ」

「デートは男がエスコートするものなんだぞ！」

弘は突然怒り出すと、食卓を後にし、少しした後、戻ってきた。

「これで調べる」

弘は『デートマニュアル』というタイトルの本を差し出す。

「何だよこれ？」

「由香里とサプライズデートをする時のために買ったんだ」

「それ、お袋の前で言ったらサプライズにならねえだろ……」

「私、聞かなかつた事にしますね」

「さすが由香里！」

両親のバカなやり取りを放置したまま、秀人は本を開く。

今まで、デート等した事がないため、本音を言えば何をすれば良いか、全くわかっていない。

そんな秀人にとってみれば、この本は必要なものと言える。

「少しの間、借りるよ」

「どこに行くのか、教えてくれれば、アドバイスしてやるぞ？」

「言ったら、ついて来る気だろ。1人で調べるよ」

秀人は後で本を読む事にし、そのまま閉じた。

6月6日(日)

秀人は昼前に目を覚ますと、簡単に支度を終え、家を出る事にした。

「秀人、バツチリ決めて来い！」

「秀人君、今夜は赤飯よ！」

「行ってきます。あと、夕飯はいらねえって言っただろ？」

両親の声援を簡単にかわし、秀人は待ち合わせ場所に向かった。

本に載っていたアドバイスから、秀人は待ち合わせ場所に20分程、早く着くように家を出た。

しかし、予想以上にスムーズに移動した結果、30分も早く到着してしまった。

秀人は待ち合わせまで時間を潰そうと考え、待ち合わせ場所を軽く見た後、近くのコンビニに向かう。

しかし、少しだけ考えた後、足を止めた。

「おかしいな……」

秀人は慌てて、待ち合わせ場所に向かうと、そこにいた春奈に近づく。

「立石？」

「あ、及川さん！」

春奈は嬉しそうな笑顔を見せる。

「待ち合わせ時間って12時だよな？」

「はい、そうですよ」

「今って、11時半だよな？」

「そうですね」

「何でこんな早くにいるんだよ？」

「及川さんを待たせてはいけませんので……それに及川さんも早く来てくれました」

「ああ、じゃあ……ちよつと早いけど昼飯食いに行くか」

春奈が何時からここにいたのか気になったが、秀人はそれ以上詮索

する事なく、近くの Pasta 屋に向かった。

時間が少し早い事もあり、2人はすんなりと席に通された。

「ここ、素敵な店ですね」

「俺も初めて来るけどな」

「この店、何で知ったんですか？」

「あ、えつと、口コミだよ」

マニュアル本を読んだ等、言えず、秀人は苦笑する。

2人はメニューを開くと、何を頼むか考える。

「……決まったか？」

「あ、はい、カルボナーラにします」

「じゃあ、注文するか……」

2人はそれぞれ注文すると、少しの間、話題がなくなり、無言になつてしまった。

「……あの？」

「ん？」

そんな沈黙を破ったのは春奈だった。

「私、男の人と……こうしてデートするの初めてなので……」

「俺も初めてだけど？」

「え？」

「だから、そんな緊張しねえで良いよ。正直、俺も何すれば良いか、よくわかってねえしな」

その言葉に春奈は少しだけ安心した様子を見せる。

「そうですね。わかりました」

その時、店員が料理を持ってきたため、2人は食べ始める。

少しした後、春奈の様子を見て、秀人は手を止める。

「立石？」

「はい!？」

春奈は異常に驚いた様子を見せる。

「フォークとスプーン、逆じゃねえか？」

「あ……ごめんなさい」

春奈は慌てて、持ち替える。

「何か、見られてると思うと緊張してしまつて……ごめんなさい」

「いや、謝る事はねえよ。それに、いつも昼一緒じゃねえか」

「はい、そうなんですけど……」

春奈は泣きそうな表情を浮かべる。

「あ、そうだ……」

春奈は目を閉じ、大きく深呼吸をする。

その様子はデートの誘いをしてきた時と似ている。

「どうした？」

「あ、えつと……」

春奈は少しの間、目を泳がせた後、秀人と目を合わせる。

「これから、秀人君とお呼びさせて頂いても、よろしいでございますでしょうか!？」

「え？」

秀人は意味がわからず、固まる。

「あと……私の事も名前で呼んで頂けると、幸いです!」

「全体的におかしな敬語になってるけど、大丈夫か？」

顔を真っ赤にしている春奈を見て、秀人は思わず笑ってしまった。

「急にどうしたんだよ?」

「あ、その、恋人同士なら名前で呼び合うべきだとお母さんに言われまして……」

「お前、親の言う事は絶対なのか?」

「いえ、私も名前で呼び合う方が良いと思いましたが……ごめんなさい」

「だから、何で謝るんだよ?」

秀人はこの時、和孝に言われた事を思い返していた。

必要以上に仲良くならないようにする事を考えれば、春奈の提案を受けるべきではない。

お互いに呼び合う時は名字のままにした方が無難だ。

しかし、不安げな表情を浮かべる春奈を見ているうちに、秀人の頭

からそんな考えが少しずつ消えた。

「春奈？」

「え、はい!？」

「こう呼べば良いのか？」

「はい！」

春奈は顔を真っ赤にしながら笑顔を見せる。

「ありがとうございます……秀人君」

恥ずかしそうに自分の名を呼んだ春奈を見て、秀人はまた笑った。

「ほら、早く食わねえと冷めちまうよ」

「あ、はい」

春奈は顔を下に向けたまま、食事を再開した。

「あと、ついでに敬語もやめたらどうだ？」

「え？」

「俺、言葉使い悪いのに、お前だけ敬語って何か変だろ？」

「そうでしょうか……？」

春奈はまた顔を真っ赤にする。

「秀人君……これ、おいしいね！」

「いや、かなり無理してるように見えるんだけど？」

秀人はため息をつく。

「まあ、それがいつもの話し方ならしょうがねえか……」

2人はその後も簡単な会話をしながら、食事を終えると、すぐ出る事にした。

「いくらですか？」

「ここは俺が出すよ」

レジの前で、秀人は財布をポケットから出す。

「ダメです。私も払いますよ」

「いや、別にここ安いから……」

「ダメです。秀人君に悪いです」

「でも……」

「奢ってもらうなんて、申し訳ないです」

「……じゃあ、割り勘にするか」

秀人はため息をついた後、2人でお金を払い、店を出た。

店を後にし、2人はデパートに入ると、案内に目をやる。

「どこから行く?」

「秀人君はいつも、どこに行きますか?そこに行きたいです」

「俺はいつも本ぐらいいしか見ねえんだけど?」

「じゃあ、最上階の本屋から行きましょう」

「本屋つて2人で行くもんじゃねえだろ」

「秀人君が普段、どんな本を読んだりしてるのか知りたいんです。

今日はお互いの事を知って目的じゃないですか」

「じゃあ、エレベータ混んでるし、エスカレータで行くか」

はしゃいでいる春奈に合わせ、2人は最上階の本屋から回る事にした。

「でも、良いのか?」

「はい?」

「俺、もう18になったし、アダルト系の本を買ってるとか言っても、引かねえか?」

「え?」

秀人の言葉に春奈は顔を真っ赤にする。

「あ、その……年頃の男の人なら普通だと思います。私も興味がないわけではありませんので……秀人君がお望みでしたら……」

「おいおい、何言ってるんだよ!」

春奈が暴走し始めたため、秀人は慌てて止める。

「ただの冗談だよ」

「え?」

「ちよつとからかってみただけなんだ。悪かったな」

まだ顔が赤い春奈を見て、秀人はこの手の冗談を2度と春奈に言わないようにしようと決意する。

「和孝がマンガをたくさん持ってて、いつもそこで読むから、俺が

普段買ってるのは小説だな」

「小説ですか？」

「意外か？」

「あ、はい、少しだけ……。秀人君、スポーツもやってますし……。」「部活には入ってねえから、結構時間あるし、通学の電車の中とかでも読んだりしてるんだよ」

2人はそんな事を話しながら、小説のコーナーに向かう。

「どんな小説を読むんですか？」

「俺はホラーとかミステリーかな。春奈も小説、読むのか？」

「はい、よく読みます。私が読むのは恋愛小説やファンタジーですけど……」

「全然違うジャンルだな」

「そうですね……」

春奈は少しだけ悲しそうな表情を見せる。

「私、怖い話や難しい話は苦手で……。ごめんなさい」

「いや、別に春奈の趣味に文句を言ってる訳じゃねえんだ。人それぞれ違うところがあって当たり前だろ？」

「そうですね……」

「そうだ、今度、俺が読んでた小説、貸してやるよ。食わず嫌いみたいなもんで、読んでみたら楽しいかもしれねえだろ？」

「……あ、そうですね。じゃあ、私が持ってる小説と交換しませんか？」

「ああ、そうするか……。って、恋愛小説とか俺、似合わねえ気がするんだけど？」

「そんな事ないですよ」

秀人はそこで両親の事を思い出す。

「……お袋と親父に見つかったら、まず何か言われるな」「え？」

「あ、別に何でもねえよ。小説、交換してみるか」

「じゃあ、明日、読み終わった小説、持って行きますよ」

「わかった、俺も何か持って行くよ」

「はい、お願いします」

春奈は嬉しそうに笑った。

それから2人はデパートの中を見て回り、お互いの趣味や好み等を確認し合った。

当初、秀人は本屋しか行きたい場所がなかったため、夕飯時まで間が持つかと心配していたが、春奈との会話は尽きる事がなく、時間はあつという間に過ぎていった。

「大分歩かせちまつたけど、疲れてねえか？」

「あ、大丈夫ですけど……」

「時間も結構経ったし、そろそろ夕飯にするか？」

その時、秀人は足を止め、辺りを見回している5歳ぐらいの男の子に目をやる。

その子の近くに親らしき人はいない。

「迷子ですかね？」

秀人と同じ方へ春奈も視線を送る。

「そうかもな」

「声、かけてみましょうよ」

「あ……そうだな」

2人はゆっくりと男の子に近付く。

「君、1人ですか？」

「……ママがいなくなっちゃったの」

「そうなんですか？」

「お前、子供相手にも敬語なんだな」

「え？」

「あ、何でもねえよ。とりあえず、あつちに案内があるから、そこで放送してもらえば良いんじゃないかねえか？」

「そうですね。……ママを捜しますので、一緒に来てくれませんか？」

春奈は優しい表情を見せた後、男の子の手を握る。

そのまま、男の子を連れて、2人は近くの案内を目指した。

「今日はママと買い物ですか？」

「うん」

移動している間、春奈は男の子に話しかけ、不安がらせないようにしていた。

「あそこが案内ですよね？」

「ああ、多分そうだと思うけど……」

「ママ！」

男の子は春奈の手を離し、そこにいた女性に抱きついた。

「丁度良かったな」

「そうみたいです」

女性は秀人達に近付くと頭を下げる。

「ありがとうございます」

「いえ、大した事していませんから。君、もうママから離れたらダメですよ？」

「うん！」

元気な返事を聞き、春奈は笑顔になる。

そのまま親子と別れ、秀人達はデパートの中にあるレストランに入った。

夕食時で混んでいたため、2人は少しだけ待たされた後、テーブルに通された。

「春奈、足痛くなったりしてねえか？」

「はい、大丈夫です」

デパートの中を歩き回った事により、春奈が足を痛めていないか、秀人は心配だった。

「今日、歩いてばかりだったな」

「でも、おかげで秀人君の事、色々を知る事が出来て楽しかったです」

「そっか」

2人はメニューを少しだけ見た後、店員を呼び、料理を注文した。

「あ、秀人君？」

「ん？」

春奈は少しだけ迷った様子を見せた後、口を開く。

「秀人君、進路決めましたか？」

「え？」

「進学、考えていないと言っていましたので……」

「ああ、そうだな……」

秀人は少しだけ考えた後、その質問に答える事にする。

「俺の親父、高卒なんだけど、ゲームクリエイターとして成功してるんだ」

「そうなんですか？」

「お袋は専業主婦って感じで……とりあえず、2人共、学歴に拘らねえんだ。俺、特にやりたい事もねえから、進学は考えてねえんだけど、だからって就職するつもりもねえし……まあ、簡単に言えば将来の事、何も決めてねえって事だ」

秀人は春奈と目を合わせる事なく、笑った。

「ごめんなさい」

「何で謝るんだよ？」

「いえ、悪い事を聞いてしまったと思いましたが……」

「別に良いよ。ところで、春奈は進路決めてるのか？」

「あ、はい」

秀人の質問に春奈は恥ずかしそうに話を始める。

「舞台俳優になりたいと思っています」

「舞台俳優？」

「はい。聞いた話では、難しい職業だそうです……」

「だから、演劇部に入ってるのか？」

「はい、そうです」

「でも、何で舞台俳優なんだ？」

「あ、その……」

春奈は少しだけ答えに戸惑う。

「……ずっと夢だったんです」

「子供の頃からのか？」

「えっと……小学校の3年生ぐらいから持っている夢なんです」

「10年近く前の夢を今も目指してるってすごいな」

「舞台を見に行きまして、その時にとっても感動したんです。それで、私も舞台に立ちたいと思いました」

「そっか。お前、劇の評判良いんだし、その夢、案外楽に叶えられるんじゃないか？」

「そうでしょうか？」

秀人の言葉に春奈は嬉しそうに笑う。

「俺、将来の夢なんてねえからな……」

「今、持っていないなくても、小さい時は将来の夢、持っていましたよね？」

「どうだったかな……」

春奈の質問に答えようと、秀人は昔の事を思い返す。

そして、今まで気付かなかった事が不思議なぐらい、大きな違和感を感じた。

「……秀人君？」

「え？」

春奈の心配するような表情を見て、秀人は自分がどんな顔をしていたのか理解する。

「どうかしましたか？」

「あ、悪い……」

その時、店員が料理を持って来たため、少しの間、話を中断する。

「ちよつと変な事に気付いただけだよ。大した事ねえから心配するな」

「秀人君、そんな雰囲気じゃなかったです」

「ああ、まあ……」

春奈が納得のいかない表情だったため、秀人は話す事にする。

「小さい頃の記憶、思い出せねえんだ」

「え？」

「俺……確か、小4かそれぐらいの時、今の家に引っ越して来て、その時に転校してるんだ。その後の事は覚えてるんだけど、その前の事になると何も覚えてなくてな」

秀人は春奈を安心させるため、笑顔を作る。

「今、その事に気付いたから、少し驚いちゃったんだ。心配させて悪かったな」

「あ、いえ……ごめんなさい」

「いや、春奈は悪くねえだろ。何で謝るんだよ？」

「私、秀人君を困らせるような事ばかり聞いています」

「別に気にするなよ」

「私、こんな事では秀人君に嫌われてしまいますよね……」

春奈はため息をつく。

その様子を見て、秀人もため息をつく。

「春奈、そのネガティブな考え方、変えられねえのか？」

「え？」

「何でもかんでも悪い方に考える事ねえだろ。世の中、良い事ばかりじゃねえけど、悪い事ばかりでもねえんだし」

秀人は春奈の目を見て、強い口調で続ける。

「ポジティブに生きなきゃ、やってられねえだろ」

そこまで話を聞き、春奈は笑顔を見せる。

「そうですね。秀人君の言う通りだと思います」

春奈は秀人の顔をじっと見る。

「どうした？」

「あ、いえ……こうして秀人君と一緒にいられる事が、まだ信じられないんです」

春奈は穏やかな表情を見せる。

「秀人君、私のどこを好きになってくれたのでしょうか？」

「え？」

まさか、春奈からこの質問をされるとは思っていなかったため、秀人は困ってしまう。

「えっと……だったら、春奈は俺のどこを好きになっただんだ？」

「え？」

秀人は時間稼ぎをしようと、反対に質問を投げかける。

「だって、俺達、全然話した事ねえだろ？それに俺、ルックスだって良くねえし」

「秀人君はかっこいいです！」

大きな声を出してしまい、直後に春奈は顔を赤くする。

「……私、学校に行くのが嫌になった事があるんです」

「まあ、誰でもあるんじゃないか？」

「私、昔から友達作るの苦手なんです。いつも1人で……変わろうとは思ってんですけど、上手いかないんです。部活でも先輩に嫌われてしまって、同じ学年の方もみんな辞めてしまって、また嫌な事が増えてしまって……」

春奈はそこで、秀人を真剣な目で見る。

「落ち込んでいた時、秀人君がグラウンドでフットサルをしているのを見かけたんです」

春奈はその時の事を思い出すように目を閉じる。

「残り時間もあまりないのに、大きな点差が付いていて、秀人君のチームの人はみんな諦めていました。でも、秀人君は決して諦めないで、ずっと前向きで、周りの人にも明るく声をかけて……」

春奈の言っている内容がいつの事か思い出せなかったが、秀人は黙って話を聞く。

「秀人君の言葉に、みんなが勝てると思っていて……試合終了間際に逆転して、試合に勝った後、秀人君は照れくさそうな表情でみんなに囲まれて……」

春奈の顔はいつの間にか笑顔になっている。

「それを見て、私も頑張ろうと思えました。結局、今でも友達を作

「つたりは出来ていませんけど……」

「それ……俺は別に試合を楽しんでただけだろ？」

「それでも、私は頑張れたんです」

そこで、春奈は照れくさそうに、また顔を赤くする。

「それから、ずっと秀人君の事が気になっていました。廊下ですれ違った時に振り返ってしまったり、教室の前を通る度に姿を捜してしまったり、それで見つけたら足を止めてしまったり……」

話を聞きながら、秀人は今まで春奈の存在に気付かなかった事を申し訳なく感じていた。

「秀人君、とても優しい人だと思いました」

「優しい？」

秀人は思わず笑ってしまった。

「お前、優しいの意味、間違っって使っってねえか？」

「そんな事ないです。思いやりがあっって、困っている人や助けを求めている人にすぐ気付いて、それは優しいという事だと思います」

「おいおい、誰の事言ってるんだ？俺、言葉使いは悪いし、面倒くさがりだし、どこをどう見たら、そう感じたんだよ？」

「……秀人君を見ていたら、そう感じました。さっきも迷子の男の子を助けていました」

「助けたのはお前だろ。それに俺、1人だったら迷子とか無視するっつての」

「そうでしょうか……？」

秀人に強く否定され、春奈は少しだけ自信を失くした様子だ。

「でも……私、秀人君の事をずっと見ていて、気付いた時には秀人君の事を好きになっていました。だから、秀人君から好きと言ってもらえて、とても嬉しかったです」

「そっか……」

「私、きつと秀人君を困らせてしまう事、多いと思います。今日もたくさん困らせていると思います」

「だから、そういう考えを止めろっつて。もっと自分に自信持てよ。」

少なくとも、今日、お前と一緒に俺は楽しんでるし、困ったりなんかしてねえからな」

それは嘘ではない、秀人の本心だ。

「本当ですか？」

「ああ、ホントだよ。というか、そんな事言われたら、俺で良かったのかって俺まで心配になるからな」

「そんな……秀人君と一緒に今日一日楽しかったです」

「その台詞、そのまま春奈に返すよ」

秀人の言葉に春奈は納得すると嬉しそうに笑う。

「やっぱり……秀人君、優しいです」

「どこがだよ？それより飯、食わねえか？」

今のところ、2人は全く料理に手をつけていない。

「あ、はい。頂きます」

「頂きます」

2人はお互いに軽く笑った後、少しだけ冷めてしまった料理を食べ始めた。

結局、ここでも2人で会計を済ませた後、2人は店を出て、帰る事にした。

「お前、妙な所で頑固だよな」

「え？」

「普通、奢るって言われたら、素直に喜ぶもんじゃねえのか？」

「ダメでしょうか？」

「まあ、俺としては助かるから良いけどな」

2人はそんな事を話しながら、駅に入る。

そして、すぐに来た電車に乗った。

「あ、秀人君？」

「ん？」

「いつも学校へ行く時、何両目に乗っていますか？」

「改札が1番近いドアの所に乗るけど？」

「じゃあ、明日から一緒に学校、行きませんか？」

「え？」

「私、三枝谷駅で待ってますから」

「俺、いつもギリギリの時間だし、先に行けよ」

春奈が降りる駅まで1駅だったため、電車はすぐ到着した。

「今日はありがとうございました。楽しかったです」

「ああ、俺も楽しかったよ」

「じゃあ、また明日」

「ああ、またな」

春奈と別れ、秀人は1人になると、今日あった事を思い返し、少しだけ笑った。

6月7日(月)

この日も、秀人は駅から学校まで走らなければ間に合わないような時間の電車に乗っていた。

朝が弱いわけではないが、出来る限り学校にいる時間を短くしたいという考えから、秀人はこの時間の電車によく乗っている。

その時、電車が三枝谷駅のホームに入る。

秀人は小説を読んでいたが、ふと気になり、ホームに目をやる。

「あ……」

驚きのあまり、秀人は声を上げてしまった。

扉が開き、ホームにいた春奈は笑顔で電車に乗る。

「秀人君、おはようございます」

「お前、バカか？遅刻するだろ」

「一緒に行く約束しましたから……」

「先に行行って言っただろ」

「あ、今日もお昼、弁当を用意しましたので……」

「話を変えるな！」

秀人は深いため息をつく。

「この電車、駅から学校まで走らねえと間に合わねえからな」

「……じゃあ、秀人君、先に行つて構いませんから」

「お前、言ってる事、メチャクチャだな……」

秀人はそこで時計を見る。

「春奈のクラスも、出席取る時に返事すれば、遅刻にならねえか？」

「え？」

「クラスによつては始業ベルが鳴った時点で遅刻にするとこもあるだろ？」

「あ、私のクラスは……出席を取る時だったと思います」

「春奈、女子だから名前呼ばれるの後の方だろ？」

「あ、はい」

「じゃあ、駅に着いたら走るからな」

「私……足遅いので、自信ないですよ」

「あ、荷物、左手で持て」

「え……はい」

秀人の指示に従い、春奈は荷物を左手に移す。

そして、秀人は反対にカバンを右手に移した。

「そもそも俺のせいだからな……」

電車が学校の最寄り駅である、二和木駅に到着し、2人は足早に改札を出る。

「俺が引つ張ってくからな」

「え？」

秀人は春奈の右手をつかむ。

「ほら、走るぞ」

「あ、はい」

そのまま、2人は手を繋ぎ、走り出した。

当然、秀人が1人で走るよりもペースは遅いが、春奈だけは間に合うだろうと信じて、秀人は走り続ける。

学校に到着し、3年A組の教室の前で秀人は手を離す。

「ほら、早く入れ」

「あ、ありがとうございます」

春奈は肩で息をしながら、教室に入った。

間に合ったかどうか心配だったが、秀人はそのまま3年C組の教室に入る。

「及川、遅刻だぞ」

「ああ、わかってるよ」

村雨の言葉に秀人は不機嫌な様子で答えた。

朝のホームルームが終わり、和孝は秀人に笑顔を見せる。

「秀人、今日は俺、遅刻しなかったんだよね」

「じゃあ、貯金9か」

「でも、今日は完全に遅刻だったけど、どうかしたの？」

「今日は大きな荷物があったんだよ」

「……いつも通りじゃない？」

和孝は秀人のカバンを注意深く確認する。

「とりあえず、黙れ。俺も何やってんだかって思ってる」

なぜ、春奈のために躍起になっていたのかわからず、秀人はため息をつく。

「最近、ため息が増えた気がするな……」

「え？」

「そういえば、昨日の大会はどうだった？」

「もちろん勝ったよ。俺の大活躍で……」

「おい、及川」

夢の声が聞こえ、秀人は声がした方を向く。

「及川、昨日はどうしたんだ？」

「何で、遠野が怒ってるんだよ？」

「昨日、夢ちゃんが来てて、秀人の代わりに試合出て……」

いつも通り、和孝は夢に殴られ、その場に倒れる。

「お前達のせいだからな。久保は戦力にならないし……」

「遠野が代わりに出てくれたのか？」

「ああ、しょうがなくな」

「まあ、遠野なら戦力になるもんな」

「あの……今日のパンチ、いつもより重いですけど……」

「多分、機嫌が悪いからだろ」

秀人はそこで、首を傾げる。

「でも、何でお前がいたんだ？」

「え？」

「試合に出たって事は、あそこにいたって事だろ？」

「それは……偶然通りがかっただけだ」

夢は逃げるように自分の席に戻った。

「秀人、そっちの報告は？」

「ん？」

「デート、どうだった？」

「……まあ、楽しかったよ」

その言葉に和孝は表情を変える。

「あと、ちゃんと距離置くようにした？仲良くなり過ぎると……」

「しつこいな……。ちゃんと距離置いてるよ」

和孝の質問に、秀人は嘘で返した。

午前中の授業が終わり、秀人はいつも通り夢に声をかける。

「和孝、どうやったたらフットサルで戦力になれるか、お前に聞いた
いそうなんだ」

「それなら、及川が教えてやれば良いじゃないか」

「いや、昨日のお前のプレイにあいつは惚れたんだよ。だから、ア
ドバイスしてやってくれ」

「あのさ……俺が夢ちゃんを足止めする必要、ホントにあるのかな
？」

「じゃあ、和孝、しつかりアドバイスもらえよ」

秀人は教室を出ると、駆け足で屋上に向かった。

この日も春奈は先に屋上で待っていた。

「朝、間に合ったか？」

「はい。もっと早く来るよう怒られましたが、遅刻にはされません
でした」

「だったら良かった」

「秀人君は……？」

「今日の飯は何だ？」

春奈の言葉を遮るように、秀人は無理やり昼食を開始した。

「明日からは先に行けよ。俺、いつもあの時間だし」

「だったら、私も今日からそうします」

「いや、俺みたいに遅刻常習犯になっちまうよ」

「私、毎日走ります」

「それに、お前が間に合っても、俺が間に合わねえんだけど……」
「え？」

「あ……」
秀人は思わず言ってしまった事を後悔する。

「ごめんなさい、私のせいで遅刻してしまっただんですね……」

「いや、そもそも俺のせいだから……」

こうなる事を予想していたため、秀人は今日遅刻した事を隠すつもりだった。

春奈の性格を考えれば、秀人が遅刻した事を自分のせいだと考えてしまうのはわかっていた。

秀人はどう言おうか考え、諦めるようにため息をつく。

「俺、明日から早い時間に出るよ」

「え？」

「そうすれば、2人共、遅刻しねえで済むだろ？俺も出席日数やばいから、そろそろ普通に行こうと思ってたしな」

結局、秀人はそれで乗り切る事しか思い付かなかった。

「春奈、いつも何時の電車に乗ってるんだ？」

「秀人君に合わせますよ」

「だったら、今日より2、3本早い電車に乗るよ」

「わかりました。今日と同じ場所で待ってます」

「ああ、わかった……」

嬉しそうに笑う春奈を見て、秀人は複雑な気持ちを持っていた。

「あと、明日、学校が終わった後、時間ありますか？」

「何かあるのか？」

「お母さんから舞台のチケットを2枚もらいまして、良かったら一緒に行きませんか？」

「舞台？」

秀人は舞台等に興味がなかったため、少しだけ考えてしまった。

「あの……嫌でしたら、1人でいきますので……」

「それじゃ、チケットが1枚無駄になるだろ」

秀人はもう少しだけ考えた後、笑顔を見せる。

「まあ、そういうのに行くのも悪くねえか」

「え？」

「俺、そういうの行った事ねえし、もしかしたら途中で寝ちまうかもしれないけど、それでも良いか？」

「じゃあ、一緒に行ってくれるんですね」

「お前、俺の話、ちゃんと聞いてたか？」

「はい、一緒に行ってくれるんですよね？」

春奈の喜ぶ様子を見て、秀人は笑う。

「私、明日は部活を休みますので、学校が終わったら、一緒に帰りませんか？それで服を着替えた後、また待ち合わせをして……」

「開演時間とか俺は知らねえし、春奈に決めてもらって良いか？」

「あ、わかりました」

「夕飯はどうする？一緒にするか？」

「はい、そうしたいです」

「じゃあ、終わった後にも、どこかで夕飯食うか？」

「あ、開演時間が遅いので、夕食は先の方が良いかもしれません」

「だったら、先にするか」

「はい」

その後も明日の予定を考えながら、2人は昼食を食べ終える。

「そういえば、小説持って来たんです」

「あ、忘れてた……」

秀人は困ったように苦笑する。

「渡しておきますね」

「俺、忘れちまって、悪いな」

「覚えている時で構わないですよ」

春奈からカバーの付いた小説を1冊受け取り、秀人は少しだけ中を確認する。

「それ1番気に入っている小説なんです」

「ああ、時間ある時に読むよ」

その時、予鈴が鳴り響く。

「そろそろ戻りましょうか」

「そうだな。そういえば、今日も部活か？」

「はい」

「じゃあ、また明日な。あ、朝だけど、俺が来ねえようなら明日は先に行けよ？」

「いえ、待ってますよ」

「……じゃあ、遅刻しねえようにする」

明日は絶対に遅刻出来ないと感じながら、秀人は屋上を後にした。

学校が終わった後、秀人は真っ直ぐ家に帰り、春奈から借りた小説をカバンから出す。

帰りの電車で今まで読んでいた小説を読み終え、新しい小説を読むには良い時期だったが、秀人は少しだけ抵抗を持っていた。

学校で軽く中を見た際、恋愛小説だとわかり、秀人は本屋でこの小説を見かけても絶対買わないだろうと感じた。

「食わず嫌いは良くねえもんな」

春奈に言った事を思い出しながら、秀人は小説を読み始める。

「秀人君、そろそろご飯よ」

しばらくの間、小説を読む事に集中していたが、由香里の声が聞こえ、秀人はしおりを挟んだ後、本を閉じる。

夕飯時となった事に気付かない程、この小説を集中して読んでいた事を自覚し、秀人は少しだけ苦笑する。

秀人が食卓に着くと、今日も両親は上機嫌だった。

「秀人君、デートは楽しめた？」

「俺の本、役に立っただろ！」

「別に2人に報告する事は何もねえからな。あ、そうだ……」

秀人は昨日、春奈と話していた時に気付いた事を思い出す。

「アルバムってどこにあるんだ？」

「え？」

「俺が小さい頃のアルバムとか、どっかにあるだろ？」

「いや、ない」

弘はその質問を拒絶するような答え方だった。

「秀人君、写真嫌いだったのよ」

「じゃあ、小4……この家に来る前、俺ってどんなだったんだ？」

「急にそんな事聞くなんて、どうしたの？」

「いや、昔の事、全然覚えてねえから、どうだったのかと思って…

…」

秀人は両親が何か隠しているような、そんな気配を感じていた。

「秀人、過去にしがみついてばかりじゃダメだ。精一杯、未来を指せ」

「いや、そんな話してねえだろ……。あ、明日、夕飯いらねえから」

「お、デートか？」

「別に何でも良いだろ」

秀人はこれ以上、詮索する事を諦めると、箸を進めた。

6月8日（火）

この日、電車の中に自分と同じ制服の生徒がいるという、他の生徒にとつては当たり前前の事が、秀人の目にはありえない光景として映っていた。

電車が三枝谷駅に到着すると、春奈が笑顔で電車に乗ってきた。

「秀人君、おはようございます」

「ああ、おはよう。この時間なら歩いても間に合うだろう？」

「はい、そうですね」

「あと、小説持って来たんだ」

秀人はカバンから小説を取り出す。

春奈の小説と同じように、その小説もカバーを付けている。

秀人は中身を確認した後、春奈に渡す。

「ホラーだし、無理に読まなくて良いからな」

「いえ、絶対読みます」

「夜、うなされても知らねえからな」

「え、そんなに怖いんですか？」

「ああ、どれだけ怖いかというと……」

秀人が脅かすと、春奈は泣きそうな表情を見せる。

電車を降り、駅を出ると、学校へ向かう生徒の姿はさらに多くなつた。

「こんな時間にここを歩くの久しぶりだな」

「私はあんなに速くここを走ったの、昨日が初めてでした」

春奈の言葉に秀人は笑う。

そのまま、2人は学校に到着すると、3年A組の教室の前で別れた。そして、秀人が自分の教室に入ると、夢が驚いた様子で近付いてきた。

「及川、何かあったのか？」

「何もねえから、ほっといてくれよ」

変に詮索されても困るため、秀人は拒絶するように顔を伏せる。それから少しした後、始業ベルが鳴り、村雨がやってきた。

「及川秀人」

「はい」

「お前、今日は随分と……」

「早く次にいつてくれ」

「……久保和孝」

「遅刻だ」

和孝の遅刻を確定させ、秀人は少しだけ笑う。

その直後、肩で息をしながら和孝が教室に入ってきた。

「貯金、また10だな」

「あれ、秀人いないと思ってたのに、何でいるの？」

「とりあえず黙れ」

「え、何ですか!？」

和孝は席に着くと、呼吸を整える。

「秀人、今日暇なんだけど、家来る？」

「……今日は用事がある」

「もしかして、春奈ちゃん？」

和孝の質問に秀人は答えない。

「この辺から少しずつ距離を置いて、別れる準備に入った方が良好」

「よ」

「そんな事言っても……」

秀人は春奈の事を思い返す。

「これからは何かお願いされても、適当に言い訳して断りなよ。秀人、そういうのは得意でしょ？」

「そうなんだけど、ほっとけねえんだよな」

「え？」

「え？」

和孝は驚いた様子を見せる。

「どうかしたか？」

「あ、別に……」

和孝は秀人を観察するような目で見た後、首を傾げた。

「遠野、何か和孝……好きな人が出来たみたいで、どうアタックか
ければ良いか、女子の意見が聞きたいらしい。話聞いてやってくれ」

「あの、いい加減、無茶振りするのやめてくれませんか？」

秀人はいつも通り、教室を後にすると、屋上に向かう。

「お前、いつも早いよな」

和孝と遠野を一緒にする工作をしているとはいえ、いつも春奈を待
たせているため、秀人は申し訳なく感じた。

「今日は予定通りで良いのか？」

「はい、部活を休む事も伝えましたので、一緒に舞台、見に行きま
しょう」

2人は昼食を食べながら、今日の予定をもう1度確認する。

「そういえば、貸してくれた小説、結構面白いな」

「え？」

「昨日から読んでるんだよ」

「どの辺りまで読みましたか？」

「ああ、えつと……」

その後、2人は予鈴が鳴るまで、小説の話題だけを話し続けた。

「じゃあ、また後でな」

「はい」

別れを告げた後、秀人はすぐ教室に戻った。

「秀人、ちよつと良い？」

「ん？」

和孝は人目を避けるように秀人を教室の外に連れ出す。

「そろそろ授業始まるんじゃないか？」

「秀人、春奈ちゃんとの事、噂になってるよ」

「え、何でだよ？」

秀人が何もわかっていない様子だったため、和孝はため息をつく。

「今日、春奈ちゃんと一緒に登校したでしょ？」

「何で知ってるんだよ？」

「噂になってるって言ったでしょ？夢ちゃんとかも知ってたよ」

「でも、別に一緒に登校するぐらい普通じゃねえか？」

「いや、何をどう考えたら普通になるの？男子と女子が2人でいたら、付き合ってるって思われてもおかしくないよ」

「そういうもんなのか？」

秀人が全く危機感を感じていないため、和孝は呆れたように苦笑する。

「別れるつもりなのに噂になったら困るでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

「今更2人は何も言わないなんて言っても意味ないだろうし、俺の方で2人は仲良いみたいだけど、付き合ってるわけじゃないって噂にしてみるよ」

「そんな事出来るのか？」

「俺、結構、情報通って事になってるんだよね。秀人の事なら、俺に聞いてくる人多いし、簡単だよ」

「おい、2人共、教室に戻れ」

「あ、はい」

村雨に注意され、2人はすぐ教室に戻った。

帰りのホームルームも終わり、生徒達は帰り支度を始める。

「秀人、さっきも言ったけど、俺がフォローするとは言え……」

「もう、しつこいな……わかってるよ」

秀人は和孝の話を適当に聞き流す。

「わかってないから言ってるんでしょ……」

「とりあえず、また明日な」

「一緒に帰らないの？」

「今日、春奈と一緒に帰る事になってるんだよ」

「じゃあ、しょうがないね……って、わかってないじゃないですか
！」

「約束しちまったんだから、しょうがねえだろ。今日で終わりにするから安心しろ。あと、待たせると悪いから、またな」

秀人が教室を出ると、廊下で待っていた春奈は笑顔を見せる。

「じゃあ、行くか」

「はい」

2人は合流すると、その場を後にする。

「私、夢だったんです」

「え？」

「好きな人と一緒に登下校出来たら良いなとずっと思っていました」

「そういえば、春奈が貸してくれた小説にもそんなシーンがあったな」

「はい、あのシーン、好きなんです!」

春奈の話聞きながら、借りた小説の内容が春奈にとって理想の恋愛なのだろうと秀人は感じる。

ふと、秀人は春奈の顔に目をやる。

今まで、特に気にしていなかったが、学校一の美人と言われているだけあり、春奈にはキレイという形容詞が妥当だと感じた。

その時、目が合い、春奈は顔を赤くする。

「もしかして、顔に何か付いてますか？」

「いや、大丈夫だよ」

そのまま、秀人は視線を周りの生徒に移し、自分達が注目されている事に気付く。

「秀人君？」

「ん？」

「どうかしましたか？」

「あ、別に何でもねえよ」

春奈は周りの事を気にしていないのか、ただ単に気付いていないのか、秀人と2人である時と同じようにしている。

しかし、和孝からの助言も考えると、確かにこの状況はあまり良くないと感じた。

そして、明日から一緒に登校する事をやめようと、秀人は考えていた。

家に帰り、服を着替えた後、秀人達はまた合流し、舞台が行われる劇場に向かった。

2人はレストランに入り、早めの夕食を取った後、開演10分前に劇場へ入った。

「劇場って、こうなってるんだな」

「でも、劇場に来るのは、初めてじゃないですよね？」

「いや、初めてだよ。今まで舞台とか行った事ねえって言ったただろ？」

「……あ、そうでしたね」

「それより、席はどこだ？」

「あ、えつと……」

春奈は慌てた様子でチケットの座席を確認する。

「1枚貸してくれ」

「あ、はい」

「……あの辺みたいだな」

「そうですね」

結局、秀人が座席を見つけ、2人は席に座る。

「秀人君？」

「ん？」

「なるべく寝ないで下さいね」

「え？」

「昨日、寝るかもしれないと言っていました」

「お前、その部分、昨日は聞き流してただろ……」

秀人は呆れたように笑う。

「大丈夫。今日はこのために授業中、寝てたからな」

「それは、もつとダメです！」

「冗談だよ。せっかく来たんだし、寝るわけねえだろ」

「そうですね」

春奈は嬉しそうに笑う。

「そろそろ始まりますね」

「そうだな」

秀人はいつもより上機嫌の春奈を見て、これから始まる舞台を本当に楽しみにしているのだろうと感じた。

今まで、秀人はこうした劇場で舞台を見た事は1度もない。

しかし、始まってから数分後、秀人は舞台に釘付けになった。

春奈に言った、寝るかもしれないという冗談を撤回したくなる程、舞台に惹きこまれていく自分を秀人は感じていた。

すぐ目の前で役者達が作る物語に自分まで入り込んでしまったような、そんな感覚を持ち、秀人はその舞台が終わるまで、不思議な時間を過ごした。

「秀人君？」

「え？」

舞台が終わった後、春奈の呼びかけで、秀人は現実に戻された。

「あ、悪い、舞台ってこんなにすごいんだな」

秀人が感心していると、春奈は幕の下りた舞台に目をやる。

「私も……こんな舞台がしたいです」

「したら良いじゃねえか」

「そんな簡単に言わないで下さい。大変なんですから」

春奈が珍しく、不機嫌だったため、秀人は苦笑する。

「あと、俺……」

「どうしました？」

「忘れてるだけで、昔、こういう場所で舞台見た事あるかもな」

「……きつと、そうですね」

この時、秀人は両親に昔の事を聞いた時の事を思い返していた。今、考えてみれば、両親の反応は不自然なものだ。

「あ、秀人君、そろそろ出ないといけないみたいです」

「そうだな。じゃあ、帰るか」

2人は劇場を後にすると、寄り道をする事なく、帰りの電車に乗った。

「今日、どうでしたか？」

「ああ、良かったよ。寝るかもしれないねなんて言っただけ悪かったな」

「楽しんでもらえたなら、良かったです」

春奈はまだ興奮が冷めていない様子だ。

「舞台というか劇を見る時、秀人君はどこを見ますか？」

「え？」

「あ、質問がわかりづらいですね。その、普通は舞台の上の役者さん……特に主役の方を見ると思います」

「まあ、そうだな」

「でも、舞台の上にいる全員で物語は作られるんです。視線を逸らして脇役の方を見れば、その人も物語の中にいなければいけないんです。それだけじゃありません」

春奈は自分が舞台に立っている気になっているのか、大袈裟にも見える仕草を加えながら続ける。

「舞台以外の場所……様々な音を出す音響に、様々な色で舞台を照らす照明、それも物語を作る大切なもので……」

そこで、春奈は秀人の方を見て、顔を赤くする。

「ごめんなさい、興奮してしまいました」

「良いんじゃないか？好きな事を話す時は誰だってそうだよ。ただ、場所は考えろ」

「そうですね……」

周りの乗客の多くが視線を送ってきていたため、春奈は恥ずかしそうに顔を下に向ける。

「そうだ。明日の朝だけ……」

秀人はここで、明日からは一緒に登校出来ないと言うつもりだった。しかし、春奈と顔を合わせ、その先が言えなくなってしまった。

明日から一緒に登校出来ないと言われれば、春奈が悲しむ事は明白

だ。

「どうしました？」

「……今日と同じ時間で良いよな？あの時間なら、歩いて行けるもんな」

「はい。今日と同じ時間に同じ場所で待ってます」

「じゃあ、俺も遅れねえようにするからな」

秀人はそこで、小さくため息をつく。

和孝の言う通り、これ以上、春奈との仲を深めるべきではないと、秀人も感じている。

しかし、なぜかそうする事は出来なかった。

その理由を秀人は少しだけ考えたが、わからなかった。

その時、ブレーキがかかり、体勢を崩した春奈を秀人は咄嗟に支える。

「大丈夫か？」

「はい、ごめんなさい」

春奈が顔を上げると、2人の顔はすぐ目の前まで近くなった。

その時、扉が開き、2人は慌てた様子で離れる。

「悪い」

「え？」

「あ、何が悪いのかわからねえけど……」

秀人は自分がどんな顔をしているか、わからなくなってしまった。

そして、春奈にだけは見せないよう、秀人はあさつての方に顔を向けた。

春奈も秀人と同じ状態なのか、顔を秀人とは反対に向ける。

結局、春奈が降りる三枝谷駅まで2人はそのままだった。

「気を付けて帰れよ」

「はい、今日はありがとうございました」

「じゃあ、また明日な」

「はい」

電車を降りた後も、春奈は顔を下に向けたままだった。

電車が三枝谷駅を離れ、秀人は1人になると、軽く深呼吸をした。

6月9日(水)

朝、秀人は昨日と同じ電車に乗っていると、三枝谷駅で春奈が乗ってきた。

「秀人君、おはようございます」

「ああ、おはよう」

春奈はそこで欠伸をする。

「寝不足か？」

「はい、昨夜は帰った後、秀人君から借りた小説を読んでいましたので……」

「昨日、帰り遅かっただろ？」

「あ、まだ少ししか読んでいませんよ。ただ、その後、怖くなってしまつて、なかなか寝付けなかつたんです……」

「お前……怖いのが苦手なら無理して読まなければ良いだろ」

「せっかくお借りしたんですから、そういうわけにはいきません」

「それで寝不足になつてるんじゃない、どう考えてもダメだろ」

秀人は苦笑する。

「1人でいるのが怖くなつたら、俺が一晩中そばにいてやるよ」

「え？」

「まあ、男女で一晩を共に過ごしたら当然……」

秀人は軽い気持ちでそんな冗談を言った後、即座に後悔した。

「ひ、秀人君がお望みでしたら、私はいつでも……」

「ああ、ストップ！冗談だから真に受けるな！」

顔が真っ赤になつている春奈を秀人はすぐに止める。

「お前、こういう冗談言う度に暴走するなよ。ドサクサに紛れてすごい事言つのもやめろ」

「……ごめんなさい」

「まあ、そもそも俺が冗談言わなきゃ良いんだけどな……」

秀人は改めて二度とこんな冗談を言わないと心に誓つた。

この日も和孝は遅刻をしてきた。

和孝は肩で息をしながら席に着くと、秀人の方を向く。

「秀人、今日も早いね……って、もしかして、今日も春奈ちゃんと来たわけじゃないよね？」

「そんな言い方するなよ」

「秀人、昨日あれだけ……」

「一緒に登校出来ねえって言おうと思ったけど言えなかったんだよ。何か悪い気がして……」

「秀人って誰かに気を使うタイプだったっけ？いつもなら面倒くさがって、すぐに断ってるでしょ？」

和孝の言葉を聞きながら、秀人は春奈に言われた事を思い返す。

「なあ、和孝？」

「ん？」

「俺って優しいか？」

「え？」

和孝の驚いたような反応を見て、秀人は笑う。

「まあ、それが普通の反応だよな」

秀人は困ったように、ため息をつく。

「付き合い始めて1週間しか経ってないけど、予定より早めて、別れを切り出した方が良くもね」

「別れを切り出すって言っても、どうやってだよ？」

「一緒にいて楽しくないとか、そんな理由で別れを切り出せば？」

「俺、一緒にいて楽しいって言っちまったんだけど……まあ、理由は適当に考えるか」

秀人の曖昧な返事に対し、和孝はそれ以上何も言わなかった。

「そっだ、今日は予定ねえし、家に行っても良いか？」

「ごめん、今日は俺の方に予定があるんだよね」

「何があるんだよ？」

「ちよっと、伝説を作るだけだよ」

和孝は笑みを浮かべる。

「裸で町を走り回る気か？」

「何でそんな事すると思っただんですかね？」

「いや、本当にやったら俺は伝説にするから」

「そんな伝説作りたくないです」

和孝は呆れた様子で、ため息をついた。

午前中の授業が終わると、夢は秀人の席に近付いてきた。

「及川？」

「ん？」

「話があるんだが……」

「悪い、昼は予定があるんだ。あと、和孝が裸で町を回るつもりらしい。俺から説得しても聞かねえから、お前から説得して止めてくれ」

「いや、しませんから！」

そのまま教室を出ようとした秀人の腕を夢はつかむ。

「時間作ってもらえないか？」

「だったら放課後にしてもらえば？放課後なら秀人も暇でしょ？」

「そうなのか？」

「ああ、まあ、放課後の方が空いてるな」

秀人は春奈を待たせている事を考え、ここは和孝の提案を受ける形をとる。

「じゃあ、放課後って事で、俺は行くからな」

秀人は夢の手を振り解くと、屋上に行った。

そして、いつも通り、先に来ていた春奈に謝った後、2人は一緒に昼食を取った。

午後の授業が終わり、夢はまた秀人に声をかけた。

「少し待ってもらって良いか？みんなが帰ってから話したい」

「だったら、どっか別の場所で話せば良いだろ」

「とりあえず、俺は用事あるから行くね」

和孝はそう言うと、1人で教室を出て行く。

「屋上なら良いんじゃないか？」

「あそこは立ち入り禁止だ」

「俺、よく行ってるんだけどな……」

結局、秀人は夢の提案を受け、教室で待つ事にする。

しかし、10分程経っても他の生徒が教室に残っていたため、秀人はため息をつく。

「やっぱり屋上に行かぬえか？」

「……しょうがないな」

いつまで経っても話が出来なかったため、2人は屋上に向かった。

「誰もいねえみたいだ」

秀人は周りを確認し、屋上に誰もいない事を確かめる。

「で、話って何だよ？」

「……及川、最近、昼はどうしてるんだ？」

「別にお前には関係ねえだろ」

「ああ、そうだな。あ、最近、私と和孝を一緒にしようとしているのはなぜだ？」

「別にちよつとした悪戯だよ」

それから、夢は本題に入る事なく、脈絡のない質問を繰り返す。

秀人はしばらくの間、付き合っていたが、早く帰りたいという気持ちもあるため、自分から切り出す事にした。

「話ってこんな話じゃねえだろ？何の話がしたいんだよ？」

「あ、その……及川の事で、気になる噂を聞いたんだ」

「お前も噂とか気にするんだな」

「それで……」

その時、物音がしたため、2人は階段の方へ目をやる。

「あ……」

そこには春奈が立っていた。

「秀人君、ここにいたんですね」

「お前、部活はどうしたんだよ？」

「あ、その……先程、気になる事がありました……」
「気になる事って？」

「久保さんが、怖そうな方に連れられて空き教室に入って行っただけです」

春奈の言葉に、秀人は少しだけ表情を変える。

「春奈、案内してくれ。遠野、悪い。話はまた今度にしてくれ」

「だったら……教室で待ってる」

「いつまでかかるかわからねえし、先に帰れよ」

夢を屋上に残し、秀人は春奈と共に階段を下りて行った。

「ここか？」

春奈の案内で、2人は空き教室の前に立つと、中の様子をうかがった。

「はい、ここです」

「開かねえな……」

秀人はドアを開けようとしたが、鍵がかかっていて開かなかった。

そのため、秀人は勢い良くドアを叩き始める。

しばらくの間、誰も出て来なかったが、秀人がしつこく叩き続けると、ようやくドアが開き、1人の男子生徒が出て来た。

「何だよ？」

「ここに和孝いるよな？」

「いない」

「そっか……。和孝、聞こえるか!？」

その時、中から和孝の声が聞こえた。

「素直に中へ入れたらどうだ？」

「……わかった、入れ」

「春奈、お前は部活に……」

秀人は春奈を巻き込まないようにしようとしたが、春奈は既に中へ入ってしまった。

「バカ！」

慌てて、秀人も入った後、ドアはまた閉められた。

「お前は出てけよ」

「秀人！」

和孝は秀人の姿を確認し、泣きそうな表情を見せる。

そこには麻雀を行うためのマットを敷いたテーブルがあり、上には麻雀牌が転がっている。

先程、ドアを開けた生徒の他に2人の男子生徒がテーブルに着き、和孝を入れれば4人になる。

「賭け麻雀か？」

「秀人、どうしよう……？」

その様子から、秀人は和孝が負けているのだろうと判断する。

「伝説の雀士になるなんて言い触らしてるから、カモにされるんだよ。点差はどうなってる？」

「今、俺の1人和がりですいつから24000点ももらった」

向かいに座る生徒は笑みを浮かべている。

その様子から、この生徒がリーダーのようなものだろうと秀人は判断する。

「スタートは25000点だよな？てことは、お前は49000点で、和孝は残り10000点って事か」

秀人は軽く深呼吸をする。

「……ここから安全に出るためには、和孝が勝つのが手っ取り早そうだな」

秀人の言葉に他の者は笑う。

「次は丁度、そいつの親だ。連勝すれば逆転出来るかもな」

そこで秀人は頭を働かせる。

「俺が和孝の代わりに入るのは可能か？」

「え？」

秀人の質問を受け、少しだけ考えた後、向かいに座る生徒はまた笑みを浮かべる。

「条件を飲むならな」

「条件？」

「その女、立石だよな？そいつを賭ける」

「は？」

秀人は春奈に目をやる。

「お前がこのまま負けたら、その女を好きにさせる」

「お前、同じ年だよな？ませた事言ってるんじゃないよ」

「私はそれで構いません！」

春奈は真剣な表情だ。

「お前、意味わかってるのか？」

「秀人君が勝てば良いって事ですよね？」

「負けたら、何されるかわからねえだろ」

「おい、その女が了解してるなら良いだろ」

秀人は少しの間、また考え、決心するように大きく息を吐く。

「わかった。和孝、変われ」

「あ、うん」

秀人は席に着くと、麻雀牌を交ぜる。

「俺の親で良いんだよな？」

「ああ」

「じゃあ、始めよう」

そう言うと、秀人は慣れたように牌を積む。

「お前、慣れてるんだな。そいつ、牌を積んだ事がないと言って、時間がかかってたんだよ」

秀人はその言葉を特に気にする事なく、サイコロを振る。

そして、4人は手早く配牌を終える。

秀人は牌を倒したまま、大きく深呼吸をする。

「和孝、もう1度だけ、一生分の運を使い」

「え？」

「心から勝ちたいって願え」

「もう願ってるよ」

「だったら良い」

秀人は向かいに座る生徒に目を向ける。

「良いのか？」

「何がだ？」

「和孝が一生分の運を使って勝ちを望んだ。このまま始めれば俺が勝つちまう」

「良いから、さっさと牌を開ける」

「承諾したって事で良いんだな？」

秀人は牌を立てると、手早く並び替え、そのまま倒した。

「天和・四暗刻・大四喜・字一色。4倍役満で64000点オールだ」

秀人は冷めた口調で続ける。

「俺の逆転勝ちだ」

「これは参ったな……」

向かいに座る生徒は険しい表情を浮かべる。

「お前、麻雀はどこで覚えた？」

「子供相手に本気を出す、大人気ねえ親父とやって覚えた」

「雀荘に行った事はあるか？」

「2年ぐらい前に親父に連れられて、よく行ってたけど、今は全然行ってねえよ」

「そうか……」

それだけ確認すると、向かいに座る生徒は笑った。

「俺達3人……味方とは言え他にも2人いるのに、こんな役を完成させたって事は、まともにやって勝てる相手じゃないようだな。お前ら、ここは素直に負けを認めるぞ」

「良いんですか？」

「たく、いくら払えば良いんだ？」

「とりあえず、金なんていらねえから、ここから出してくれ。あと今後、和孝や春奈に仕返しみたいいな事するなよ」

秀人は席を立つ。

「俺達は負けたんだ。金は払う」
「だから、いらねえっての。納得いかねえなら、貸し1つって事にしてくれ」

秀人は和孝と春奈を連れて、そこを出た。

秀人達は軽く息をついた後、自分達の教室に向かった。

「俺、明日こそ死ぬかな……」

「何でだよ？」

「だって、一生分の運をまた使っちゃって……」

「お前、バカか？」

「え？」

和孝は意味がわからず、首を傾げる。

「久保さんの運は関係ないんですよ」

「ああ、春奈の言う通りだよ」

「正義は勝つという事です」

「お前もバカだな」

「え、なぜでしょうか？」

今更、イカサマをしたとも言えず、秀人は苦笑する。

「お前ら……今後、賭け麻雀とかするなよ。あと、春奈、俺が負けたらどうなってたか、本当にわかってたのか？」

「はい、わかっていたつもりです。でも、秀人君を信じていましたから」

「あのな……俺が勝つ保障なんてなかったんだ。そもそも、俺が麻雀出来るってことすら知らなかっただろ？」

「それでも信じてました」

そこで、春奈は大きく息を吸う。

「私、秀人君の彼女ですから」

その言葉に秀人と和孝は足を止める。

「だから、何があっても信じます」

その時、秀人は一瞬だけ和孝に目をやり、苦笑する。

「お前、とりあえず部活行けよ。みんな心配してるかもしれないだろ」

「あ、そうでした。じゃあ、失礼します」

春奈は早足でその場を後にする。

「春奈ちゃんって、あんな感じだったんだね」

「前に言っただろ。お前らが持つてる印象は間違ってるって」

「でも、秀人の前でだけなんじゃないかな？」

その時、前に夢がいたため、2人は足を止める。

「お前、帰ってなかったのか？」

夢は顔を下に向けたまま、何も答えない。

「遠野？」

「お前と立石、付き合ってたんだな……」

夢は駆け足で行ってしまった。

「最悪かもね……」

「え？」

和孝の言葉の意味が、秀人にはわからなかった。

6月10日(木)

朝、早い時間に出発する事にも慣れ始め、秀人はいつも通り、春奈と合流した。

「昨日、部活遅れて問題なかったか？」

「はい、大丈夫でした」

「昨日は何か、和孝の問題に巻き込まれて悪かったな」

「でも、秀人君が守ってくれましたから」

「あれ、守ったって言えるのか？」

秀人は呆れたように苦笑する。

「それで、昨夜は眠れたか？」

「……あの小説、読み進めるうち、さらに怖くなりました、昨夜もなかなか寝付けませんでした」

「お前、怖いホント苦手なんだな。幽霊とか信じる方なのか？」

「はい、信じています……。なので、怖くなってしまいます」
春奈はため息をつく。

「つまらねえなら、読まなくて良いだろ」

「いえ、つまらないわけではないんです。続きはとても気になりますし……」

「怖いもの見たさって奴か？」

「はい、そうかもしれません」

その時、電車が二和木駅に到着したため、2人は電車を降りる。

相変わらず、周りの生徒から注目されているが、秀人は特に気にしない事にする。

「及川？」

その時、後ろから声をかけられ、秀人は振り返る。

そこには夢が立っていた。

「ああ、遠野か。今日、遅くねえか？いつもはもっと早いだろ？」

「少し寝坊したんだ」

「珍しい事もあるんだな」

夢はそこで秀人の隣にいる春奈に目をやる。

「私も一緒に行つて良いか？」

「別に向かつてる先は一緒なんだし、いちいち聞かねえで良いだろ」

「本当に良いのか？」

「だから、俺は別に……」

秀人が目を向けると、春奈は顔を下に向け、困っている様子だった。

「……やっぱり、先に行く」

夢は寂しそうな表情を見せた後、先に行つてしまった。

秀人は春奈の様子を見て、ため息をつく。

「春奈、少しは人見知り、直したらどうだ？」

「え？」

「知つてる奴に挨拶したりすれば、それがきつかけになつて友達になれるかもしれねえだろ。今だつて遠野と話すチャンスだったじゃねえか」

「無視されてしまったら、落ち込んでしまいますので……」

「相変わらず、ネガティブだな……。それに、さっきは向こうから話しかけてきてただろ？」

「遠野さんは秀人君に話しかけていました。私にじゃないです」

「俺だけじゃなくて、お前にも話しかけてただろ。お前が何も答えねえから、遠野は先に行つちまつたんだろ」

「それなら、私は1人でも構いませんので、秀人君、遠野さんと一緒に……」

「たく、何でそうなるんだよ？」

秀人は諦めるようにため息をついた。

この日の昼食の時間、今まで行つていた和孝と夢と一緒にする工作を行わず、秀人はすぐ屋上に向かった。

秀人が屋上に着いた時、まだ春奈は来ていなかった。

それから、1分程が経過し、春奈が屋上にやってきた。

「あ、待たせてしまいましたか？」

「いつも待たせてるのは俺なんだし、たまには良いだろ」

秀人の言葉に春奈は笑顔を見せる。

2人はいつも通り、昼食を食べながら、他愛無い話をする。

「あ、ところで……」

「ん？」

「文化祭、秀人君のクラスは何をするんですか？」

「ああ……」

二和木高校では毎年、6月の最終週の土日で文化祭が開催される。今年も6月26日と27日がその日になる。

「うちは確か、和孝が男子全員と結託して、メイド喫茶になったな」「そうなんですか？」

「ただ、女子全員が反発して、結局男子も執事になるって事になったから、正確にはメイド・執事喫茶か。俺は正直楽なのが良かったんだよな……」

秀人の話には春奈は笑う。

「私のクラスは映画なんです」

「映画？」

「スクリーンと映写機を借りて、映画を流すだけなので、当日は一部の人以上は何もしなくて良いそうです」

「楽で良いな。うちのクラスもそういうのにすれば良かったのに……」

「でも、クラスで協力して何かをするって素敵だと思います……」
春奈の話し方から、今までクラスの輪に入って何かをした事がないのだろうと秀人は感じた。

「まあ、お前は演劇部の発表があるだろ？」

「はい、2日目の午後2時からなので、見に来て下さい」

「ああ、今年は見に行くよ。そういえば、他の文化部の発表もあるのか？」

「はい、同じ日の午前11時から吹奏楽部の演奏があります」

「実力至上主義の吹奏楽部か」

「でも、毎年素晴らしい演奏なんですよ？」

吹奏楽部はコンクールの入賞を目指しているだけあり、この学校の部活の中でも特に厳しいと有名だ。

「あと、私達の発表の後、午後3時からセッション部の演奏があります」

「セッション部なんてあったのか？」

「はい、部員は少ないのですが……確か、村雨先生が顧問をしていたはずですよ」

「あいつ、音楽なんて合いそうにねえのにな」

運動部であれば、時々ヘルプで参加する事があるため、詳しいが、文化部になると秀人はほとんど知らないも同然だ。

「まあ、今年はお前の部の発表だけ見れば良いかな」

「ダメですよ。秀人君のクラスの喫茶店、私、行きます」

「俺、接客してねえ可能性高いからな」

「それは困ります……」

春奈が泣きそうな表情を見せると、秀人は笑った。

授業が終わり、生徒達はすぐに帰り支度を始める。

「和孝、今日、家に行っても良いか？」

「うん、良いよ。最近、遊んでなかったもんね」

「あ、及川？」

夢に呼び止められ、秀人は振り返る。

「帰りは立石と一緒にしないのか？」

「ああ、あいつ、部活で忙しいんだよ」

「だったら、私も一緒に帰って良いか？」

夢の質問に秀人と和孝は顔を見合わせる。

「俺、和孝の家に行く予定だから……」

「途中まででも良いんだ」

「まあ、方角が一緒なら良いんじゃないかねえの？」

秀人が承諾する形で、3人は教室を出る。

「あ、朝は悪かったな。あいつ、人見知りなんだよ」

「いや、私も突然声をかけて悪かった」

「お前、何も悪い事してねえのに謝るなよ」

秀人は軽く笑う。

「及川、立石とはどこで知り合ったんだ？」

「別にほとんど知らなかったよ」

「ほとんど知らないのに、付き合ってるのか？」

「俺、何か説教されるような事してるか？」

「あ、いや……」

和孝は特に話をする事なく、秀人と夢の話の話を黙って聞いている。

「お前が誰かと付き合うなんて思ってなかったんだ」

「別に、俺が誰かと付き合ったところで、困る事はねえだろ？」

「それは……」

夢はそこで言葉を詰まらせる。

「ある」

「え？」

夢は唇を噛み、それ以上何も言わなかった。

「遠野？」

「今日は一緒に帰ってくれて、ありがとう」

夢は走って行ってしまった。

「何だったんだよ？」

「秀人、鈍感だよな」

「は？」

和孝は秀人の様子を見て、ため息をついた。

和孝の家に入ると、秀人は大きく伸びをした。

「和孝、ジューズ持ってこいよ」

「あなた、何様ですか!？」

「しょうがねえな。自分で取ってくるよ」

「いや、何勝手に人の冷蔵庫、漁ろうとしてるんですか!？」

和孝は秀人を無理やり自分の部屋に案内する。

「また、麻雀でもするのか？」

「いや、あれはもう、懲りたから良いや……」

「お前、相変わらず飽きっぽいな」

予想していたとはいえ、秀人は呆れてしまった。

「ところでさ……」

和孝は少しだけ言葉を詰まらせる。

「秀人と春奈ちゃん、結構上手くいってるの？」

「は？」

和孝の質問の意図が秀人にはわからない。

「どういう意味だよ？そもそも、ふりなんだから、上手くいくも何もねえだろ？」

「そうなんだけどね。昨日の2人見てたら、ホントの恋人かと思っただからさ」

「何だよそれ？」

秀人は軽く笑う。

「……最初に秀人が言った通りだったかもね」

「どういう意味だよ？」

「春奈ちゃんに、すぐ告白が嘘だって話して、別れた方が良かったかなって。春奈ちゃん、秀人の事……さらに好きになっちゃってるよね？」

和孝の言葉に秀人は何も返せない。

「秀人と一緒にいる時の春奈ちゃん、あんな感じなんだなって昨日わかって、秀人の事、ホントに好きなんだなって思ったよ」

「そんな事言っても、正直、友達と大して変わらねえ感じだよ」

「それが、春奈ちゃんにとっては特別なんじゃないの？まあ、俺も秀人の事、甘く見てたから、文句言えないかな」

「甘く見てたって、どういう意味だよ？」

秀人は少しだけ不機嫌な様子を見せる。

「あ、別に悪口のもりじゃないよ。秀人の事だから、上手くないかないで、すぐ別れる事になると思ってたんだよ」

「は？」

「恋人のふりなんて出来そうには見えなかったし、面倒くさがりの秀人が相手じゃ、春奈ちゃんの方が愛想尽かすだろうなってね」

和孝の言葉を秀人も考える。

確かに、秀人自身、自分らしくない事をしていると感じる事は多い。

「だから、秀人も春奈ちゃんに気があるのかなってね」

「そんな事ねえよ」

「だったら、なるべく早く、春奈ちゃんと別れた方が良くかもね」

「は？」

「一応、俺の方で、噂の修正はやってるんだけどね。周りは騙せても、春奈ちゃんや夢ちゃんはそうもいかないし、あまり長引かせると、周りだって騙し切れないよ」

「何で、そこで遠野が出てくるんだよ？」

秀人の質問に、和孝は笑顔を見せる。

「秀人と夢ちゃん、結構相性良いと思うんだよね」

「どつという意味だよ？」

「別に何でもない」

和孝は呆れたように、軽くため息をついた。

「まあ、最後は秀人が決めないといけない事だし、任せるよ」

和孝の笑顔に秀人は複雑な気持ちを持った。

6月11日(金)

「秀人君、おはようございます」

「おはよう」

この日も三枝谷駅で秀人と春奈は合流した。

「秀人君、明日の補習、また一緒に受けませんか？」

「補習、面倒なんだよな」

「明日も午後は部活があるので、私も午前中しか受けません。午前中だけでも一緒に受けましょうよ」

「まあ、午前だけなら良いか……」

「あと、明後日は部活も休みなので、またどこかへ行きませんか？秀人君、行きたい所ないですか？私は……」

春奈が嬉しそうに休みの提案を出したが、秀人は別の事を考えていた。

「秀人君？」

「ん？」

「聞いてますか？」

「ああ、悪い」

実際、春奈の話を聞いていなかったため、秀人は苦笑する。

「何か、ありましたか？」

「いや、その……春奈は俺と一緒に楽しいか？」

「はい、楽しいですよ」

春奈の笑顔から、その言葉が本心なんだろうと、秀人は感じた。そして、和孝が言っていた事を思い返していた。

「秀人君は……楽しくないですか？」

「は？」

「私、秀人君に迷惑かけてばかりですし……」

「お前、何回言えばわかるんだよ？」

秀人は呆れたようにため息をつく。

「お前がいつ、俺に迷惑かけたんだよ？」

「それは……」

「いつ、どこで、どんな迷惑をかけたんだよ？」

「え……」

春奈は困った様子を見せる。

「ほら、迷惑なんて、かけてねえだろ？」

「具体的には言えませんが、迷惑をかけていると思います」

「何で、そう思うんだよ？」

「私、人付き合いが得意ではないので……」

秀人は少しだけ考えた後、笑った。

「それ、わからねえ事で不安になってるだけみたいだな」

「え？」

「良いと判断出来るもの以外は全部悪いものだなんて考えてねえか？」

春奈は秀人の言葉に何も答えなかった。

「例えば、誰かにプレゼントをしたとして、そいつの表情が喜んでるかどうかわからなかったら、どう感じる？」

「プレゼントが良くなかったんだと思います」

「それがネガティブだって言ってるんだよ。ただ単に表情が読み辛い奴なのかもしれないねえだろ？」

「そうでしょうか……？」

春奈は少しだけ考えた後、秀人の目を見る。

「確かに、秀人君の事、私は知らない事ばかりで、いつも不安です。秀人君がどんな事を考えているのか、わからなくて不安です。それで、迷惑をかけてしまっているのではないかと、不安です。話をしながら、春奈は顔を下に向けてしまった。

「俺、感情をあまり表情に出さねえタイプなのかもしれないな」

「あ、別に秀人君は悪くないです」

「俺の考えてる事がわからねえからって、春奈も悪くねえだろ？」

春奈が納得していないような表情だったため、秀人は軽く息をつく。

「まあ、少しずつ自信持てるようにしろよ」

「……はい」

そこで、秀人は春奈の顔をじっと見た。

「俺はお前と一緒に楽しいよ」

「え？」

「明後日、どこに行くか考えるか」

「はい！」

春奈は嬉しそうに返事をした。

和孝の言葉が気にならなかったわけではないが、秀人はもう少しだけ、今の関係を続けようと思っていた。

しかし、なぜそんな風に自分が思うのかだけは、どうしてもわからなかった。

電車を降り、2人は休みの予定を話し合いながら学校を目指した。

「この前みたいに歩き回るのは、やめるか」

「だったら、映画を見に行きませんか？」

「見たい映画でもあるのか？」

「いえ、今、何を上映しているかも知りません」

「それで、よく映画なんて言葉が出たな」

「あ、お母さんとお父さんが、デートの定番だと言っていましたの
で……」

「また、親かよ？」

その時、春奈は大きな欠伸をする。

「あ、ごめんなさい」

「寝不足か？」

「はい……。でも、あと少しで借りていた小説、読み終わりますよ」

「俺の方もあと少しで読み終わりそうだよ」

「そうしたら、また小説交換しましょうね」

「ああ、そうだな……。でも、寝不足は体に悪いから、無理するな
よ」

「はい」

結局、休みの予定が決まらないまま、2人は学校に到着し、いつも通り別れた。

秀人が教室に入ってから少しすると、いつもより早く和孝がやって来た。

「秀人、おはよう！」

「お前、今日は随分と早いんだな」

「何か、今日の朝は爽やかだったから、早く来たんだよね！」

「じゃあ、テンション下げるために、2発ぐらい殴って良いか？」

「何ですか!？」

和孝はそこで、少しだけ表情を変える。

「秀人も相変わらず早いね」

「そんな事言っなよ。あと、俺……」

「及川？」

夢に声をかけられ、秀人は話を中断する。

「何だよ？」

「その……やっぱり、帰りに話す」

「は？」

席に戻った夢を秀人は目で追った。

「……何だよ？」

「さあね……。あ、さっき、何か言おうとしてたけど、何？」

「ああ……いや、何でもねえよ」

「気になるから、言ってよ」

「……お前の後ろに半透明の人影が見える」

「え!？」

慌てて辺りを確認する和孝を見て、秀人は笑った。

昼食の時間になり、秀人はすぐに席を立った。

「今日も春奈ちゃんと一緒なの？」

「別に良いだろ」

秀人は足早に屋上に向かった。

春奈と合流した後、昼食を食べながら、2人は休日の予定をまた考える。

「何なら、映画じゃなくて、また舞台見に行くか？」

「舞台はチケットが入手出来ない事もありますし、休日に何の舞台があるかもわからないです」

「あ、そうだよな。じゃあ、旅行……日帰りで行ってもしようがねえよな」

予定が決まらず、秀人と春奈は次第に、他のカップルが行きそうなデートスポットを考える事にした。

「映画は定番だって、よく聞くよな」

「秀人君、見たい映画は、ないんですか？」

「俺、映画とか、あまり興味ねえんだよ」

「そうですか……」

「あとは……カラオケデートなんて言うのも聞くな」

「秀人君、カラオケ行くんですか？」

「和孝とたまに行くよ。明後日はカラオケにするか？」

「私、カラオケ行った事ないんですけど、秀人君が行きたいなら……」

……

「いや、やっぱりやめよう」

春奈の性格を考えれば、カラオケは避けるべきだと判断し、秀人は別の案を考える。

その時、春奈がくしゃみをした。

「ごめんなさい」

「大丈夫か？」

「はい……」

そこで、また春奈はくしゃみをする。

「風邪か？」

「いえ、大丈夫ですから」

「体調、良くねえなら、無理するなよ」

「本当に大丈夫ですよ」

「まあ、今日は小説読まねえで、すぐに寝るよ」

「はい、そうします」

その後も休日の予定を考えたが、お昼休みの間には結局決まらなかったため、電話かメールで相談する事にして、2人は別れた。

午後の授業が終わり、和孝は大きな伸びをした後、秀人に顔を向ける。

「秀人、今日も家に来る？」

「ああ、そうするよ」

「明日から休みだね」

「補習があるだろ」

「落ち込む事、言わないでよ……」

その時、夢が近づいてきた。

「及川？」

「あ、そういえば、話があるとか言ってたけど……」

「ちよつと来てくれ」

「おい？」

夢に手を引かれ、秀人は教室を出る。

「どうしたんだよ？」

「話があるんだ」

「だったら、教室で話せよ」

「ねえ、ちよつと？」

和孝も慌てた様子で、秀人達を追いかける。

「何なんだよ？」

屋上に着くと、夢は手を離す。

「……夢ちゃん、どうしちゃったの？」

「名前で呼ぶな！」

夢に殴られ、和孝は倒れる。

「及川……立石の事、好きなのか？」

「だから、それはお前に関係ねえだろ」

「関係あるんだ！」

夢は秀人の目を真つ直ぐ見る。

「何の関係があるんだよ？」

秀人の質問に、夢は顔を赤くする。

「その……私は……」

「夢ちゃん、ストップ！」

「名前で呼ぶなと言ってるだろ！」

「あ、ごめん！とにかく聞いてよ！」

和孝はそこで少しだけ間を空ける。

「秀人は春奈ちゃんの事、好きじゃないんだよ」

「和孝？」

「もう夢ちゃんには話した方が良いよ」

「何でだよ？」

「とにかく、俺から話すよ」

和孝は慌てた様子で続ける。

「罰ゲームだったんだよ」

「え？」

「麻雀で俺が勝って、秀人に罰ゲームを提案したの」

「どういう事だ？」

「それが、春奈ちゃんに告白するって罰ゲームだったんだよ」

「え？」

「そうしたら、春奈ちゃんが秀人の事、好きだったみたいで、告白が嘘だって言えなくなっちゃって……。それで、今はとりあえず付き合ってるふりをしてるだけなんだよ」

「そうだったのか？」

「俺達もこんな事になるなんて思わなかったんだけど……」

その時、物音がしたため、3人は階段の方を見た。

「あ、ごめんなさい」

そこには弁当箱を落としてしまった春奈がいた。

「今日、部活が休みになりましたので、一緒に帰ろうと思いましたが、教室へ行ったら丁度、秀人君が出て来ましたので……」

それは、今までの話を聞いていたという意味だと、全員がわかった。

「ごめんなさい」

春奈は弁当箱を拾うと、そのまま行ってしまった。

「春奈！」

秀人の呼びかけを無視するように、春奈は足を止めなかった。

「えっと、秀人……？」

和孝と夢はどうしたら良いかわからず、呆然としていた。

そんな2人を見て、秀人は軽く笑う。

「……これで罰ゲーム終了だな」

秀人は和孝と夢を残して、その場を後にした。

6月12日(土)

この日、秀人は目覚ましをかけていなかったため、目を覚ました時には9時を回っていた。

既に補習が始まる時間を過ぎているが、秀人はしばらく横になったままだった。

ふと春奈の事を考え、秀人は起き上がる。

そして、午前の最後となる英語の補習だけでも受けようと支度を始めた。

その後、春奈とは何も連絡を取っていないままだ。

電話かメールをしようとも考えたが、直接会って話すべきだと考え、今は何もしていない形だ。

秀人は朝食を取る等して支度を終わると、学校に向かった。

電車の時間がいつもと違うため、時間がかかってしまったが、秀人は英語の補習が始まる前に学校に着いた。

丁度、休憩時間だったため、何人かの生徒とすれ違いながら、秀人は小講堂に入る。

「あ、秀人！」

和孝から声をかけられ、秀人はそちらに目をやる。

「お前も来てたんだな」

「うん、夢ちゃんが怖いしね……」

辺りを見回したが、春奈の姿はなかった。

「春奈ちゃん、今日は来てないよ」

「そっか……」

秀人はカバンを持ち直す。

「じゃあ、帰るよ」

「いや、せつかく来たんだから受けようよ……」

「及川、来るのが遅いじゃないか」

夢は不機嫌な様子だ。

「今日は元々来るつもりなかったんだよ」

「立石とはあの後、話したか？」

「いや、直接会って話そうと思ってたんだよ。今日、来てねえみた
いだけだな」

秀人は軽くため息をつく。

「まあ、これで良かったんじゃないかな？あのままでしたら、ます
ます別れを切り出し辛くなってただろうしさ」

「そうかもしれないけど……」

「そろそろ英語の補習を始めますよ」

その時、神楽が入って来たため、和孝と夢は席に着いた。

「英語ぐらい受けるか……」

帰るタイミングを逃したため、秀人はしょうがなく席に着き、補習
を受ける事にした。

補習が終わると、秀人は出て行こうとした神楽を追いかける。

「先生？」

「ん？」

秀人の呼びかけに神楽は振り返る。

「あの……」

「今日は立石さん、お休みだそうね」

「え？」

「風邪を引いてしまったから、部活も休むと連絡があっただけど？」

秀人が驚いた様子を見せていたため、神楽は首を傾げる。

「及川君、聞いてないの？」

「あ、はい……」

「もしかして、ケンカでもしたのかしら？」

「……そんな所です」

秀人の様子を見て、神楽は少しだけ笑う。

「ちゃんと仲直りしないとダメよ？」

「……はい」

神楽は最後にもう1度だけ笑った後、小講堂を出て行った。

「秀人、午後の補習はどうするの？」

その時、後ろから和孝が声をかけて来たため、秀人は振り返る。

「俺は帰るよ」

「秀人、英語の補習しか受けてないでしょ……」

「元々受ける気はなかったって言ってるだろ」

秀人は教科書等をカバンにしまう。

「及川？」

「教科書とかも英語しか持って来てねえし、遠野が何と言おうと帰るからな」

「いや、そういうわけじゃないんだ……」

夢は少しだけ考えた後、口を開く。

「明日、及川は何か予定あるか？」

「まあ、特にねえけど？」

「だったら……買い物に付き合ってくれないか？」

「そんなの女友達と行けよ」

「秀人、暇なら行ってあげなよ」

和孝は気を使うような言い方だ。

「及川に……話したい事もあるんだ」

「だったら、今、言えば良いだろ」

「ここじゃ言いたくないんだ」

夢が思い悩んでいる様子だったため、秀人は少しだけ考える。

「2人で行くのか？」

「嫌か？」

「いや、だって……おかしいだろ」

「だったら、俺も行くよ」

和孝は夢に近付くと、夢の耳元で何かを言った。

しかし、秀人には和孝が何を言ったのかわからない。

「……そうだな。和孝も一緒に3人で行こう」

「まあ、それで良いなら……明日、何時にどこへ行けば良い？」

それから、夢と待ち合わせ場所を決めた後、秀人は学校を後にした。

秀人が家に着いた時、両親は出掛けているのか、いなかった。

秀人は簡単な昼食を作り、食べた後、自分の部屋に戻る。

春奈にメールしようとも考えたが、文が上手く書けなかったため、結局、何も送らなかった。

それから、しばらくは小説を読む等して、時間を過ごしていたが、春奈から借りた小説を読み終わると、やる事がなくなってしまった。ふと、秀人は春奈と話していた時に気付いた、昔の事を思い出せない理由を考えた。

そして、家の倉庫に向かうと、昔のアルバム等がないか探し始める。ずっと開けていなかったため、倉庫の中は埃で一杯だった。

秀人はマスクを付けると、順番に物を外に出していった。

「ホントにねえのかな？」

子供の玩具や古い雑誌等を出しながら、目的の物が見つからず、秀人はため息をつく。

「秀人、何やってんだ!？」

その時、弘の怒鳴り声が聞こえ、秀人は手を止める。

「ああ、おかえり。アルバム探してるんだけど……」

「そんな所にはない!」

弘は秀人の腕を引き、倉庫から離す。

「あるかもしれねえだろ? 何怒ってるんだよ?」

弘が怒っている理由がわからず、秀人も不機嫌になる。

「……中に秘蔵工口本があるんだよ」

「は?」

「そんな物があると、由香里にばれると大変だろうが!」

「……だったら、お袋の前でそんな事言うなよ」

弘が振り返ると、そこには複雑な表情の由香里がいた。

「あ、由香里、今の話は違うんだ……」

「……俺、部屋に戻るからな」

秀人はアルバム探しを諦めると、両親を残して部屋に戻った。

6月13日(日)

夢達との待ち合わせ場所は、先週、春奈と待ち合わせをした場所と同じだった。

秀人が待ち合わせ場所に来た時、既に夢はそこにいた。

夢の格好は男物のYシャツにジーンズといったラフな格好だ。

「悪い、待たせちゃったか？」

「いや、私も来たばかりだ」

夢は秀人と合流すると笑顔を見せる。

「和孝は？」

「あ、その……今日は来れなくなったらしい」

「は？」

「予定が入ったらしいんだ」

「ホントかよ……」

秀人は和孝に確認しようと携帯電話を取り出す。

「あ、待ってくれ。確か……電話、出れないと言っていたんだ」

「たく、どんな用事だよ……」

秀人は諦めると、携帯電話をしまう。

「じゃあ、どうするんだよ？」

「……せつかく来たんだ。2人で行かないか？」

「まあ、しょうがねえか」

「及川、昼は食べて来たか？」

「いや、まだだよ」

「だったら、先に昼を食べよう」

「ああ、良いけど、どこに入るんだ？」

「丁度、行きたい店があるんだ」

夢の案内で、2人は近くにあるパスタ屋に向かった。

「この店、来た事あるか？」

「ああ、まあ、1度だけな」

そこは春奈と食事をした、あの店だった。

2人は料理を注文すると、少しの間、沈黙が走る。

「今日、買い物って言ってたけど、何買った？」

「その……服を買おうと思ってる」

「は？」

「まあ、買うかどうかは見て決める。もしかしたら見るだけで終わるかもしれない」

「それなら、俺とかじゃなくて女友達でも誘えば良かっただろ」

「その……及川に服を見てもらいたいと思ったんだ」

「何で俺なんだよ？」

「それは……後で話す」

「たく、服ってどんな服だよ？今着てるようなラフなやつか？」

「いや……もっと、可愛い服を買おうと思ってる」

「え？」

「私だって年頃の女だ」

「だったら、尚更女友達を誘えよ」

「……及川が良いと思う服を選びたいんだ」

「俺、女の服なんて、よくわからねえよ」

その時、料理が来たため、2人は話を中断し、食べ始めた。

2人は食事を終わると、すぐ店を出る事にした。

「服買うなら、俺が奢ろうか？」

「え、良いのか？」

「ここ安いしな」

「悪いな」

秀人が会計を済ませ、2人は店を出る。

そのまま、2人は近くのデパートに入り、婦人服売り場に向かった。

「どんな服が良いと思う？」

「あのな……お前が服選べよ。俺が良いかどうか判断してやるから」

「あ、そうだな……」

夢は近くにあった服を手取る。

「どうだ？」

「うーん、派手過ぎねえか？」

「じゃあ、こっちは？」

「それだと地味過ぎる気がするけど……」

「この服なら、どうだ？」

「女の子みたいな服だな」

「私は女の子だぞ」

夢は不機嫌な様子を見せる。

「お前、何か今日、無理してねえか？」

「え？」

「変に女らしいって事に拘ってるし、あと、化粧もしてるだろ？」

「別に普通だ」

「どこがだよ？」

秀人は呆れたように、ため息をつく。

「お前、その服置いて、ちょっと来い」

秀人は夢を連れて紳士服売り場に向かう。

「及川、ここにあるのは男物だぞ？」

「良いから黙ってる。今着てる服、お前が選んだのか？」

「ああ、そうだが……」

「それだけだと寂しいから、例えば……」

秀人はそこにあったベストやネクタイを取る。

「ほら」

「え、ああ……」

「あと、帽子も良いな」

戸惑いながら、夢は秀人に渡された物を身に付ける。

「まあ、少し足したただけだけど、大分違うだろ？」

夢は鏡の前に立つ。

「さっきあった服より、遠野はそういう服の方が合うんじゃないかねえか？髪だってシヨートなんだし、動きやすいラフな服装で……」

「でも、私は女として扱って欲しいんだ！」

夢は泣きそうな表情を見せる。

「もつとスカートとか、女の子らしい服を着て、可愛いと思ってもらいたいんだ」

秀人はしばらく黙っていたが、少しした後、笑った。

「笑うな！」

「あ、悪い……別に遠野は女だろ」

「え？」

「まあ、男っぽいつて部分はあるのかもしねえけど、それも何だ……魅力の1つにすれば良いじゃねえかよ」

秀人の言葉を聞き、夢は改めて鏡を見る。

「その格好、俺は良いと思うし、そもそもお前の事、俺はいつも女として扱ってる」

「そうは思えないぞ……」

「そもそも、女として扱うって何だよ？」

「それは……」

「お前がどう感じてるかは知らねえけど、俺はお前の事を女として扱ってる。嘘じゃねえからな」

「そうか……一応、女として扱ってくれてるのか」

夢は少しだけ嬉しそうに笑う。

「及川、この格好、私も良いと思うぞ」

「なら、良かった。買うのか？」

「ああ、そうする」

夢がいつもと同じ様子になったため、秀人は安心したように息をついた。

夢はベスト等、買った物をすぐ身に付けた。

「この後はどうする？」

「及川は何か見たい物ないのか？」

「だったら、本屋に行きたいな」

「本屋なんて、2人で行く所じゃないと思うぞ」

「ああ、俺もそう思う」

春奈の事を思い出し、秀人は笑う。

「まあ、買い物付き合ってもらったし、及川が行きたいなら、しょうがないな」

言葉とは裏腹に、夢は相変わらず嬉しそうな表情を浮かべている。

その時、秀人は1人で歩いている小さな女の子を見つける。

「及川、行かないのか？」

「え、ああ……」

秀人はもう1度、女の子の方へ目を向けると、母親らしき人物と丁度合流したところだった。

それだけ確認すると、秀人は夢と共に最上階にある本屋へ向かった。本屋に着くと、秀人は小説が置いてある棚を眺める。

「及川、小説なんて読むのか？」

「ああ、暇な時にな。遠野は読まねえのか？」

「私は時々読む程度だな」

その時、秀人は春奈から借りた小説の作者が書いた、別の小説を見つけ、手に取る。

「お前らしくないジャンルだな」

「あ……いや、有名だつて聞いたんだ。恋愛小説じゃなきゃ読むんだけどな」

秀人は小説を棚に戻すと、ホラーやミステリーが置いてある棚を見る事にした。

2人はその後、アクセサリー等を見たりしたが、他に行く所がなくなつたため、早めに解散する事になった。

「確か、電車逆だよな？」

「ああ、そうだな」

学校から帰る時も秀人と夢は逆方向に向かう電車に乗って帰っている。

それでも、ホームが同じだったため、2人は一緒に電車を待つ。

「遠野の方の電車が先に来るみたいだな」

秀人は電車が来る時間を確認する。

「及川、今日は付き合ってくれて、ありがとう」

「別に大した事してねえよ。あ、とりあえず、和孝には今度、埋め合わせしてもらわねえとな」

秀人の言葉に、夢は複雑な表情を浮かべる。

「及川、実は……久保は初めから来るつもりなかったんだ」

「え？」

「私と及川を2人きりにするために、気を使ってくれたんだ」

夢の言葉の意味がわからず、秀人は首を傾げる。

「どういう事だよ？」

「……秀人に話があるんだ」

夢は顔を上げ、秀人の目を見る。

「今年、クラスが一緒になったばかりだが、お前は遅刻ばかりして、私にとって問題児だった」

「それは和孝も一緒だろ？」

「お前にとって、私は男友達のようなものなのかもしれないが、お前と一緒にいると楽しいんだ」

「だから、お前の事も女として扱ってるっての」

秀人の言葉に夢は少しだけ笑う。

「ずっと、こうしていられば良いと思ってたんだ。友達として、バカをやっていたら良いと……」

夢は言葉を詰まらせる。

「お前と立石が付き合っているという噂を聞いて、まず私は、お前が恋愛なんてするわけないと思った」

「それ、当たってるよ。正直、恋愛に興味ねえからな」

「でも……嘘だったとは言え、お前が立石と付き合っていると知って……私は辛かったんだ」

「何でだよ？」

まだ意味がわかっていない秀人は夢の様子を見て笑った。

「それで、私は友達としてではなく……恋人として、及川と一緒にいたいと思っただんだ」

夢は少しだけ間を空けた後、秀人に真剣な目を向ける。

「私は及川の事が好きだ」

「……え？」

「及川、恋愛に興味がないと言ったが、私の事を女として……恋人候補として見て欲しいんだ」

「えっと……」

「今、返事は知らない。聞いても断られるとわかってる」

夢は顔を下に向けた。

「私の気持ちを知ったからと言って、変に気を使ったりしないで欲しい。出来れば、今まで通り接して欲しい。……私、わがままだな」

その時、夢が乗る電車がやってきた。

「話は以上だ」

夢は秀人に背を向け、電車に乗った。

「遠野!？」

その時、電車の扉が閉まり、少しした後、背を向けたままの夢を乗せて走り去ってしまった。

ホームに残された秀人は、夢を乗せた電車をしばらく眺めていた。

6月14日(月)

朝、三枝谷駅に電車が停まった時、秀人はホームを見回した。しかし、春奈の姿はなかった。

秀人はホームから目を離すと、ため息をつく。

そして、電車が二和木駅に着くと、秀人は1人で学校に向かった。

「及川？」

その声に秀人が振り返ると、そこには夢がいた。

「おはよう」

「ああ……おはよう」

「一緒に行かないか？」

夢がいつも通りの様子で接してきたため、秀人もそれに合わせる事にする。

「ああ、そうだな」

「そうだ、文化祭の件で、服等用意しないといけないから、そろそろ準備を始める事になる。及川、手伝ってくれないか？」

「準備、手伝ったら、当日サボっても良いか？」

「そんな事、私が許さないぞ」

「だったら、俺に何のメリットもねえじゃねえかよ」

「時間は空いてるはずだ」

「俺、色々忙しいんだよ」

2人は言い争いにも似た話をしながら学校に着いた。

途中、3年A組の教室の前を通った時、秀人は教室の中に目をやった。

しかし、春奈は、やはり来ていないようだった。

「秀人、おはよう」

この日、和孝は先に来ていた。

「何だよ、今日も遅刻じゃねえのか」

「あのね……」

和孝はそこで笑みを浮かべる。

「秀人、昨日はどうだった？」

「お前、そのうち埋め合わせしろよな」

「俺は気を使っただよ」

「というか、遠野の事、気付いてたのか？」

「そんな事を聞くと事は、秀人もようやく気付いたんだね」

「……昨日、遠野に告白されたよ」

秀人は軽くため息をつく。

「お前、いつから知ってたんだ？」

「俺から言わせれば、今まで気付かなかった秀人がおかしいよ」
和孝は呆れたような表情だ。

「あと、今更だけど、春奈ちゃんの事はごめんね」

「俺に謝ったって、しょうがねえだろ」

秀人は少しだけ怒りを感じつつも、特に何も言わず、席に着いた。

午前中、最後の授業は英語だった。

秀人は授業が終わると、廊下に出た神楽を追いかける。

「あ、先生？」

「はい？」

神楽は振り返り、声をかけてきたのが秀人だと気付くと、笑顔を見せる。

「立石さんは今日も休みだそうよ」

「え？」

「まだ体調が良くならないみたいなの」

「そうなんですか……」

秀人は落ち込んだように顔を下に向ける。

「早く良くなってくれと良いわね」

「あ、はい……ありがとうございます」

秀人はそれだけ確認すると、教室に戻る。

「和孝、今日からはまた、昼、一緒に食うか？」

「うん、そっだね」

「あ、及川？」

教室を出ようとした秀人を夢は呼び止める。

「弁当を作って来たんだ。良かったら、一緒に食べないか？」

「えっと……」

「2人きりが嫌なら、久保も一緒に構わない」

「まあ、それなら良いか……」

「あの、俺って強制参加なんですかね？」

「立ち入り禁止の場所に行くのは気が引けるが、屋上に行くか？」

「ああ、そっだな」

「あの、俺は行くって言うてないんですけど？」

「さっさと来いっての」

秀人は和孝を引っ張り、夢と共に屋上に向かう。

屋上に着くと、3人は適当な場所に座った。

「料理はあまり自信がないんだが……」

夢は大きめの弁当箱を2つ、地面に並べると、緊張した様子で蓋を開けた。

「さすがに重箱じゃねえんだな」

「え？」

「あ、こつちの話」

秀人は春奈の事を思い出し、苦笑する。

「食べてくれ」

「じゃあ、頂きます」

箸を借り、秀人はおかずを口に運ぶ。

「どうだ？」

「普通に美味しいけど？」

「惣菜や冷凍食品に少し手を加えた程度だが、頑張って作ったんだ」

「一から作るうとすると難しいのか？」

「ああ、下ごしらえ等で時間がかかってしまうんだ」

「……あいつ、やっぱり無理してたじゃねえか」

春奈の弁当が、改めて手の込んだものと知り、秀人は申し訳なく感
じた。

「あの……俺はどうやって食べれば？」

「ああ、箸、2膳しかないんだ。悪いな」

「だったら、パン買いに行っても良いかな？」

「お前、最近太ってきてるから、ダイエットしろ」

「この前、痩せ過ぎて医者に言われたんですけどね」

「その医者、ヤブ医者なんだよ」

「あなた、その言葉、本人の前で言ってお下さいよ」

結局、秀人とバカなやり取りを続け、和孝はその日、昼抜きとなっ
た。

この日の授業が終わり、和孝は手早く帰り支度を終える。

「じゃあ、俺は用事あるから、すぐ帰るね」

「お前、また麻雀じゃねえだろうな？」

「違うよ。今日は親が休みだから、一緒に食事行く事になったの」

「昼抜きにして良かったじゃねえか。きっと、いつもより飯が美味
いだろうな」

「何、良い事した気になってるんですかね？まあ、とにかく先に帰
るからね」

和孝は足早に教室を出て行った。

「及川？」

秀人が顔を向けると、夢が笑顔で立っていた。

「良かったら、駅まで一緒に帰らないか？」

「2人で帰ったりしたら、変な噂立てられるんじゃないか？」

「別に私と一緒にいても友達としか思われないだろ」

「そんな事、わからねえだろ」

秀人はため息をつくつと、席を立つ。

「まあ、駅までだし、一緒に帰るか」

秀人が教室を出ると、夢は慌てた様子でついてきた。

「及川？」

「ん？」

「昨日は買い物に付き合ってくれて、ありがとう」

「だから、大した事してねえっての」

「お前に選んでもらった服、気に入ってるからな」

「昨日は単に小物をプラスしただけで、服は1着も買ってねえだろ」
秀人は少しだけバカにするように笑う。

「……また今度、2人で買い物行かないか？」

「え？」

「別に……恋人じゃなくても、2人で買い物に行ったりはするだろ？」

「そういうもんか？」

「そういうものだ」

夢の言葉が強引に聞こえ、秀人は苦笑する。

「和孝から言わせると、男女、2人きりでいるってだけで、恋人だつて噂になるらしいけどな。俺と春奈が良い例だろ？」

「……そういえば、立石の事は名前で呼んでるんだな」

「別にお互い名前で呼ぶって話になって、それに慣れちゃったただけだよ。そもそも、お前は名前で呼ばれるの嫌なんだろ？」

「まあ、そうだが……」

「とにかく、名前で呼んでる事に深い理由はねえよ」

秀人は春奈が学校を休んでいる理由を何となく考える。

「立石、今日も休んでいたな」

「そうみたいだな」

「……立石の事、及川は何とも思っていないのか？」

「何だよそれ？実は俺も好きだったなんて言っただけなのかい？」

秀人は少しだけ笑う。

「いや、そんな事言われたら、悲しくなる」

「……俺がひどい事したつてのは事実なんだし、謝る必要はあると思ってるよ」

「そうか。うん、及川の言う通りだ」

夢は何を納得したのか、笑顔を見せる。

「及川？」

「何だよ？」

「今の私達、恋人みたいじゃないか？」

夢は少しだけ頬を赤らめている。

「あの子……さっき、2人きりでいたら恋人に思われる事があるって言ったのは俺の方だからな」

「そういえば、そうだったな。でも、及川だって悪い気はしないんじゃないか？」

「お前、俺に何を言わせたいんだよ？」

「……私の事を恋人として見れると言って欲しい」

夢は悪戯するような笑みを浮かべる。

「今のはドキツとしたんじゃないか？」

「あの子……」

「時々、こういった事を言わないと、及川は私の事を恋人候補として考えてくれないからな」

「そんな事言わなくても、ちゃんと考えてるよ」

「そうか。それなら良い」

夢は嬉しそうな表情を浮かべる。

「今日は一緒に帰ってくれて、ありがとう」

駅に着くと、夢は足早に反対側のホームに行ってしまった。

秀人はそんな夢の後姿を目で追った後、ため息をついた。

6月15日(火)

この日も三枝谷駅に春奈の姿はなかった。

秀人は昨日と同じように二和木駅で夢に会つと、一緒に登校した。

教室に入り、席に着くと、村雨が出席を取るまで秀人は机に顔を伏せていた。

「及川秀人」

「はい」

「お前、最近は遅刻しないで感心だな」

「早く次を呼べよ。和孝来ちゃうだろ」

「いや、もう来てますから!」

「え、いつからいたんだよ?」

秀人は顔を上げ、和孝の方へ顔を向ける。

「あなた、意地でも俺を遅刻にしたいんですかね?」

和孝が遅刻になるよう、いつも村雨を急かしていた事がばれ、秀人は苦笑する。

「秀人、今日も夢ちゃんと一緒に学校来たんだね」

「ああ、まあな。噂になつてるのか?」

「いや、2人が一緒にいても友達同士だろうって見解が強いみたいだから、そこまで噂にはなつてないよ」

「まあ、そうだろうな」

「あ、でも、俺は秀人と夢ちゃん、お似合いだと思つてるからね
和孝は笑顔を見せる。

「そうか?」

「2人、性格的にも似てるし、良いと思うんだよね」

「俺は実感わかねえんだけどな」

「少しずつでも意識していれば、そのうち好きになつちやうんじゃないかな?」

「というか、お前、遠野の事、好きだつたんじゃねえのか?」

「だから、それは誤解だから……」
和孝は少しだけ不機嫌な様子を見せた。

午前中の授業が終わると、和孝はすぐに席を立つ。

「和孝……」

「ごめん、今日は用事あるから！」

和孝は秀人の制止を振り切り切るように教室を出て行った。

「及川？」

「また、和孝に頼んだのか？」

「いや、久保から提案してきたんだ。昼、私と及川を2人にしよう
って……」

「お節介な奴だな……」

秀人の様子を見て、夢は不安げな表情を見せる。

「無理にとは言わない。ただ、もし良かったら……」

「また屋上で良いんだろ？」

「……ああ、それで良い」

夢は嬉しそうに笑顔を見せる。

2人は屋上に行くと、昨日と同じように適当な場所に座って、昼食
を開始した。

「今日、私も少しだけおかずを作ってみたんだ」

夢は照れくさそうな表情だ。

「まあ、唐揚げだけだが……食べてみてくれ」

「じゃあ、頂きます」

秀人は唐揚げを口に運び、そこで固まった。

「どうだ？」

「……これ、味見したか？」

「いや、してないが……」

夢も慌てて唐揚げを口に運ぶ。

そして、固まってしまった。

「……他のは惣菜や冷凍食品だ。安心してくれ」

「あのな……」

夢は悲しそうな表情を浮かべる。

そんな夢を見て、秀人は少しだけ考えた後、唐揚げを全部食べた。

「おい？」

「せつかく作ったんだから、もったいねえだろ」

「……ありがとう」

「今度は味見とかしろよな」

「ああ、そうする」

夢は少しだけ落ち込んだ様子を見せる。

「こつやつて、2人で飯を食うのつて、恋人らしいか？」

「え？」

秀人の言葉に夢は顔を赤くする。

「ああ、私は恋人らしいと思うぞ」

「そつか……」

秀人はこの時、春奈の事を思い返していた。

少しの間だったが、秀人と春奈がここで過ごした時間は、今と同じように恋人らしい時間だった。

そんな事を、今になって秀人は感じていた。

「及川、どうした？」

「あ、何でもねえよ」

秀人は頭を切り替えると、夢に笑顔を見せた。

午後の授業が終わり、和孝は秀人に笑顔を向ける。

「秀人、今日は家に寄ってく？」

「いや、今日は帰るよ」

「え、何で？」

「何か、気分が乗らねえんだよ」

その時、夢が笑顔で近づいてきた。

「及川、良かったら、この後……2人でどこか行かないか？」

「悪い、今、和孝にも言っただけけど、今日は気分が乗らねえんだ

よ

「秀人、せっかくだから行ってくれば？」

「いや、及川がそう言うなら、無理には言わない」

夢は諦めるようにため息をつく、1人で教室を出て行った。

「秀人、夢ちゃんの事、もっと大切にしなよ」

「昼、一緒に食べたりのだろ」

「まあ、そうだけどさ」

そこで、秀人は真剣な表情になる。

「そういえば、遠野には春奈との事を言うなって言った理由、これだったのか？」

「まあ、そんなところだよ」

和孝は少しだけ気を使うような態度を見せる。

「……春奈ちゃん、今日も学校、来てないみたいだね」

和孝はため息をつく。

「罰ゲームを決めたのは俺だし、春奈ちゃんには俺から謝るよ。だから、秀人はあまり気にしないようにしなうて。もしかしたら、これで春奈ちゃんが俺の事を好きになってくれるかもしれないし！」

「それは絶対ねえな」

「あの……人の希望をあつさり粉砕しないでくれませんか？」

秀人の浮かぬ表情を見て、和孝は軽く笑う。

「秀人、春奈ちゃんの事、気にしてるんでしょ？だから、夢ちゃんとの仲を深めて良いのか迷ってるってとこかな？」

「そういうもんなのかな……」

和孝の言葉に秀人は納得出来なかった。

「今は夢ちゃんの事、考えてあげなうて。2人共、仲良いんだし、何度も言うけど、お似合いだと思うよ？」

「そうは言っても、俺は遠野と恋愛関係になるってのが、想像出来ねえんだよな」

「そもそも、恋愛関係になるって想像出来る人なんているの？」

「いや、いねえけど……」

「まあ、少しずつで良いから考えてあげなよ」

「ああ、考えるよ」

和孝の言葉に、秀人は相変わらず納得出来なかった。

「とりあえず、今日はこのまま帰るからな」

「あ、俺も途中まで一緒に帰るよ」

2人は帰り支度を終わると、教室を出て行った。

秀人は電車の中で、小説を読む事もなく、何となく、窓の外の景色を眺めていた。

その時、次の停車駅が三枝谷駅だと知らせる、アナウンスが聞こえた。

少しした後、電車が三枝谷駅に停まった。

それから数秒後、電車は扉が閉まり、再び走り出す。

しかし、秀人は電車から降り、ホームに立っていた。

秀人は三枝谷駅を出ると、辺りを見回す。

春奈の家を知らないどころか、この駅で降りるのも初めてだ。

それでも秀人は自分の勘を信じ、走り出した。

誰かの家の前を通る度、表札を確認しながら、秀人は住宅街を進んで行く。

しかし、立石という名字は見つからなかった。

また、もし見つけたとしても、同姓なだけで、春奈の家である保障はない。

そんな状況から、次第に秀人は冷静さを取り戻すと、自分のしている事をバカらしく感じた。

「何やってんだか……」

秀人は帰ろうとしたが、その前にもう1度だけ辺りを見回す。

「……ここって」

そこは、どこか見覚えのある場所だった。

秀人は再び走り出し、近くにあったアパートの前で足を止める。

郵便受けに書かれた名前はどれも見覚えがなかったが、秀人は、こ

のアパートに見覚えがあった。

「何だっけな……？」

秀人は過去を思い返したが、幼い頃の事を思い出そうとする時のように、何も思い出せなかった。

その時、猫の鳴き声が聞こえ、秀人は下に目をやる。

そこには1匹の黒猫がいた。

猫は秀人の足に体を摺り寄せている。

秀人はその場にしゃがむと、猫の背中を撫でた。

猫は少しだけ離れた後、秀人の方を向き、また鳴いた。

「帰るか……」

秀人は猫を気にする事なく、駅へ向かおうとしたが、そんな秀人の前に猫が回り込んで来た。

「俺、餌ねえからな」

無視しても、猫は必死に鳴き続けている。

秀人は少しだけ考えた後、駅とは逆の方向に歩き出す。すると、猫は秀人の前へ行き、ゆっくり歩いて行った。

様子を見て、秀人は引き返そうとしたが、そうすると、また猫がしつこく鳴き始めた。

「ついて来いって事かよ……？」

秀人は面倒な事に巻き込まれたと思いながら、猫について行く。

猫はしばらく歩いた後、公園に入って行った。

そして、ベンチに座っている人物に近付くと、鳴いた。

「クロ、どこに行つてたんですか？」

秀人はベンチに座る人物を見て、驚いてしまった。

「春奈？」

「え……秀人君？」

秀人の声に春奈は驚いた様子で顔を上げた。

秀人と春奈は、少しの間、お互いに何も言えないでいた。

「……風邪って聞いたけど、大丈夫なのか？」

「もう熱は下がりました。でも、大事を取って、今日も休みにしたんです」

「まあ、文化祭も近いからな」

秀人は何を言おうか決めると、大きく息を吸う。

「あのさ……」

「私も嘘でしたから」

「え？」

春奈に遮られ、秀人は言葉を詰まらせる。

「秀人君が嘘をついていると知っていました。なので、私も秀人君に嘘をついて困らせようと思ったんです」

「どういう意味だよ？」

「……私は秀人君の事、好きではないという事です」

「はあ？」

秀人は思わず、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「お前、そんな嘘、信じると思ってるのか？」

「……信じるとかどうかは秀人君の自由です」

「あのな……」

秀人は文句の1つでも言おうと考えたが、春奈の事を考え、やめた。

「嘘ついて悪かった」

「私は……」

「黙って聞け。俺の事、庇ってるつもりなのかもしれねえけど、悪い事をしたのは確かなんだ。だから、謝る」

秀人は頭を深く下げる。

「……ごめんなさい」

「……本当に楽しかったんです。けれど、全部、嘘なんですよね」
春奈は顔を下に向ける。

そのまま、2人はしばらく下を向いたままだいた。

そうすると、視界に2人の間をうろつく猫の姿が映った。

「お前の猫か？」

「……はい、クロと言います」

「よく懐いてるな」

「秀人君も懐かれてますよ」

「そうだな……」

秀人は軽く笑った後、顔を上げる。

「隣、座つても良いか？」

「……はい」

春奈の返事を聞き、秀人は隣に座る。

「飼い始めてから長いのか？」

「はい、10年近くになります」

春奈が手を伸ばすと、クロは春奈の膝に乗った。

「飼つてると言っても、クロはよく出掛けてしまって、家にはほとんどいないんですけどね。でも、私が辛い時には、いつもクロが側にいてくれるんです。私、いつも1人ですから……」

「そっか」

「そういえば、秀人君、どうしてここに？」

「何か知らねえけど、こいつに連れて来られたんだよ」

「え？」

「信じるかどうかは春奈の自由です」

秀人が春奈の言葉を真似ると、春奈は笑う。

「……お前の家なんて知らねえのに、三枝谷駅で降りて、お前の事を捜してたら、クロに懐かれて、ついて行ったら、ここにお前がいた」

「え？」

秀人は春奈の方を向くと、真っ直ぐ目を見た。

「春奈、もし良かったら、俺と友達になつてくれねえか？」

「え!？」

秀人の言葉に春奈は驚いた様子を見せる。

「俺……お前と一緒に楽しかったんだ。嘘の告白した事も……許して欲しいんだ」

春奈は少しだけ考えた後、笑顔を見せる。

「はい、私で良ければ、友達になって下さい」

「良いのか？ひどい事したのに……」

「それはもう言わないで下さい。それに、嬉しいです」

春奈は恥ずかしそうに下を向く。

「秀人君との楽しかった時間が、全て嘘になってしまったと思いませんでした。でも、秀人君も楽しいと思っていてくれたと知りまして……」

「じゃあ、改めてよろしくな」

秀人が手を差し出すと、春奈も握り、2人は握手をした。

その時、ク口は1回だけ鳴くと、春奈の膝から降り、どこかへ行ってしまった。

そんなク口の様子を目で追った後、2人は笑った。

公園を後にし、秀人は春奈を家まで送る事にした。

「一応、学校休んでるんだから、あまり外に出るなよ」

「はい、今日は早い時間に寝るようにします」

「あと、小説、読み終わってたんだ。面白かったよ」

「あ、私も読み終わりました。怖かったんですけど、面白かったです」

「お前、それ読んでたから、風邪引いたんじゃないか？」

秀人は呆れたように笑う。

「春奈が貸してくれた小説の作者、他にも本出してるだろ？」

「はい、他の本も持ってますよ」

「だったら、今度はそれ貸してくれねえか？俺の方はミステリー小説貸すよ」

「わかりました。じゃあ、明日持って行きますね」

明るく話をする春奈を見て、秀人は安心したように息をつく。

「お前、人見知りって言うてたけど、演技する時は普通に知らねえ奴とかが相手でも話すんだよな？」

「それは……そうしないといけませんから」

「だったら、普段もクラスメイトとかに話しかけてみるよ。似たよ

うなもんだろ？」

「全然、違います。舞台に立っている時は役になりきっていますし、台詞もありますから……」

「それなら……」

秀人は頭を働かせる。

「今から、俺が言う台詞、いつでも言えるように練習しろ」

「え？」

「良いか？」

「どんな台詞ですか？」

秀人は笑顔を見せた後、軽く深呼吸をする。

「私は3年A組の立石春奈です。もし良かったら、友達になつてくれませんか？」

「え!？」

「ほら、言ってみろ」

春奈は少しだけ恥ずかしそうに顔を赤くした後、秀人と同じように軽く深呼吸をする。

「わ……私は3年A組の立石春奈です。もし良かったら……友達になつてくれませんか？」

「仲良くなりたい奴がいたら、その台詞言えよ。お前の場合、きつかけさえ作れば、後は何とかなるはずだからな」

「……無視されてしまったり、断られたら落ち込みます」

「ネガティブに考えるなって言ってるだろ？そう言われて断る奴なんてろくな奴じゃねえから、そもそも友達になる必要ねえよ」

「そうでしょうか？」

「とにかく、いつでも言えるように練習しとけよ」

「……わかりました。あ、私の家、ここです」

「ああ、そっか」

「駅までの道、わかりますか？」

「この辺り、何か見覚えあるし、大丈夫だよ」

秀人は周りの景色を確認する。

「じゃあ、明日は学校来いよ」

「はい、わかりました」

「じゃあ、また明日な」

「はい」

秀人は春奈に背を向け、歩き出す。

「あ、秀人君？」

春奈に呼び止められ、秀人は振り返る。

「どうした？」

「私……やっぱり、何でもないです」

「気になるじゃねえかよ」

「ごめんなさい、気にしないで下さい」

秀人は少しだけ考えた後、ため息をつく。

「俺なんかよりも良い奴なんて、すぐ見つかるよ」

「え？」

春奈は驚いた様子を見せた後、軽く笑う。

「秀人君に好きな人が出来たら、私は応援しますよ」

「お前、変なところで人に気を使うなよ」

「秀人君だって、私に気を使ってくれます」

2人は少しだけ黙った後、同時に笑った。

「またな」

「はい、また」

秀人は軽く手を振った後、その場を後にした。

6月16日(水)

電車が三枝谷駅に近付き、秀人は電車の中から駅のホームを見ていた。

「……………いねえな」

ホームに春奈の姿がなく、秀人は首を傾げる。

先に行ったのだろうとも考えたが、秀人は結局、電車を降りて、春奈を待つ事にした。

そのまま、次の電車も見送り、結局次に来る電車は遅刻を多くしていた時に乗っていた電車になる。

「俺、何やってんだか……………」

その時、春奈がホームに入ってきた。

「春奈！」

秀人が呼ぶと、春奈は肩で息をしながら、近付いてきた。

「おはよう……………大丈夫か？」

「おはようございます」

「今日は遅いんだな」

「はい、寝坊してしまいました……………」

「まあ、休みボケみたいなものか」

「秀人君、どうしたんですか？何でここにいるんですか？」

「ああ、えっと……………」

待っていたと言うのもバカらしいため、秀人は言い訳を考える。

「……………幽霊がいたんだ」

「え？」

「うちの高校の制服を来た女子生徒の幽霊だ。入学前、事故に遭って……………」

「秀人君、それ……………嘘ですよね？」

「お前、幽霊とか信じねえのか？」

「いえ、信じていますよ。時々、クロが誰もいない方向に向かって鳴

いている様子を見て、何かいるのかと怖くなる時がありますから…

…」

「だったら……」

「でも、秀人君が今言った事は信じられません」

「友達だろ？信じるよ」

「それとこれは別問題です」

「まあ、現に嘘だしな」

秀人はそこで春奈の方を見る。

「お前の事、待ってたんだよ」

「え！？」

「俺、お前の笑顔を見ると、今日1日頑張れるって……」

春奈の顔が真っ赤だったため、秀人はそこで止める。

「お前、こういうのは信じるんだな」

「え、それも嘘ですか！？」

「信じる信じないは……」

「もう真似しないで下さい！」

春奈の慌てた様子を見て、秀人は笑う。

「そうだ、小説ありがとな。あと、これはミステリー小説だから…

…」

「あ、私も持つて来ました」

2人はまた小説を交換する。

その時、電車が来たため、2人は乗った。

「今日も走りますか？」

「いや、今日は遅刻していく」

「ごめんなさい、私が遅れてしまって……」

「お前、ホントに俺が待ってたと思ってるのか？」

「はい……だって、秀人君は優しいですから」

春奈の言葉に、秀人は恥ずかしくなってしまった。

「何言ってるんだよ……。というか、お前、弁当多くねえか？」

「あ、その……癖で多く作ってしまったんですけど、秀人君、今日

は友達と食べますよね?」

「ああ、まあ、和孝と……あと、最近は遠野とも一緒に食ってるよ」

「私、今日は1人で食べますよ」

「その量を1人で食うのか?」

「残しても、帰ってから食べますから」

春奈が意地を張っているように見え、秀人はまた笑った。

午前中の授業を終えると、秀人は席を立とうとした和孝を捕まえる。

「和孝君、一緒にお昼食べましょうよ」

「妙な敬語使わないでよ」

「及川?」

いつも通り、秀人は夢から昼食に誘われた。

「今日、和孝も一緒に良いか?」

「ああ、構わない」

「いや、俺はやっぱ1人で食べるよ……」

「何言ってるんだよ。親友だろ?」

「こんな時だけ、そう言うのずるくない?」

秀人は和孝と夢と一緒に屋上に行こうとしたが、足を止めると少しだけ考え込む。

「悪い、先に行つてくれ」

「秀人、逃げる気!?!」

「違うよ。すぐ行くから、先に屋上行つてる」

秀人は2人を先に行かせ、3年A組の教室に入る。

「おい、春奈」

「え!?!」

周りの生徒が注目してきたが、秀人は無視した。

「まだ弁当食つてねえようだな」

「これから食べようと思っていました」

「それ、1人じゃ食い切れねえだろ?」

秀人は春奈の弁当を手取る。

「ちょっと来い」

「え、待って下さい！」

秀人について行く形で、春奈は教室を出る。

そのまま、秀人は春奈を連れて屋上に行った。

和孝と夢は秀人を待っていたため、まだ昼食を開始していないようだ。

「秀人、何やってたの？」

「友達を連れて来たんだよ」

秀人は春奈を前に出す。

「秀人君？」

「ほら、昨日言った台詞」

「え？」

「2人共、俺の友達だし、練習だと思えよ」

和孝と夢は突然やって来た春奈を驚いた様子で見ている。

「えっと……」

春奈は目を閉じると、深呼吸をする。

「私は3年A組の立石春奈です。もし良かったら、友達になってくれませんか？」

それから、しばらくの間、沈黙が走る。

「……無視されました」

「いや、考えてるだけだって！」

秀人は慌てて、フォローする。

「秀人、どういう事？」

「今、春奈が言った通りだよ」

「え？」

「お前らが思ってる春奈の印象、実際と全然違うんだよ。一緒にいれば、本当の春奈ってのがお前らもわかると思うし……」

秀人は言葉に詰まると、首を傾げる。

「というか、俺、何やってんだか……ああ、とにかく春奈が友達になっただけって言ったんだから、返事してやれよ」

和孝と夢は少しだけ考えた後、顔を見合わせて笑った。

「これが秀人なりの仲直りなのかな？」

「別に、俺は関係ねえよ。で、どうなんだよ？」

「……俺、3年C組の久保和孝。俺と友達になって下さい」

「同じく、3年C組の遠野だ」

「名前は夢ちゃんって言ってる……」

「遠野、名前で呼ばれるの嫌いなんだ。名前を呼ぶと、ああなるから気を付ける」

秀人は倒れている和孝を指差す。

「女相手に殴ったりしない。でも……名前、嫌いなんだ」

夢は春奈の目を見る。

「クラスが一緒の時になるべきだったと思うが……私も友達になるう」

「良いんでしょうか？」

「というか、秀人の友達は俺の友達って感じだし」

「それ、お前の勘違いだからな」

「ここは合わせる所じゃないですかね!？」

秀人と和孝のやり取りを見て、春奈は笑う。

「これで、友達が2人出来ただろ？」

「はい、嬉しいです」

春奈の笑顔を見て、秀人も笑った。

「あ、そうだ。こいつ弁当多く作って来たらしい。1人じゃ食い切れねえみたいだし、みんなで食わねえか？」

「え？」

「春奈もそれで良いだろ？」

「はい、私は良いですけど、皆さんは……」

「私は賛成だ」

「俺も賛成だからね」

「てことで、決まりだな」

秀人は近くに座る。

「ほら、座れよ」

「はい！」

春奈達も座ると、順番に弁当を並べた。

「それじゃあ、頂きます」

和孝は春奈の弁当からおかずを取り、口に運ぶ。

「美味しい！」

「本当ですか？」

「立石、私も、もらって良いか？」

「はい、もちろんです。遠野さんのお弁当も頂きますね」

夢も春奈の弁当を食べ、驚いた様子を見せる。

「羨ましいな。私は料理が苦手なんだ」

「そんな事ないと思いますけど？」

「この弁当は惣菜や冷凍食品ばかりだ。立石は全て手作りだろ？」

「でも、遠野さんのお弁当、見栄えがとても良いです。私も参考にさせてもらいます」

和孝や夢と普通に話をしている春奈を見ながら、秀人は笑顔でいた。

「あ、春奈ちゃん？」

「はい？」

「その……秀人の件、俺が原因なんだよね。罰ゲーム決めたのも俺だし……」

「もう良いですよ。それに、そのおかげでこうして友達が出来ました」

春奈は嬉しそうに笑顔を見せる。

「でも、これで俺の流した噂通りになったね」

「え？」

「秀人と春奈ちゃん、仲は良いけど、付き合ってるわけじゃないって噂」

和孝が着々とその噂を広めた結果、今では秀人と春奈が付き合っていると噂している者は少なくなっている。

「及川と立石が仲直りしてくれて、私も良かったと思ってる」

「でも、秀人も、らしくない事するんだね」

「何がだよ？」

「こんな人助けみたいな事してさ」

「そんな事ないですよ。秀人君、優しいですから、困った人がいれば助けてくれます」

「え？」

春奈の言葉に和孝と夢は意外といった表情を見せる。

「これが普通の反応だからな」

「どういう事でしょうか？」

「俺が優しいなんて思ってるの、お前ぐらいだって事だよ」

「え……？」

春奈は少しだけ悲しそうな表情を浮かべる。

「秀人君も周りから誤解されているんですね」

「おいおい、お前と一緒にするなよ。俺の場合はお前だけが誤解してるんだからな？」

「私、誤解なんてしてません。秀人君、優しいです」

「だから！」

「はいはい、ストップストップ！」

和孝は両手を上げる。

「この際、どっちでも良いじゃない」

「良くねえよ。こいつ、俺の事、誤解したままじゃねえか」

「誤解なんてしてません！」

秀人と春奈は一向に言い争いをやめない。

「夢ちゃん、どうする？」

「名前で呼ぶな」

夢は和孝を殴った後、不機嫌な表情で弁当を食べた。

6月17日(木)

この日は秀人も春奈も遅刻する事なく、三枝谷駅で合流した。

「秀人君、おはようございます」

「ああ、おはよう」

春奈は大きな欠伸をする。

「お前、また寝不足じゃねえだろうな？」

「あ……その、秀人君から借りた小説、ずっと読んでました」

「少しずつ読めば良いだろ」

「犯人が誰なのか気になってしましまして、一応、半分は読んだんですけど……」

「俺が教えてやるよ」

「やめて下さい！」

「冗談だよ。犯人捜し、程々に頑張れよ」

2人が電車を降りると、夢が改札で待っていた。

「及川、立石、おはよう」

「遠野さん、おはようございます」

「お前、わざわざ待ってたのか？」

「秀人君、待っててもらったのに、その言い方はひどいと思います」

「ああ、悪い。遠野、おはよう。一緒に行くか」

3人は並んで、学校に向かう。

「及川、良い身分だな」

「何がだよ？」

「こういうの、両手に花と言っじゃないか」

「だったら、俺は1人で行くよ」

秀人が歩くペースを上げると、春奈は腕をつかんで止める。

「待って下さい！秀人君、もてるんですから、これが普通なんです」

「もてねえって」

「もてますよ。秀人君、優しいですから」

「お前、ホント変なところで頑固だな。俺を美化し過ぎだつて」

「そんな事ないです。秀人君は……」

「なあ、及川？」

夢が真剣な表情だったため、秀人と春奈は話をやめる。

「私は……及川の事、好きだ」

「何で今、そんな事言うんだよ？」

「何か、言いたくなつたんだ」

「ほら、秀人君、もてるじゃないですか」

「何、勝ち誇つた顔してるんだよ？」

また、言い争いのような話を始めた秀人と春奈を見て、夢は寂しそ
うに、ため息をついた。

昼食時、昨日と同じように4人は屋上に集まった。

「春奈も遠野もいつも悪いな。俺と和孝、何も持つて来てねえのに

……」

「別に気にするな。好きで作つて来てるんだ」

「私の事も心配しないで下さい」

「じゃあ、今日も頂きます！」

「お前は少しわきまえろ」

和孝は夢に殴られ、倒れる。

「夢ちゃん、何か不機嫌じゃ……」

もう1発殴られ、和孝はまた倒れた。

「あ、そうだ。明後日休みだろ？」

「秀人君、土曜は補習があります。今度の休みは部活がないので、
久しぶりに1日受けられます」

「ああ、だったら、日曜で良い。4人でどっか行かねえか？」

秀人がそんな提案をするのは初めての事だ。

「みんな、予定空いてるか？」

「はい、空いてますけど……」

「俺も大丈夫」

「私も大丈夫だ」

「じゃあ、決まりだな」

「でも、どこに行くの？」

「ああ……誰か行きたい所あるか？」

4人はそれぞれ考え込む。

「あの……？」

「ん？」

「皆さんで川に行きませんか？」

春奈は断られないかと心配しているのか、不安げな表情だ。

「時々、家族で行くんです。近くなんですけど、とても景色がキレイなんです」

「和孝と遠野は何か希望あるか？」

「いや、そこで良いんじゃないかな。普段は行かない所って楽しそうだし」

「私も構わないぞ」

「本当に良いんでしょうか？」

「みんな良いって言うてるんだ。そこにしよう。どうやって行けば良い？」

「あ、えつとですね……」

春奈を中心に4人は日曜の計画を立てた。

「秀人、家寄ってく？」

「ああ、そうしようかな……」

学校が終わり、秀人と和孝は放課後の予定を考えていた。

その時、夢が複雑な表情で近づいてきた。

「及川、ちよっと良いか？」

「ん？」

「その……ゆっくり話したいんだ。この後、喫茶店にでも行かないか？」

「は？」

少しだけ顔の赤い夢を見て、秀人はどうしようか考えた。

「秀人、行つてきなよ」

「お前、他人事みたいに言うなよ」

「無理にとは言わないが……私の事をもっと知ってもらいたいんだ」
夢の真剣な表情に秀人はため息をつく。

「わかった。行けば良いんだろ？」

秀人の返事に夢だけでなく、和孝も笑顔を見せた。

「じゃあ、俺は1人で帰るからね」

和孝は気を使ったのか、足早に行ってしまった。

「俺達も行くか？」

「ああ、そうしよう」

秀人と夢は学校を後にし、駅の近くにある喫茶店に入ると、コーヒを注文した。

「文化祭でやる喫茶店も、こんな風に教室を装飾すると良いかもしれない」

「それを見に来たのか？」

「いや、違う。今日は及川と話をするのが目的だ」

夢は顔を赤くし、少しだけ笑う。

「正直言うと、照れくさい。でも、お互いの事を理解し合うために、こうして話がしたいと思つたんだ」

「話つて、何の話だよ？」

「そうだな……何の話が良いだろうか」

夢が考えている間に、コーヒーが来たため、2人は軽く飲んだ。

「及川は今まで、誰かと付き合つた事はあるか？」

「春奈との付き合い以外ねえけど……遠野はあるのか？」

「いや、私もないんだ。だから、こうして2人していると、どうすれば良いかわからなくなってしまう……」

「だったら、そもそも誘わなければ良かっただろ？」

「いや、それでも一緒にいたいと思つてるんだ。お互いの事をもっと理解したいとも思つてる」

夢は困ったように、ため息をつく。

「こんな事して、及川にしてみれば迷惑だな……」

「別にそうは思ってたねえよ」

「でも、私なんかと一緒に、つまらないだろ？」

「お前は俺と一緒につまらねえのか？」

「いや、そんな事はないが……」

夢の様子を見て、秀人は軽く笑う。

「今日、こうやって呼んだのは、何か話したい事があったんだろ？」

「だったら、それを話せば良いじゃねえかよ」

「……ああ、そうだな」

夢は少しだけ考え込んだ後、口を開く。

「……及川の好きなタイプを聞きたいんだ」

「は？」

「髪型や服装等、何でも良い」

「俺がそれを言ったところで、どうするんだよ？」

「その……お前の好みに自分を近づけたいんだ」

また顔を赤くしている夢を見て、秀人は困ったようにため息をつく。

「お前はお前で良いんじゃないか？俺のために自分を偽る必要なんてねえだろ」

「好きな人のためなら、自分を変えたいと思うのは当たり前的事だ」

「お前、何をそんなに焦ってるんだよ？」

秀人の質問に夢は少しの間、言葉を失う。

「お前が遠くへ行ってしまっような気がしたんだ」

「俺、転校する予定ねえし、卒業までは一緒だろ」

「そういう意味じゃないんだ」

夢は何かを言おうとしたが、結局、それ以上何も言わなかった。

そして、2人はコーヒーを飲み終わると、喫茶店を後にし、すぐ解

散した。

6月18日(金)

「遠野いねえな……」

秀人と春奈は昨日と同じ時間に電車を降りたが、夢の姿はなかった。

「先に行っちまったのかもな」

「もしかしたら、遅れて来るのかもしれない」

「じゃあ、ギリギリまで待つか」

2人はしばらくの間、そこで待っていたが、1本後の電車にも夢が乗っていないかったため、行く事にした。

「お前、クラスで友達出来たか？」

「いえ……」

「誰かに声かけてみたか？」

「1人だと不安になってしまいました……」

「じゃあ、同じ部活の奴に声かけてみるよ。後輩が相手だって良いだろ？」

「はい、頑張ってみます」

2人は学校に入り、3年A組の教室の前で別れた。

秀人は教室に入り、既に夢が来ている事に気付く。

「遠野、先に来てたのか？」

「ああ、おはよう」

「お前が遅れてるのかもしれないって春奈が言うから、2人で待ちまったじゃねえかよ」

「悪かったな」

どこか夢に元気がなかったため、秀人はそれ以上言わない事にする。

「あ、及川？」

「ん？」

振り返ると、1人の男子生徒が立っていた。

「明日の午前中、バスケの練習やるんだけど、来れるか？」

「……よし、これで補習行かねえで済むな」

「え？」

「大丈夫だ。明日の何時からだ？」

秀人は笑顔で土曜日の予定を確認した。

昼食はいつも通り、4人一緒に屋上で食べる事にした。

「遠野さん、遅刻しませんでしたか？」

「遠野、今日は先に行ったらしい」

「それなら良かったです」

春奈は嬉しそうに笑うだけで、怒っている様子は全くない。

「あ、春奈、明日はバスケの練習に誘われたから、補習行けねえんだ」

「そうなんですか……」

「及川、ただの練習なんだ。補習を優先するべきじゃないか？」

「最近、行ってねえんだし、たまには行かせるよ。まあ、学校のグランドでやるから、会うかもな」

「だったら、昼は一緒に食べましょうよ」

「俺は構わねえけど、土曜の朝ぐらいはゆっくりした方が良くないんじやねえか？」

「そんな事ないですよ」

「じゃあ、明日の昼も、4人で食うか」

秀人の提案に他の3人も同意する。

「でも、この4人で食べるのも、段々慣れてきたね」

和孝は悪戯するような笑みを浮かべる。

「ここらで恋愛話でもしようかね」

「1人でしてくれ」

「いや、1人じゃ無理でしょ……」

和孝は一息入れてから口を開く。

「初恋ってみんないつだった？」

「え？」

「まずは夢ちゃん!」

「私は……高校に入ってからだ」
「久保さん、大丈夫でしょうか？」
夢に殴られた和孝を春奈は心配そうに見ている。
「大丈夫……。高校で初恋って遅いんだね」
「中学時代は空手部に入っていたせいで忙しかったんだ。高校では少し女らしくなると空手はやめたが……」
「夢ちゃん、今も女らしくな……」
「うるさい！」
夢は顔を真っ赤にしている。
「遠野、前も言ったけど女らしくとか、気にするなよ」
「しかし……」
「かつこいい女でも良いんじゃないか？春奈からしてみれば、そういうの憧れだろ？」
「はい、尊敬します」
「私は立石みたいになりたいんだが……」
「自分にねえものに憧れるのはわかるけど、お前はお前らしく、これからも和孝を殴ってるよ」
「あなた今、随分な事言いませんでした？」
「まあ、及川がそう言うなら、納得しよう」
「いや、俺を殴るって部分は納得しないで下さい！」
夢は少しだけ機嫌を良くしたのか、笑顔を見せる。
「じゃあ、春奈ちゃんは初恋、いつ？」
「あ、私は……小学生の時です」
「随分前だね。相手は誰？」
「……学区の関係で、学校は違いましたが、よく一緒に遊んでいた、近所の男の子です」
春奈は顔を赤くしながら、何回か秀人に視線を送る。
「今は好きじゃねえのか？」
「え……その、引越してしまったのか、会えなくなっちゃいましたので……」

「でも、好きな人いたんだな……」

秀人はなぜか納得がいかず、苛立ちを感じた。

「及川？」

「ん？」

「いや、何でもない……」

「何だよ？」

夢は何か言いたそうだったが、結局言わなかった。

「秀人はどうなの？」

「俺より、和孝はどうなんだよ？」

「俺は幼稚園かな」

「早過ぎねえか？」

「俺、昔から女子の人気、集めてたからね」

「『昔から』じゃなくて『昔は』の間違いだろ」

「それ、どういう意味ですかね!？」

和孝の反応に秀人と夢は笑う。

「お前、今は全然じゃねえか」

「色んな女にちよっかい出して、今じゃ相手にされてないじゃないか」

「2人共、少しは気を使ってくれませんか？」

和孝はため息をついた後、笑顔で春奈を見る。

「でも、春奈ちゃんは違うよね!？俺、実は春奈ちゃんの事、前から好きだったんだよ!」

「他に好きな人がいるので、ごめんなさい」

「返事、早いですね……」

「あ、色々な方から告白されましたので、言い慣れてしまったんです……」

「お前にとつては台詞みたいなものなんだな」

「もう良いです……。諦めます」

和孝は目に涙を浮かべる。

「それで、秀人は初恋、いつなの？」

「人を好きになつた事ねえって、この前言っただろ」

「でも、小さい時とか、女の子と一緒に遊んだりしなかった？その中に気になった子とか、1人ぐらいいるんじゃないの？」

「ああ……」

秀人は言葉を詰まらせる。

「……秀人君、まだ思い出せないんですか？」

秀人が表情を変えたため、春奈は不安げな様子だ。

「どういう事だ？」

「いや、俺……小さい時の事、思い出せねえんだ」

「記憶喪失みたいなもの？」

「大袈裟にするな。ただ忘れてるだけだよ」

秀人は心配をかけないよう、笑顔を作る。

「親に聞いてみたらどうだ？それにアルバム等があるだろ？」

「ああ、俺もそう思つて……親父とかに昔の事、聞いたら怒られたんだよな」

「え？」

「倉庫でアルバムを探しても怒られたんだ。何か隠してるみたいだったけど……」

そこで、秀人は周りを心配させている事に気付く。

「あ、別に大した事ねえからな。今、生活する上で不便な事ねえんだし、心配するな」

秀人は笑顔を見せた後、弁当に手を出す。

「ほら、早く食わねえと、昼終わっちゃうよ」

「はい、そうですね」

秀人に合わせ、他の3人も昼食を再開した。

午後の授業も終わり、秀人と和孝はすぐ帰り支度を始める。

「及川？」

「ん？」

「そろそろ文化祭だ。今日の帰り、当日着る服を見に行くんだが、

付き合ってくれないか？」

「じゃあ、俺は先帰るね」

「あ、おい！」

和孝は逃げるように教室を出て行った。

「2人で行くのか？」

「ああ、見るだけで、まだ買う予定はないから、2人で十分だ」

「俺、行く必要があるのか？」

「男子の服も見たいんだ」

「しょうがねえな……」

秀人はため息をつく。

「行ってくれるのか？」

「断っても良いなら断る」

「じゃあ、断るな」

「たく、わかったよ」

夢は嬉しそうに笑った後、カバンを取りに自分の席へ戻る。

「そつだ、遠野？」

「何だ？」

「今日の朝、何で駅にいなかったんだよ？」

「……私がいると邪魔かと思ったんだ」

「は？」

秀人は意味がわからず、首を傾げる。

「とにかく、春奈だって心配してただろ？勝手に先行ったりするなよな」

「わかった」

夢がまだ何かを隠している雰囲気だったが、秀人はそれ以上言わなかった。

秀人と夢は学校を後にし、近くにあるコスプレ専門店の前にいた。

「俺も入らねえといけねえのか？」

「私だって恥ずかしいんだ。とにかく入るぞ」

2人は戸惑いながら中に入ると、店内を見渡す。

「結構、色々あるんだな」

夢は秀人の表情を確認しながら、軽く深呼吸をする。

「……及川も、女子にこういう格好をさせるのが好きなのか？」

「お前、そんな事聞くなよ。というか、俺は面倒くさいのは反対だったんだからな。メイド喫茶やりたいって言ったのは和孝だろ」

「ああ、そうだったな」

夢は照れくさそうに顔を赤くする。

「及川、私に着てみて欲しい服はないのか？」

「は？」

「せっかく来たんだ。試着もして良いそうだし、何かリクエストがあれば聞くぞ？」

「お前、俺がそのバニーガールが良いとか言っても着るのか？」

「これが良いなら、着るぞ？」

「笑えねえ冗談はやめろよ」

「すいません、試着したいのだが……」

「何言ってるんだよ!？」

「冗談なんかじゃない」

夢は真剣な目を秀人に向ける。

「私は及川が好きだ。及川の好きな格好になつてみたいと思つのは当然だ」

「今日は文化祭で着るメイド服と執事服を見に来たんだろ？俺はこういう趣味ねえし、当初の目的忘れるなよ」

秀人は奥にあつたメイド服と執事服の値段を見る。

「結構高いんだな」

「ああ、これでは予算オーバーだ」

「何着必要なんだ？」

「接客は4人で行うから、2着ずつだな」

夢はどうしようか考え込む。

「お前、とりあえず着てみたらどうだ？」

「え？」

「試着しても良いんだろ？」

「私なんか着ても、きつと似合わないぞ」

「俺……さっきはああ言っただけど、実はこういう服好きなんだよな」

「本当か？ だったら、着ても良いが……」

「お前、単純だな」

秀人はからかうように笑う。

「まあ、せっかく来たんだから……。すみません、試着したいの
だが……」

夢は服を持って試着室に入る。

それから少し時間が経ち、夢が出て来た。

「どうだ？」

「……ああ、似合ってると思うけど？」

「本当か？」

夢は恥ずかしそうに顔を赤くする。

「お前、それなりに背あるし、それっぽく見えるよ」

「そうか」

夢は鏡の前に立ち、その場で何回か回った。

「お前、そういう服、興味あったんだな」

「え？」

「いや、嬉しそうだから……」

「私も女だ」

「ああ、そうだったな」

「そうだ」

夢は近くにあった執事服を手に取る。

「お前も着てみる」

「絶対に嫌だからな。それより、予算オーバーしてるけど、どうす
るんだ？」

「それが問題だな……」

2人は頭を悩ませる。

そして、秀人はある事を閃いた。

「持つてる奴から借りるって手があったな」

「こんな服、持つてる人なんているのか？」

「1つ当てがあるんだ。とりあえず、学校に戻るから着替えるよ」

「ああ、ちよつと待っていてくれ」

夢は慌てて試着室に入り、服を着替えた。

秀人と夢は学校に戻ると、演劇部の部室を訪れていた。

「メイド服と執事服ですか？」

「クラスの出し物で必要なんです。出来れば、2着ずつ借りたいんですけど……」

秀人達の頼みに神楽は少しだけ考える。

「立石さん、メイド服と執事服って、劇で使う事はないかしら？」

「はい、今年は使いませんので、貸せますよ」

「じゃあ、立石さんもそう言ってるし、貸せるわよ」

「ホントですか？ありがとうございます」

秀人と夢は礼儀正しく頭を下げる。

「それじゃあ、お願いします」

「秀人君、準備頑張ってくださいね」

「お前も練習頑張れよ。じゃあ、失礼します」

もう1度だけ頭を下げ、秀人と夢はその場を後にする。

「これで予算も浮くな」

「及川、ありがとう」

「礼は春奈とかに言えって。とりあえず、今日はもう帰って良いよな？」

「ああ、私も帰る」

2人はそのまま、駅まで話をしながら、一緒に帰る事にした。

しかし、すぐに話の話題がなくなり、2人はお互いに黙る事が多くなる。

そんな状況に夢は寂しそうに、ため息をつく。

「……及川？」

「何だよ？」

「その……立石とキスとかは、したのか？」

「は？」

秀人は思わず顔を赤くする。

「してねえよ。好きでもねえのに、そういった事するわけねえだろ」

「そうか……そうだな」

夢は足を止めると、秀人の腕をつかむ。

「どうしたんだよ？」

「及川、私と……そういった事をしたとは思わないか？」

「え？」

「キスしたり、それ以上の事も……」

顔の赤い夢を見て、秀人は夢が真剣なようだと感じた。

「俺は……」

「すまない。私は何を言っているんだろっな？」

夢は手を放し、わざとらしく笑う。

「今まで通り接して欲しいと言いながら、私がそう出来ていないな

んてダメだな」

「なあ、遠野？」

「すまない、今のは忘れてくれ」

夢は逃げるように足を速め、先に行ってしまった。

残された秀人は、しばらくの間、その場に立ち尽くしてしまった。

6月19日(土)

この日、秀人は補習に行く事なく、友人のバスケの練習に付き合っていた。

「午後は部活があるんだ。そこでもいてもらえると助かるんだけど……」

「この前、顧問に怒られただろ」

部活によって、部員以外が練習に参加する事を許可してくれる部活もあれば、厳重に禁止している部活もある。

バスケ部は後者に当たするため、秀人が参加するのは自主的に練習をしている時だけだ。

その時、秀人はスリーポイントシュートを決める。

「お前ら、試合が近いんだろ？こんなんじゃ負けるんじゃねえか？」

「そう思うなら及川も部活に入ってくれよ」

「俺、部活には入らねえ主義なんだよ」

相手の隙を付き、秀人はボールを奪うと、またゴールを決める。

「ほら、しっかりしろよ」

「言つとくけど、秀人より上手い人なんて、今まで見た事ないからね」

「過大評価するなって」

その時、秀人はまたスリーポイントシュートを決める。

「秀人君、ナイスシュートです！」

そんな声が聞こえ、全員が声のした方を向く。

そこには笑顔の春奈がいた。

「秀人君、お昼になりましたので……」

「ちよつと黙れ！」

秀人は顔を真っ赤にし、春奈に駆け寄る。

「お前、バカか!？」

「え?」

「みんながいるところで、あんな事、大声で言うな。恥ずかしいだろ……」

「あ、ごめんなさい……」

「まあ、良いけど……少ししたら屋上に行くよ。和孝と遠野はもう行ってるのか？」

「はい、屋上で待つてます」

「だったら、お前も早く行けよ」

「はい、すぐに来て下さいね」

春奈は笑顔を見せた後、駆け足で去って行った。

秀人はため息をついた後、友人の下に戻る。

「及川、立石と仲良いんだな。本当に付き合ったりはしてないのか？」

「別に、ただの友達だよ」

「仲良いのにもつたいないな」

「あんな、俺は別に……」

「それに及川、顔赤いし」

「え!？」

秀人は慌てて顔に手を当てる。

「別にこれは違うからな!」

「ほらほら、早く行ってやれよ。約束があるんだろ?」

「たく、もう練習付き合ってやらねえでも良いのか?」

「それは困るって!」

周りから、からかわれ、秀人はため息をついた後、荷物をまとめ、屋上に向かった。

「……何で、恥ずかしいなんて思ったんだろ?」

途中、秀人は自問自答してみたが、答えは出なかった。

「……秀人君、唐揚げ好きでしたよね?たくさん、食べて下さいね」
「ああ」

春奈が気を使うように接しているが、秀人は不機嫌な態度を取って

いる。

「ケンカでもしたの？」

「私が先程……」

「別に気にしてねえよ。それに、明日の予定を確認した方が良いでしょう？」

「秀人君、怒っているように見えます」

「気のせいだよ」

「まあまあ、秀人って時々こんな感じだし、明日の確認しようよ」
和孝は秀人を変えようとしているのか、大袈裟な程、明るく振舞う。

「明日は11時に向こうへ着くようにしましょう。お弁当を作って行きますので、昼になったら皆さんで食べて、その後は……」

春奈は一通りの予定をゆっくり話していく。

そして、全て話し終えると不安げな表情を見せる。

「このような形ですが、どうでしょうか？」

「ああ、良いと思う。というか、そんな自信なさげな顔するなよ」

「そうですね。ごめんなさい」

「ところで、及川はこの後、どうするんだ？バスケの練習は終わってたんだろ？」

「今日はこのまま帰るつもりだよ」

「だったら、午後は補習を受けて下さい」

「教科書、持って来てねえよ」

「私を見せてあげます」

「別に良いって……その、少し体調が悪いんだ」
「え？」

「熱があるんだよ」

「それ、絶対秀人の嘘だね」

和孝は悪戯するような笑みを浮かべる。

「及川、何もする事ないなら、補習に出ろ」

「だから、本当に熱があつて……」

「じゃあ、私が確かめてみますね」

春奈は自分の手を秀人の額に当てる。

突然、そんな事をされ、少しの間、秀人は固まる。

「いや、何やってるんだよ!？」

「熱があるか確かめているんですけど?」

春奈は首を傾げる。

「でも、秀人君、少し顔が赤いです。明日の予定、変更しますか?」

「いや、大丈夫だ」

秀人は落ち着きを取り戻そうと軽く深呼吸をする。

「秀人も照れたりするんだね」

その直後、秀人に殴られ、和孝は倒れる。

「いつもは殴る前に確認してくれるのに……」

「今日は遠野方式で許可なく殴る事にした」

「私がいつも和孝を殴ってるみたいないない方するな」

「いや、夢ちゃん、殴ってるじゃ……」

夢にも殴られ、和孝はそのまま動かなくなった。

「大丈夫でしょうか?」

「すぐ再生するから大丈夫だよ」

「人をモンスターみたいに言わないで下さい!」

「ほらな」

秀人は手早く荷物をまとめると、立ち上がる。

「ご馳走様。俺は帰るからな」

「秀人君、熱があるようでしたら、明日、無理しないで下さいね」

「……大した事ねえから安心しろ」

秀人は足早に階段を下りる。

「及川!」

夢はそんな秀人を追いかけて、階段を下りてきた。

「どうした?」

「少し良いか?」

夢は春奈と同じように秀人の額に自分の手を当てる。

「お前……何の悪ふざけだよ？」

「……私が相手じゃ、お前は顔を赤くしてくれないんだな」

「え？」

夢は寂しそうにため息をつく。

「お前と立石、仲が良くて、嫉妬してしまうぞ」

「お前、何か勘違いしてねえか？」

「……明日、私も楽しみにしてるからな」

夢は階段を上り、屋上に戻って行った。

夢の言葉の意味がわからず、秀人は少しの間、そのままだった。

6月20日(日)

秀人達は途中で集合した後、ほとんど時間通り、目的の川に到着した。

「空気が美味しい！」

「家から、そんなに離れてねえだろ」

「秀人、こういうのは気分が大事なんだよ」

「何言ってるんだか……」

「秀人君、久保さんの言う通りだと思いますよ？」

「まあ、そういうもんか……」

秀人は景色を見渡し、違和感を持つ。

「ここも、前に来た事がある気がするな」

「そうなんですか？」

「まあ、別の川かもしれないねえけどな」

「とりあえず、もっと近付こうよ！」

「そうですね」

4人は丘のようになっていいる急な斜面を慎重に下り、川に近付く。

「気を付けるよ」

「はい」

「ここまで水が来る事もあるのか？」

「あ、近くにダムがあるそうでした、放水した時は結構高い位置まで水が来るそうですよ」

春奈は少しだけ険しい表情になる。

「放水する時はサイレンを鳴らしたりして注意を知らせるそうですが、以前、子供が巻き込まれてしまった事故もあったようです」

「こういう場所は大人でも危ねえからな」

4人は斜面を下り終え、川のすぐ近くにしゃがむと、川に手を当てる。

「冷たいですね」

「夏にはまだ早いからな」

「入るのは無理ですかね？」

その時、秀人と夢は目配せをすると和孝の両側に立つ。タイムリングを計った後、秀人と夢は両側から和孝の背中を押した。その拍子に和孝は川に落ちる。

「よし」

「あの……着替えとか持って来てないんですけど？」

「冷たいか？」

「ええ、風邪引きそうですよ」

「じゃあ、まだ入れないという事か」

「何で俺で試したんですかね！？」

和孝は大きなくしゃみをした。

4人は少しした後、早めの昼食を食べる事にした。

「今日は暖かいかいから、まだ良いけどさ……」

和孝は服を乾かすため、薄着になっている。

「今日は2時ぐらいまでに、もう少し気温が上がるそうです」

「じゃあ、2時になったら、また落とすか」

「俺、何か悪い事しましたかね！？」

秀人は和孝を笑いながら見ているだけだ。

「でも、こういった場所で食べると、いつもより美味しく感じますね」

「まあ、それは言ってるな」

「そういえば、秀人君、熱は下がったんですか？」

「ああ、大丈夫だから心配するな！」

秀人が慌てた様子を見せると、春奈は首を傾げる。

その後、4人は昼食を食べ終え、少しの間、食休みをしていた。

「何か、喉が渴いたね」

「それなら、あそこに自動販売機がありますよ？」

「和孝、俺はコーラな」

「私はオレンジジュースにしてくれ」

「何で、俺が行く事になってるんですかね!？」

「私が行ってきましようか？」

「しょうがねえ。ジャンケンで決めるか」

「そうだな」

「春奈ちゃんと俺とで扱いが違い過ぎるんですけど……」

4人は右手を前に出し、タイミングを合わせるように軽く息を吸う。

「ジャンケン……ポン!」

結果は秀人と春奈の負けだった。

「和孝が勝つちまったから、もう1回だな」

「4本ありますし、秀人君と私で行きましようよ」

「たく……わかった。遠野はオレンジで、和孝はタバスコで良いか？」

「俺の方、飲み物じゃないんですけど……コーラにしてくれない？」

「わかりました。秀人君、行きますよ」

「ああ、わかったよ」

2人は足早に自動販売機に向かう。

「春奈は何にするんだ？」

「私は……アップルジュースにします」

「遠野がオレンジで、和孝はどれにしようかな……」

「秀人君、意地悪しちゃダメですよ」

「はいはい」

秀人はジュースを買いながらも、前にも似た事があったような違和感を感じていた。

「秀人君、コーラ2本持って下さい」

「ああ」

ジュースを2本ずつ持ち、2人は戻る事にした。

その途中、秀人は足を止める。

「秀人君？」

「俺……ここに来た事ある」

「え？」

秀人は上流の方に目をやる。

「水が迫って来て……」

秀人は視線を少しずつ下流に移す。

「兄ちゃんが……」

そのまま、秀人はジュースを落とし、その場に倒れる。

「秀人君!？」

春奈の叫び声が聞こえた後、秀人の意識は少しずつ遠のいていった。

秀人が目を開けると、弘と由香里が視界にいた。

「秀人、大丈夫か？」

「秀人君？」

「ああ……」

頭が覚醒すると共に、秀人は視線を移し、春奈、和孝、夢の3人もいる事に気付く。

「お前ら、どうしたんだよ？」

「それはこっちの台詞だ」

「秀人、倒れたんだよ」

「ああ、そうだったな」

秀人は少しずつ、何があったのか思い出していく。

「心配しました……」

「悪かったな」

「秀人、今日はみんなと川に行つてたようだな……」

「ああ、昔……兄ちゃんと2人で行つた川に行つた」

「そうか……」

弘は全てを悟つたように、ため息をつく。

「すまない、みんな出て行つてもらえないか？」

「いや、みんなにも聞いて欲しい」

「良いのか？」

「そのせいで心配をかけたんだ。みんなもどういう事か知りたいだ

る？」

秀人は体を起こす。

「秀人君、寝ていて下さい」

「大丈夫だよ。親父、話してくれ」

「……わかった」

弘は決心すると、大きく深呼吸をする。

「お前には2歳上の兄、優人まほとがいたんだ。お前が小3……9歳の時、お前と優人は2人で川に行った。大雨のあった次の日の事だ」

「そういえば、今日よりも流れが強かった気がするな……」

「それで、ダム貯水量が多くなって、その日に放水があったんだ」話を聞きながら、秀人だけでなく、春奈達も何があったのか、理解し始める。

「サイレンも鳴らしたそうだし、職員なんかが見回りもしたらしい。でも、お前らには気付かなかったんだ」

「俺、あの日……兄ちゃんと川のすぐ近くで遊んでて、途中でジュースを買いに行ったんだ。今日と同じようにジャンケンで負けた俺が買いに行った」

今日、秀人が感じていた違和感は、この日の記憶のせいだった。

「ジュースを2本買って……それからの事は覚えてねえけど、多分、俺は何も出来ねえまま、兄ちゃんを見殺しにしたんだな」

「秀人君、あれは事故だったの。しょうがない事だったのよ」

「でも、俺だけが助かったなんて……」

秀人の様子を見て、弘はため息をつく。

「あの時もお前はずっと自分を責めてた」

「俺、何で兄ちゃんの事、忘れてたんだよ？」

「お前は自分を責め続けて、自分自身を壊してしまっただった。その防衛として、記憶が封じ込まれたんだと医者と言ってた」

「俺、自分勝手だな。あの時、逃げたくせに、それすら忘れて……」弘は秀人の肩に手を置き、話を止める。

「秀人、あれは事故だ。思い出したくないなら、忘れたままでいろ」

「そうだ、及川。お前も小さかったんだし、しょうがない事だったんだろう」

「秀人、元気出しなよ」

夢と和孝も秀人を心配し、笑顔を見せる。

そんな中、春奈だけは険しい表情のままだ。

「いえ、思い出して下さい」

「え？」

「秀人君、お兄さんを見殺しにするような人じゃないです。きっと、何か理由があつたんです」

「春奈ちゃん？」

「秀人君、何も悪い事なんてしていないはずですよ！」

春奈は秀人の手を握る。

「秀人君、思い出して下さい」

「えつと……春奈ちゃん？秀人君も疲れてるみたいだから……」

「俺……兄ちゃんの腕をつかんでた？」

秀人は春奈の腕をつかみ、記憶を探る。

「そうだよ。俺、ジュースを買いに行く途中で水の音に気付いたんだ。それで兄ちゃんが危ないと思って、すぐに戻ったんだよ。俺が呼んだら、兄ちゃんもすぐに上ってきて、こっやってお互いの腕をつかんだ。でも、水が迫って来て、兄ちゃんが流されそうになったんだ。俺は必死に兄ちゃんを助けようとしたけど、俺も川に引きずり込まれそうになって……」

その時、秀人の目から涙が零れる。

「兄ちゃんは俺を巻き込まないようにしよう……俺の手を引き離れたんだ。その拍子に俺は川から離れるように転がって……気付いた時には兄ちゃんがいなかった」

秀人はあの日、兄の腕をつかんでいた、右手を見る。

今まで気にしていなかったが、よく見ると、手の甲にはその時に出来たと思われる、引つ掻いたような傷跡があった。

「俺があの時、兄ちゃんを引つ張り上げていたら、兄ちゃんは……」

「秀人君、違います」

春奈は目に涙を浮かべ、続ける。

「秀人君が助けられなかったから、お兄さんが亡くなったと思っ
てはいけません」

「でも……」

「お兄さんが助けてくれたから、秀人君は今、ここにいます」
その言葉に、秀人は心が救われた気がして、もう一度右手の傷跡に
目をやった。

そして、10年近く経った今でも、はっきりと残っている傷跡から、
あの時、兄の優人がどれ程必死に自分を助けようとしていたのが
わかった。

「……春奈、ありがとう」

秀人は笑顔を見せると、また横になった。

「兄ちゃんの墓参り、親父とお袋は行ってるのか？」

「ああ、毎年行ってる」

「今度、俺も行くよ」

「わかった」

「昔の話したり……アルバムも見たいな」

「わかった。時間がある時に探しておく」

秀人は春奈達に目をやる。

「あと、お前らに心配かけて……今日もせっかく計画立てて行っ
たのに台無しにして……」

「そんなの、また今度行けば良いでしょ」

「疲れただろ？今日は、ゆっくり休め」

「ああ、ちよつと眠くなってきたしな……」

秀人は目を閉じると、穏やかな表情で眠りについた。

6月21日(月)

昨夜のうちに、秀人は家に戻ったが、今日は大事を取って学校を休みにした。

昔の事を次々思い出し、多少の混乱はあるが、自分を責める気持ちがなくなったためか、秀人は穏やかな気持ちでいる。

「秀人君、調子はどう？」

「ああ、大丈夫だ。お袋も色々とやる事あるだろ？俺に構わねえで良いよ」

「何かあつたら言いなさいね」

部屋を出て行こうとした由香里は足を止めると、振り返る。

「春奈ちゃん、だったかしら？」

「ん？」

「秀人君の彼女って春奈ちゃん？」

「別にただの友達だよ！というか、一緒に遠野もいたのに、何で春奈なんだよ！？」

「私も弘さんも、てっきり彼女だと思ったんだけど、違うの？」

「……ただの友達だって言ってるだろ」

「そう……」

由香里は詮索をやめると、部屋を出て行った。

昨夜も長い時間眠ったため、秀人は寝る事も出来ず、結局、春奈から借りた小説を読む事にした。

しかし、それも読み終わると、他にやる事もなく、暇になってしまった。

時計を見ると、まだ3時頃だ。

秀人は少しだけ考えた後、簡単に支度をし、外へ出る事にした。

「お袋、ちよつと出掛けてくるからな」

「大丈夫なの？」

「別に風邪引いてるわけじゃねえし、大丈夫だよ」

秀人は家を出ると、大きく深呼吸をした。

最も、外へ出たからといって、特に目的があるわけではないため、秀人は何をしようか迷ってしまった。

そして結局、欲しいものがあるわけではないが、デパートで買い物でもしようと、駅に向かい、電車に乗った。

ここから近いデパートというと、春奈や夢と一緒に行ったデパートになる。

電車に乗っている間、特に読む小説もないため、秀人は景色をぼんやりと眺めていた。

その時、猫の鳴き声が聞こえ、秀人は視線を下に移す。

そこには秀人の方を向いた黒猫がいた。

秀人は目の色や、首に巻いた首輪を凝視した後、軽く笑う。

「お前、クロか？」

秀人の問いかけに、クロは鳴いて返事をした。

「猫のくせに電車なんて乗るんだな」

秀人は軽くクロの背中を撫でる。

その時、三枝谷駅が近づき、クロはドアに近づく。

それから、秀人の方を向くと、また鳴いた。

その様子は先日と同じように、ついて来いと言っているようだった。

秀人は少しだけ考えた後、特にする事もないため、クロについて行くことにした。

三枝谷駅で電車を降り、駅を出ると、クロがゆっくりと歩き始めたため、秀人も、その後ろについて行った。

「お前、このまま家に帰るわけじゃねえだろうな？」

向かっている先が春奈の家の方だったため、秀人は軽く困ってしまった。

しかし、クロは途中にあった公園に入ると、そこで足を止める。

そして、秀人に近づくと、何回か鳴いた。

少しの間、秀人はどうすれば良いのか、わからなかったが、何となく理解すると、近くにあった猫じゃらしを手に取り、クロと遊ぶ事

にした。

「ただ単に遊び相手が欲しかっただけかよ？」

秀人が適当に猫じゃらしを振ると、クロは楽しそうに猫じゃらしを追いかけた。

最初のうちは立ち止まったまま、適当に猫じゃらしを振っているだけだったが、次第に秀人も公園内を走り回り、追いかけるこのようになり始める。

しかし、猫を相手に勝てるわけがなく、秀人はすぐクロに追いつかれては、また逃げるといった事を繰り返す。

次第に秀人は息が上がり、地面に座った。

「ちよつと休憩してくれよ」

急かすように鳴いているクロに秀人は呆れた様子で笑った。

休憩を終えた後、秀人はまたクロと遊ぶ事にした。

今度はクロが逃げるように移動を始めたため、秀人は反対に追いかける事にした。

しかし、当然追いつけるわけもなく、秀人はまた息が上がり、地面に座る。

するとクロは秀人に近づき、体を摺り寄せてきた。

「お前、春奈が相手でもこんな事するのか？」

秀人の言葉に、クロは軽く体を震わせる。

その様子を見て、秀人は首を傾げる。

「俺と遊べて楽しいか？」

その質問に、クロは嬉しそうに鳴いた。

一瞬、人の言葉がわかるのかと考えたが、すぐにバカな考えだと感じ、秀人は軽く笑う。

その時、公園の外を2人の少年が歩いていたため、秀人は何となく目で追った。

「お兄ちゃん、待ってよ！」

「お前は待ってるよ」

「やだ、お兄ちゃんと一緒に行く」

会話の内容から兄弟らしい2人を秀人はぼんやりと見ていた。

その時、クロが鳴いたため、秀人は視線を移す。

クロはまた秀人から離れ、辺りを軽く走り回る。

「また追いかけてこか？」

秀人の質問にクロは嬉しそうに鳴いて答えた。

「たく……」

秀人は立ち上がると、またクロを追いかけた。

しばらくの間、クロと追いかけてこをしては休憩するといった事を繰り返していたが、秀人はついにはててしまった。

秀人はクロが飽きるまで付き合っただけでやろうと考えていたが、一向にそんな様子を見せないクロに困ってしまった。

「おい、もう終わりにして、俺は帰るからな」

何度かクロを置いて帰ろうとしたが、その度にクロがしつこく鳴き喚くと、秀人は帰る事を諦め、もう少しだけ付き合う事にした。

そうした事を繰り返し、気が付けば、辺りはすっかり暗くなってしまった。

クロを置いて無理やり帰ろうとも考えたが、どこまでもついて来たら困るため、秀人はその考えを保留にしている。

「いい加減飽きるよ……」

その時、クロは何かに対応すると、公園を出て行った。

「やっと解放されたのか？」

クロの唐突な行動に驚きつつも、秀人は今のうちに帰る事にした。走り回ったため、軽くストレッチだけした後、秀人は公園を出る。

その時、猫の鳴き声が聞こえ、秀人はため息をついた後、下に目をやる。

そこには当然、クロがいた。

「たく、しつこい奴だな……」

「クロ！」

その声は春奈の声だ。

秀人が顔を向けると、駆け足で春奈が近づいてきた。

「え、秀人君？」

「そっか、もう部活が終わる時間だな」

「どうしてここにいるんですか？」

「風邪引いたわけじゃねえし、家にいてもつまらねえから、外に出たんだよ。そうしたら、こいつに会って、遊びに付き合わされたんだ」

「そうだったんですか？」

クロは嬉しそうに鳴いた後、秀人の周りを駆け回る。

「秀人君、ありがとうございます」

「まあ、俺も暇潰ししてただけだよ。こいつ、お前が帰って来たのに気付いて迎えに行っただな」

「そうなんでしょうか？私が抱いてあげようとしたら、逃げられましたよ」

「は？」

「それで、追いかけてきたら、秀人君がいて、ビックリしました」
秀人はクロの行動の意味を何となく考える。

その時、クロは塀の上に飛び乗り、どこかへ行ってしまった。

「行ってしまいました」

「自由気ままな奴だな」

秀人は軽く笑った後、真剣な目で春奈を見た。

「春奈、昨日はありがとな」

「え？」

「お前のおかげで、心が軽くなったよ」

「そんな……私、大した事してないです」

春奈は照れくさそうに笑う。

「でも、外に出て大丈夫ですか？風邪ではないと言っても……」

「まあ、色々と思い出して混乱してる部分はあるけど、大丈夫だよ」
秀人は少しだけ頭を整理させる。

「そつえば、将来の夢、俺も持ってたよ」

「え？」

それは、先程、兄弟が会話している様子を見て、思い出した事だ。

「俺、いつも兄ちゃんについて行ってたんだ。それで、兄ちゃんが教師になるって言ったから、俺もそうするって言って……」

そこで、秀人は少しだけ間を空ける。

「教師なんて、ありがちな夢だよな」

「そんな事ないですよ」

「でも、せつかくだから、本気で目指してみようかと思ってる」

「え？」

「教師になる夢」

秀人の言葉に春奈は笑顔を見せる。

「良いと思います！」

「まあ、とりあえず大学は出る必要があるよな」

今まで、進学にやる気を見せていなかったが、教師になるという夢を目指すなら、進学した方が良い事は明白だ。

「秀人君なら、きっと大丈夫ですよ」

「お前、自分の事でも、そんな感じでポジティブに考えろよ」

「私は秀人君みたいには出来ませんから……」

春奈が顔を下に向けると、秀人は笑った。

「そつだ、すぐ近くだけど、家まで送るよ」

「え？」

「もう暗いし、危ねえだろ？」

秀人は春奈の返事を聞く事なく、ゆつくりと歩き出す。

そんな秀人に合わせ、春奈も歩き出した。

秀人と春奈は、ゆつくりと歩きながら、いつも通り雑談を始める。

「今日も、和孝とか遠野と一緒に、昼、食ったのか？」

「あ、はい。でも、あまり話せませんでした」

「何でだよ？」

「秀人君がいないと緊張してしまつて……」

「あの人……俺、いつもお前と一緒にいろつて事か？」

「そんな事、頼まないです。秀人君に悪いですから」

春奈の様子を見て、秀人はため息をつく。

そして、話題を変える事にした。

「そういえば、クロつて不思議な猫だな」

「え？」

「時々、人の言葉がわかるんじゃないかねえかつて感じる事ねえか？」

「時々ではなくて、よくあります」

春奈は少しだけ笑う。

「そういえば、私、クロがいなかったら、この高校に入らなかった
と思います」

「え？」

秀人は思わず笑つてしまう。

「クロから、二和木高校に入れて言われたのか？」

「いえ、直接言われたわけではないんですけど……」

からかわれ、春奈は少しだけ困つた様子を見せる。

「私、第一志望では、私立の高校を受けようと思つてたんです」

「そうなのか？」

「はい。ただ、願書の記入を終えて、出しに行こうと思つた当日に、
クロが引つ掻いて願書を破つてしまひまして……」

「は？」

状況が理解出来ず、秀人は固まる。

「申し込みの締め切りまで、時間はあつたのですが、クロが受ける
など言っているようで、結局、第一志望を二和木高校に変えたんで
す」

「お前も結構、いい加減な奴だな」

「でも、そのおかげで秀人君に会えました」

春奈の笑顔に、秀人は呆れつつも笑顔を返した。

その時、春奈の家に着いたため、2人は足を止める。

「送ってくれて、ありがとうございました」

「別に少しだけだったじゃねえか」

秀人は呆れたように笑う。

その時、猫の鳴き声が聞こえ、目をやるとクロがいた。

「お前、家に向かってたなら、一緒に行けば良かっただろ」

秀人の言葉に、クロは鳴いて返事をした。

「じゃあ、俺は帰るからな」

「秀人君、暗くなりましたので、駅まで送りましょうか？」

「俺を送った後、お前はどっやって帰るんだよ？」

「あ、えつと……」

春奈が、また困った様子を見せ、秀人は笑う。

「別に一人で大丈夫だよ」

「そうですか」

「じゃあ、またな」

「はい、明日、いつもの場所で待ってますね」

その時、クロの泣き声が聞こえ、2人は視線を落とす。

「クロ、またな」

秀人はしゃがむと、クロを撫でる。

嬉しそうにクロが鳴いたのを確認し、秀人は軽く笑った後、その場を後にした。

6月22日（火）

この日、秀人は時間通り起きると、学校に向かった。そして、三枝谷駅で笑顔の春奈と合流した。

「秀人君、おはようございます！」

「今日はやけに元気だな」

「秀人君が来てくれましたから、嬉しいんです」

「大袈裟な奴だな」

「大袈裟なんかじゃないです。本当に嬉しいんです」

「1日しか休んでねえし、そもそも昨日会っただろ？」

「そうですね……」

そんな話を話しながら、いつも通り電車を降りると、駅の改札で2人は夢と合流した。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

「遠野さん、おはようございます」

「及川、もう大丈夫なのか？」

「元々大した事ねえよ」

3人が改札を出ると、前を塞ぐように和孝が飛び出してきた。

「みんな、おはよう！ビックリした!？」

「あ、春奈、小説読み終わったんだ。昨日はたくさん時間があつたからな」

「え、私、まだ途中なんですけど……」

「お前は部活もあるんだし、ゆっくり読めよ」

「及川、立石から小説を借りてたのか？」

「小説の交換をしてるんだよ。お互い読んでるジャンルが全然違うし、丁度良いつて事だな」

「あの……俺を無視しないで下さい」

和孝は泣きそうな顔になっている。

「悪い、お前がここにいるなんて、あまりにも予想外で見えなかった」

「和孝、元々存在感ねえしな」

「あなた達、絶対気付いてましたよね？」

「そうですねよ、2人共、ひどいです」

「お前も無視してただろ？」

「私は本当に気付かなかっただけです」

「あの……春奈ちゃん言葉に1番傷付いたんですけど
和孝は肩を落とす。

「でも、何でここにいるんだよ？」

「俺も一緒に行こうと思ってね。今日は秀人も来ると思ったし」

「お前ら、心配し過ぎだよ」

「心配しますよ。みんな、秀人君の友達なんですから」

「お前、よくそんな恥ずかしい事、普通に言えるな」

「恥ずかしい事でしょうか？」

「でも、秀人、大丈夫そうで安心したよ」

「たく、大袈裟だな……」

秀人は少しだけ照れくさくなり、顔を赤らめる。

「大した事ねえから、安心しろ」

「記憶とか、全部戻りそうなのか？」

「いや、全部は難しいらしい。いくつか混乱してる部分もあるしな」

「そうなんですか……」

春奈は複雑な表情を見せる。

「といっても、お前らだって昔の事は忘れたりしてるだろ？それと同じ事だよ」

「確かに、私も忘れてる事は多い」

「それに記憶がなくても、今まで問題なかったもんね」

秀人が明るい調子だったため、和孝と夢は安心した様子を見せる。

「そうだ、昨日からクラスで文化祭の準備を本格的に始めたんだ」
夢の言葉を聞き、和孝は表情を曇らせる。

「秀人……俺達、1日目は接客だよ」

「は？」

「元々、出し物を決めたのは久保だからという事で、久保は強制で接客に決まった。それから、久保がいるなら及川も一緒に良いだろうと、クラス全員の合意を得て、もう1人は及川に決まったんだ」

「俺、当日は風邪引くからな」

「秀人君、サボっちゃダメです。私も行きますから、頑張ってください」

「頑張れと言われても……」

「私もお前達と一緒に接客をするんだ。サボったら許さないからな」

「面倒だな……」

秀人は昨日、休んだ事を後悔した。

昼食の時間になり、4人はまた屋上に集合すると、一緒に昼食を食べる事にした。

「秀人君、何かありましたか……？」

不機嫌な様子の秀人に、春奈は気を使うような表情を向ける。

「さつき、接客やるの断ろうとして、結局無理だったからね」

「及川、私が一緒なんだ。何も心配はいらないぞ」

「心配するとかじゃなくて、面倒なんだよ」

秀人は当日の事を考え、ため息をつく。

「でも、俺達は女の接客だけで良いんだよな？」

「基本的にはそれぞれ異性の接客をする事になるが、状況を見て、臨機応変に接客してもらおう」

「女の接客を女がやるのはまだしも、男の接客を男がやるのはおかしいだろ。男しか来ねえようなら、俺はサボるからな」

「執事姿の秀人君を見に、女子もたくさん来ると思いますよ」

「俺はそんなにもてねえって。過大評価するなよ」

「秀人君こそ、自分の事を過小評価しないで下さい」

秀人と春奈はお互いに一步も引かず、しばらく言い争いを続ける。

「ところで、春奈ちゃんのクラスは文化祭の準備してるの？」

「はい、一応しています」

「やる事あるのか？」

「私は前日の準備をする係になりました。当日は部活もあるので、何も仕事はないです」

「俺も準備担当にしてくれれば良かったのにな……。まあ、面倒な準備をしねえで済むだけ良いか」

「何言ってるんだ？準備も手伝ってもらおうぞ？」

「え？」

秀人は意味がわからず、固まってしまった。

「明後日からの準備期間では、みんなにも残ってもらおう予定だ」

「そんなにやる事あるのかよ？」

「喫茶店は準備も大変なんだ」

「たく、だから楽なのが良かったんだよ」

「ホントは女子みんなメイドで、ハーレムになると思ったんだけどね……」

和孝は肩を落とす。

「ところで、春奈は演劇の方、どんな調子だ？」

「順調ですよ。今年はシナリオも私が書きましたし、私のやりたい事をやらせてもらえるので、楽しみです」

「遠野、2日目は俺、何もしねえで良いんだよな？」

「ああ、大丈夫だ。あ、立石、私は2日目もやる事があるんだが、演劇部の発表だけは見に行かせてもらおう」

「当然、俺も見に行くからね」

「皆さん、ありがとうございます。精一杯頑張りますね」

春奈は嬉しそうに笑う。

今までは好きな役をやらせてもらえない所か、こうして友人が見に来るといふ事もなく、春奈は複雑な気持ちで舞台に立っていた。

それが、今、こうして少ないながらも友人に囲まれ、応援してもらっている事は、春奈にとって、ずっと叶えられなかった夢の1つと

も言える。

そんな事を感じながら、秀人は春奈に笑顔を向けた。

6月23日(水)

「秀人君、おはようございます」

「ああ、おはよう」

秀人と合流し、春奈はカバンから小説を取り出す。

「秀人君、私の方はまだ読み終えていないんですけど、新しい小説を持ってきましたので、良かったら読んで下さい」

「ああ、ありがとな」

秀人は小説を受け取り、カバンにしまう。

秀人達はいつもと同じ時間に、二和木駅で電車を降りた。

「2人共、おはよう！朝から春奈ちゃんに会えると、何か今日1日頑張ろうって気になれるよね」

「及川、立石、おはよう」

駅を出るところで、和孝と夢の2人が合流し、いつもと同じ他愛のない話を始める。

「及川、久保、明日は準備があるから、逃げるんじゃないぞ」

「当日、俺達は接客するんだから、帰らせてよ」

「あ、もしも時間が同じでしたら、明日は一緒に帰りませんか？」

「春奈ちゃんと一緒に帰れるなら、残ろうかな」

「お前、調子の良い奴だな」

「そういえば、文化祭は他校の人も来るんだよね。可愛い子、来るかな？」

「久保、ナンパは禁止だぞ」

「ナンパじゃないよ。ただの友達作り。春奈ちゃんもやってみれば？」

「私は、そんな事出来ません……」

その時、秀人は春奈の顔を注意深く見る。

「春奈？」

「はい？」

「今日、元気ねえけど、何かあったのか？」

秀人の質問に、春奈は首を傾げる。

「別に何もありませんよ？」

「ホントか？」

「別に春奈ちゃん、いつも通りじゃないかな？」

「私もそう思うぞ？」

「お前ら、それ、本気で言ってるのか？」

和孝と夢の同意を得られず、秀人は納得がいかなかった。

「私、いつも通りですよ？」

春奈は秀人に笑顔を向ける。

「それなら良いけど……」

「……あ、私、今日は朝から用事がありました。なので、先に行きますね」

春奈は背を向けると、足を速める。

そんな春奈の腕を秀人はつかみ、無理やり振り向かせた。

「お前、無理するなよ」

「……ごめんなさい」

振り向いた春奈の目には、涙が浮かんでいた。

「春奈ちゃん？」

和孝達も春奈がいつもと違う様子だと気付いたのか、表情を険しくさせる。

「……クロが元気ないんです」

「クロって……一昨日、元気に走り回ってただろ？」

「それが昨日、急に具合が悪くなりまして、心配だったので、医者に見せたんです。でも、年齢も10歳以上で……猫にとっては寿命と言える年齢だそうだし……」

「そんなに悪いのか？」

「今日も家を出る時、少し迷ったんです。でも、学校を休むわけにはいきませんので……」

春奈の様子から、秀人はクロが深刻な状態なのだろうと感じた。

もしかしたら、学校を終え、春奈が家に帰るまでも持たないかもしれない。

そんな事を考え、秀人は深い息を吐いた。

「遠野、俺、今日休むって、村雨に伝えてくれ」

「え？」

「神楽先生にも、春奈が休むって伝える」

秀人は春奈に笑顔を向ける。

「春奈、今日は学校休めよ」

「え？」

「家に戻って、クロの側にいてやれよ。俺も付き合ってるから春奈は少しだけ考えた後、うなずく。

「じゃあ、頼むな」

「秀人！？」

秀人と春奈は登校する生徒達の注目を集めながら、駅へ戻った。

秀人と春奈は三枝谷駅を出た後、駆け足に近い形で移動した。

家に到着すると、春奈は慌てた様子でドアを開ける。

「秀人君も上がって下さい」

春奈は靴を脱ぐと、駆け足で奥へ行ってしまった。

「……お邪魔します」

本当が上がって良いのか、少し迷いながら、秀人は春奈の後を追いかける。

「お母さん、クロの具合はどうですか！？」

「春奈、学校は？」

「あ、お邪魔します」

秀人は春奈の母親に頭を下げる。

「すみません、クロの側にいさせてやりたいと思って、俺が帰るよ
うに言ったんです」

「そう……秀人君、ありがとう」

「あ、はい」

春奈から話を聞いているとは言え、なぜ初対面の自分の事がわかったのか疑問だったが、今はそれよりもクロの事が秀人は気になった。クロは横になつたまま、弱々しく息をしている。

「クロ？」

春奈が呼びかけると、クロは少しだけ喜んでるように見えた。

「お前が帰つて来た事に気付いたみたいだな」

「でも、さつきよりクロの呼吸が弱いです」

「春奈……お医者さんが言つてたでしょ？ここまで持つているだけでもすごい事なのよ」

春奈の母親は、言葉を選んでる様子だった。

「昨夜の時点で、もう持たないかもしれないと言われていたのに、こうして家に連れて帰る事が出来たじゃない」

「クロ、本当に治らないんですか？」

春奈は納得のいかない表情を見せる。

「クロ？」

春奈が呼びかけると、クロはその声に応えるように、必死に体を起こそうとする。

そんなクロの様子が、秀人には無理をしているように見えた。

その時、クロと目が合い、秀人は何となくクロの考えを感じられた気がした。

「なあ、春奈？」

「……はい？」

「クロはずつとお前の側にいて、お前の事を支えてくれてたんだよな？」

「はい……そうです」

「そろそろ、休ませてやらねえか？」

秀人はしゃがむと、クロを優しく撫でる。

「こいつが、こんなに苦しそうなのに頑張ってるのは、お前のためなんじゃねえか？」

「え？」

「これからも、お前の側にいねえとって、無理してるように見えねえか？」

春奈はクロをじっと見て、秀人の言葉を理解した様子を見せる。

「でも……私は、これからもクロと一緒にいたいです」

「それは、クロに苦しい思いをさせてもか？」

秀人の言葉に春奈はしばらくの間、思い悩んだように黙り込む。そして、軽く唇を噛んだ後、春奈は決心するように息を吐いた。

「……秀人君の言う通りですね」

春奈は必死に笑顔を作ると、クロを優しく撫でる。

「クロ、今までありがとうがとうございました。もう休んで下さい」

春奈の言葉を聞き、クロは穏やかな表情を浮かべた後、ゆっくりと呼吸が弱くなっていた。

その様子を秀人と春奈は、ずっと見ていた。

「秀人君、今日は本当にありがとう」

「いえ、何か、長居してしまって、すみません」

時計を見ると、学校の授業が終わる時間だ。

春奈は気持ちを整理しているのか、秀人達と離れた場所に1人座っている。

「そんな事言わないで。こんな時間まで春奈の側にいてもらって……」

……

「でも、何もしてやれてないですし……」

「そんな事ないわ」

「そうでしょうか？」

悲しみを自分の中に閉じ込めてしまったのか、春奈が泣く事はなかった。

秀人は、そんな春奈を心配しているが、何も出来ない自分に歯痒さを感じている。

その時、春奈は立ち上がると、秀人の方を向く。

「……秀人君？」

春奈が声を出したのは数時間振りだ。

「あ、何だ？」

春奈の様子を秀人は心配そうに見る。

「来てもらっても良いでしょうか？少し……話がしたいんです」

「ああ、俺は大丈夫だ。すいません、行って来ます」

「行ってらっしゃい」

秀人と春奈は外に出ると、何も話す事なく、近くの公園に行った。

そこは、先日、秀人がクロと遊んだ公園だ。

春奈が空いていたベンチに座ると、秀人は隣に座った。

「……ここ、クロと出会った場所なんです」

「そうなのか？」

「クロは捨て猫だったんです。それで、家で飼う事になったんです」

春奈は穏やかな表情だ。

「私、ずっと1人でしたので、何かあれば、いつもクロに話していました。私が話をする、いつもクロは返事をするように鳴いてくれました」

その時の事を思い出すように春奈は笑う。

「クロが一緒にいてくれましたので、私は頑張っただけでした。でも、これからは……私、1人で頑張らないといけません」

「お前、バカか？」

「え？」

秀人は少しだけ怒ったような目付きで春奈を見る。

「ここに俺がいて、学校に行けば、和孝や遠野もいる。お前、もう1人じゃねえのに、何で1人で頑張るんだよ？」

春奈は何も言う事なく、秀人の話を聞いている。

「お前、1人じゃねえんだから、無理して強がったりするな」

「……少しの間だけ、良いですか？」

春奈は秀人の胸に顔を付ける。

「別に気が済むまで良いよ」

「私、クロに無理をさせてしまいました」

「そんな事ねえよ。さっきはああ言ったけど、きつと、クロだって無理してでもお前の側にいたかったんだよ」

「クロ、最初から私に懐いてくれたんです」

「お前が良い奴に見えたんだろ」

「クロ、秀人君と一緒に遊べて、喜んでいました」

「俺は疲れたけどな」

「クロ……」

春奈はそのまま声をあげて泣いた。

秀人は特に何も話す事なく、しばらくの間、そのままだった。

6月24日(木)

「じゃあ、行って来ます」

「春奈、大丈夫？」

「大丈夫です。文化祭も近いですし、昨日休んでしまった分、皆さんに迷惑をかけてしまったと思いますから」

「あら？」

「春奈、おはよう」

この日、秀人は家の前で春奈を待っていた。

「秀人君？」

「ほら、学校行くんだろ？」

「あ、はい。あと、おはようございます」

「2人共、行ってらっしゃい」

春奈の母親に笑顔で見送られ、2人はゆっくりと歩き出した。

「秀人君、今日は……」

「何も聞くな。俺も何やってんだかって思ってる」

「ありがとうございます。正直言うと、1人で行ける自信ありませんでした」

「演劇の発表、頑張るんだろ？」

「はい、頑張ります」

春奈の笑顔を見て、秀人は安心したように笑う。

「秀人君、昨日はありがとうございます。それに今日も……」

「俺だって、この前、兄ちゃんの事で助けてもらったから、お互い様だよ」

歩くペースが遅かったためか、三枝谷駅に着いた時、丁度、電車が出発してしまい、いつもの時間に2人は乗れなかった。

「次の電車でも間に合いますか？」

「少し早足で行けば問題ねえよ。和孝と遠野はどうする？」

「あ、出来れば、先に行ってもらって下さい」

「そうだな。和孝にメールしておく」

秀人がメールを打ち終え、送った後、すぐに返事が届いた。

「遠野と先に行くつてよ。一緒に行つても良かったんだけどな」

「急がせてしまつては申し訳ないです」

「春奈はそう考えるもんな。だから、先に行かせたよ」

少しだけバカにするように秀人は笑う。

その後、やってきた電車に2人は乗った。

「今日の秀人君、いつもより優しいです」

「え？」

「いつも優しいんですけど、今日は特に優しいです」

「別に、お前の事、少し心配だったただけだよ」

「あと……今日、小説の中の世界に飛び込んでしまったのかと思ひました」

「え……ああ、この前借りた小説にあつたな」

「はい、男の子が、好きな女の子の家まで、迎えに来てくれるんです」

「ああ、そうだったな」

そこで、秀人は顔を赤くする。

「あ、別に俺はお前の事……」

「わかつてます」

春奈の笑顔を見て、秀人は複雑な気持ちになる。

「秀人君、もてますから、私なんかでは釣り合いが取れません」

「だから、俺はもてねえつて言つてるだろ。というか、お前の方が俺なんかより、ずっともてるじゃねえか」

「そんな事ないです」

また春奈が頑固な様子を見せたため、秀人は小さくため息をついた。

2人は電車を降りると、早足で改札を出る。

周りを見ると、生徒は1人もいない。

「ギリギリになるけど、走る程ではねえな」

「急がせてしまったって、ごめんなさい」

「俺は別に良いって。というか、みんな余裕持って学校行ってるんだな」

「秀人君が遅いだけです」

「最近、お前って俺には厳しい事言うよな」

「ごめんなさい……」

「いや、良いよ。これからも言ってくれて構わねえから」

2人は話をしながら、早足で学校に向かう。

その途中で、2人は信号のない横断歩道を渡れないでいる老人の姿を遠くに見つける。

朝で急いでいるためか、車は1台も停まろうとしない。

「春奈、先に……」

「一緒に行きましょう」

春奈は駆け足で老人の下に向かう。

そのすぐ後を秀人は追いかける。

「2人で行ってもしょうがねえだろ。お前は先に行けって」

「だったら、秀人君が先に行って下さい」

「お前、ホント、こういうのは頑固だな。わかった、一緒に行くよ」

秀人は春奈を追い抜き、先に老人の下に着くと、足を止める。

「じいさん……あっちの横断歩道なら信号あるよ。この時間、ここ

だと車、停まらねえんだよ」

「わかってるよ。ただ、荷物が多くて、ここで待つ事にしたんだよ」

「皆さん、停まってくれませんか」

春奈は手を上げ、車を止めようとしたが、効果はなかった。

「歩行者優先だったの」

秀人は手を上げると、強引に横断歩道に立ち、車を停める。

「ほら、じいさん、俺が荷物持つよ」

「私も持ちます」

2人は老人と一緒に横断歩道を渡った。

「ありがとう。助かったよ」

「どこまで行くんですか？」

春奈の質問から、このまま老人の目的地まで一緒に行こうとしているのだろうと秀人は感じた。

「お前、今日も学校休む気じゃねえだろうな？」

「でも……」

「近くに用があるだけだから、もう荷物は大丈夫だよ」

「じゃあ、気を付けて下さいね」

2人は老人に荷物を返す。

「2人共、二和木高校の生徒かな？」

「あ、はい」

「名前、聞かせてもらえないかな？」

「じいさん、時間ねえから……」

「私、立石春奈です。彼は及川秀人君です」

「お前、律儀な奴だな」

「立石春奈さんに及川秀人君か。本当にありがとう」

「どう致しまして。ほら、春奈、早く行かねえと」

「おじいさん、すみませんね」

春奈は丁寧に頭を下げる。

2人は渡ったばかりの横断歩道をもう1度、強引に渡った後、走り出した。

「結局、走る事になっちまったな」

「秀人君、損してます」

「は？」

「せっかく良い事をして、さっきのような言葉使いでは悪い印象を与えてしまいます。年上の方には敬語を使って下さい。神楽先生や私のお母さんには敬語を使ってるじゃないですか」

「それは、どこか尊敬出来る部分があるからだよ」

「他の年上の方に対しても、もっと尊敬の心を持って下さい」

「別に俺より早く生まれただけじゃ、尊敬なんて出来ねえよ」

「私達よりも長く生きている人生の先輩なんです。それだけで尊敬

出来ます」

「まあ、今度から気を付けるよ」

「今日から気を付けて下さい」

2人は言い争いをしながら走り続けたが、学校に着いたのは、既に始業ベルが鳴った後だった。

「お前は出席呼ばれるの遅いから、間に合うだろ」

「秀人君、ごめんなさい」

「お前は悪い事してねえのに謝る癖を直せよ」

「秀人君が年上の方に対する態度を直してくれるなら、考えます」

「お前な……。じゃあ、また昼な」

春奈と別れた後、秀人は教室に入った。

「悪い、遅刻した」

「及川、昨日は休みで、今日は遅刻か？」

「体調が優れね……」

そこで、秀人は春奈に言われた事を思い出す。

「体調が優れなかったんです。すみません」

「え？」

秀人の敬語に、村雨は驚いた様子を見せる。

その時、放送を伝えるチャイムが鳴る。

「ホームルーム中、すいません。先程、男性から連絡がありました、皆さんに伝えるよう伝言を頼まれていますので、お伝えします」

生徒達は放送に耳を傾ける。

「先程、その男性が横断歩道を渡れずに困っていたところ、立石春奈さんと及川秀人君が手を貸してくれ、大変助かったそうです」

「は？」

秀人はわけがわからず、思わず苦笑してしまった。

「皆さんも、このような優しさを持った行動を大切にして下さいとの事です。以上、失礼しました」

放送が終わり、しばらく教室はざわつく。

「……及川、今日の遅刻は取り消しだな」

「いや、同姓同名かもしれないねえだろ」

「まあ、良い。みんなも見習うように」

秀人は赤くなつた顔を隠すように下を向いた。

この日、授業は午前中で終わり、午後から文化祭の準備となる。

また文化祭が終わるまで、もう授業がないため、教室の装飾等も午後から行えるようになる。

秀人達4人は昼、屋上に集まった。

「秀人君、朝の放送……」

「思い出さなくねえから黙れ」

「秀人、朝からクラス中からかわれて、機嫌悪いから……」

「和孝、気晴らしに殴って良いか？」

「別に久保の許可を取る必要ないんじゃないか？黙って殴れば良い」

「あなた達、俺はサンドバッグじゃないですよ！」

秀人は春奈に視線を送る。

「春奈の方はどうだった？」

「その……クラスの皆さんから話しかけられまして、戸惑ってしまいました」

「お前、無視してねえだろうな？」

「あ、えっと……この前、教えてもらった台詞を言いました」

少しの間、春奈の言葉の意味を秀人は考える。

「何て言ったか、ここでもう1度言ってくれねえか？」

「あ……はい」

春奈は軽く深呼吸をする。

「私は3年A組の立石春奈です。もし良かったら、友達になってくれませんか？」

「お前、バカか!？」

「前より、上手に言えるようになりました」

嬉しそうに笑う春奈を秀人は呆れた目で見える。

「せめて、状況に合わせて台詞変えろよ。同じクラスの奴にどこの

クラスか教えても意味ねえだろ」

「あ、そうでした……」

「それで、周りの反応はどうだった？」

「その……皆さん、少し困った様子を見せた後、笑顔で友達になっ
てくれました」

「……それなら良いか。友達、また出来て良かったな」

「はい」

春奈は嬉しそうに笑う。

「みんな、春奈ちゃんに対して、持つてる印象が違っつて気付いた
んだらうね」

「人を助けるなんて、本来の立石らしい事だからな。みんなに理解
してもらえて良かったな」

「はい、少し恥ずかしいですが、嬉しいです。あ、それよりも……」
春奈は頭を下げる。

「昨日は心配をかけてしまい、ごめんなさい」

「今、こうして元気な春奈ちゃんがいてくれれば、それで良いよ」

「そうだ。そんな風に改まって謝らなくて良い」

2人の言葉を聞き、春奈は安心したように息をつく。

「そういえば、春奈の担当、前日の準備って言ってたけど、この後、
どうするんだ？」

「今日は私、部活の方の準備に行つて良いそうです。当日、舞台の
装飾がすぐ行えるように準備をしたり、衣装の確認をします」

「及川、久保、うちのクラスは教室の装飾があるからな」

「面倒だな」

「普通に帰りたいよね」

秀人と和孝の態度に夢は不機嫌な様子を見せる。

「私、今日は最後まで残っていますから、帰りに部室へ寄つてくれ
ませんか？そうすれば、一緒に帰れますから」

「わかった。でも、あまり遅くなるようなら、先に……お前は帰ら
ねえか」

秀人は少しだけバカにするように笑った。

午後になり、3年C組は夢を中心に準備を開始していた。

「不要な机と椅子は旧校舎の方に運んでくれ。行けば、誰かが案内してるはずだ。指示に従ってくれ」

「力仕事は男がやれって事だろうね。秀人、行くよ」

「ここは役割分担しよう。お前が俺の分まで運んでくれ。その間に俺はお前の分まで屋上でのおんびりしてくる。良い考えだろ？」

「役割分担か。秀人、考えたね……って言うわけないでしょ！」

「及川、久保、バカやってないで机運べ」

「ごめんごめん。秀人のせいで怒られたんだからね」

「人のせいにするなんて心の狭い奴だな」

「あなたの中で心の広い人ってどんな人ですか？」

秀人と和孝はそんな事を言いながら、他の男子と一緒に机を順番に運ぶ。

その途中、秀人は周りから注目されているような感覚を持つ。

さらに女子の中には話しかけてくる者もいた。

「何か、注目されてるね」

「お前の顔がひどい事になってるからだろ」

「え、マジですか！？って、注目されてるのは秀人でしょ。俺に話しかけてくる子なんていないし」

「お前の顔がひどい事になってるのは何でかって、本人に聞くのは失礼だろ」

「いや、あなたが1番失礼なんですけど……。朝の放送が秀人の印象も変えたって事だろうね」

和孝は軽く笑う。

「前も言ったけど、秀人、結構もてると思うし、隠れファンみたいのがいたんだろうね」

「だからって、何で急に話しかけてくる奴が増えるんだよ？」

「秀人、冷めてるっていうか、春奈ちゃん程じゃないけど、女子が

ら見たら話しかけ辛かったのかもね。話しかけても無視されそう
て思ってた人もいたんじゃない？」

「さすがにそこまではしねえよ」

「わかってるよ。あくまで印象の話。ただ、今日の1件で実は優し
い人で、話しかけても応えてくれるかもって、みんな考えるようにな
ったんだよ。それに春奈ちゃんとの噂も仲が良いだけで付き合っ
てないって事になってるでしょ？」

「実際、付き合ってたねえしな」

「でも、その噂って、秀人に彼女がいなくて意味にも取られてる
みたいだし、これからは色々な子がアタックかけてくるかもね」

「それじゃあ、俺はそういつた事、全部無視した方が良いのか？」

「いや、ダメでしょ！」

「冗談だよ。そんなひどい事、和孝じゃねえから出来ねえよ」

「いや、俺も出来ないんですけど……」

2人は机を指定された場所に置き、教室に戻る。

「でも、春奈ちゃんってさ……」

「ん？」

「秀人の事、よくわかってるよね」

和孝の言葉の意味がわからず、秀人は考える。

「どういう事だよ？」

「秀人が優しいとか、周りから誤解されてるとか、そんな事言っ
た時は何言ってるんだろって正直思ってたんだけどね。今、考えて
みると、その通りだなんてね」

「は？」

「俺、秀人と2年以上一緒にいるのに、秀人の事を誤解してたな
って思ってたんだよね。春奈ちゃんだけは秀人の事、よく理解してた
んだって」

「たく……気持ち悪い事言つなよ。ただでさえ、気持ち悪い顔し
てるのに」

「気持ち悪い顔って何ですか!？」

秀人はその後も和孝をからかいながら、教室に戻った。

今日の下校時間が近付き、ほとんどの生徒は帰り支度を始めている。「これ、明日で終わるのか？」

3年C組の教室は、やりかけの装飾が多く、見るからに未完成と言える状態だった。

「大丈夫、予定通りだ」

「なら、良いけどな。じゃあ、今日は帰るか。春奈を迎えに行かねえとな」

「ああ……そうだな」

秀人達は作業を切り上げると、演劇部の部室に向かった。

春奈は部室ではなく、その途中の廊下にいた。

「ねえ、どうしてもダメかな？」

「他に好きな人がいるんです」

「でも、付き合っていないんでしょ？」

春奈の前には1人の男子生徒がいて、どうやら告白しているようだった。

「そうですけど……」

「だったら、俺と付き合おうよ」

その時、秀人は男子を突き飛ばす。

「おい、しつこいんじゃないか!？」

「あ、いや、俺は……」

「春奈、嫌がつてるじゃねえかよ!」

「……あ、ごめんなさい」

秀人が睨むと、男子は逃げるように、その場を後にする。

「大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます。秀人君の教室に行こうとしたら、声をかけられまして、困っていたんです」

「何か、朝の放送のせいで、色々状況が変わってるみたいだし、気を付けるよ」

秀人が視線を和孝と夢に移すと、2人は呆然としていた。

「どうした？」

「あ、いや……何て言うかね」

「……及川、立石、早く帰ろう。もう下校時間を過ぎてる」

「あ、はい」

4人は早足で学校を出た。

「演劇の方、本番は上手くいきそうか？」

「はい、今日は一通り、通して練習しました。皆さん、たくさん練習をしてくれたみたいで、今すぐ本番にしても良いぐらい、良かったです」

「そっか。俺も楽しみにしてるからな」

「はい！遠野さんと久保さんも楽しみにしてて下さい」

春奈は上機嫌な様子だ。

それから、まず和孝と別れ、次に駅で夢と別れ、秀人と春奈の2人になった。

2人は電車に乗ると、空いていた席に並んで座った。

「秀人君？」

「ん？」

「さつきは本当にありがとうございました」

「別に大した事してねえよ」

その時、春奈が寄りかかってきたため、秀人は顔を赤くする。

「おい？」

「今日は何だか疲れました。色々な事がたくさんありましたので…

……」

「……帰ったら、ゆっくり休めよ」

「あの……秀人君？」

春奈はそのまま、秀人の胸に顔を押し付ける。

「春奈？」

「ごめんなさい。少し気が抜けてしまいました」

そこで、秀人はク口の事を思い出す。

「お前、今日は頑張ったな」

「秀人君のおかげです。朝、家まで迎えに来てくれて、そのおかげで元気が出ました」

「……実を言うと、俺も結構きついな。兄ちゃんの事、思い出す度にもういないんだって事が悲しくなる」

「え？」

春奈は顔を上げ、悲しい目になる。

「ごめんなさい、私……秀人君のそんな気持ち、気付いてあげられませんでした」

「あ、いや、春奈が気付けるわけねえよ」

秀人は慌てて説明する。

「春奈と一緒にだと、そんな事、全部忘れられるんだよ。お前というと楽しくて……」

そこまで話し、秀人は顔を赤くする。

「あ、今のは別に変な意味じゃねえからな」

「そんな風に思ってもらえて嬉しいです。私も秀人君と一緒にだと安心出来ますから」

その時、電車が三枝谷駅に到着した。

「じゃあ、また明日」

「ああ、またな」

春奈は電車を降りると振り返り、秀人に笑顔を向ける。

その時、秀人は少しだけ考えた後、立ち上がり、ドアが閉まる直前の電車を降りる。

「……秀人君？」

当然、春奈は驚いた様子だ。

「家まで送ってくよ。遅いし、1人だと危ねえだろ」

「そんな……申し訳ないです」

「どっちにしる電車行っちゃったし、ここで1人で帰して、お前に何かあったら俺が悪者になるだろ」

「秀人君、何があっても良い人です」

「とにかく、送ってくから、さつさと来い」

「秀人君、やっぱり今日はいつもより優しいです」

春奈は笑った後、秀人の後をついて行った。

2人は駅を出た後も話題が尽きる事なく、ずっと話をしたまま、春奈の家に到着した。

「じゃあ、また明日な」

「はい、送ってくれて、ありがとうございました」

「あと……」

秀人は少しだけ顔を赤くする。

「明日も家まで迎えに来た方が良いか？」

「え？……でも、秀人君に無理をさせてしまつては悪いです」

「俺がどうかじゃなくて、お前はどうかなんだ？」

「それは、迎えに来てもらった方が嬉しいですけど……」

「じゃあ、明日も迎えに来る。同じ時間で良いよな？」

「あ……はい！」

春奈は嬉しそうに笑顔を見せる。

「じゃあ、俺は帰るからな」

「はい、気を付けて下さい」

秀人は春奈に笑顔を返した後、駅を目指した。

6月25日(金)

秀人が訪れた時、春奈は家の前で秀人を待っていた。

「秀人君、おはようございます」

「ああ、おはよう。わざわざ外で待ってたのか？」

「昨日、秀人君を待たせてしまいましたから……」

「別に昨日は迎えに来るって言うてなかったんだから、しょうがねえだろ」

「はい……でも、今日は秀人君が来てくれると知ってましたから、外で待ってたんです」

「まあ、とにかく、早く行こう。昨日みたいに遅れると困るだろ？」

「あ、はい」

2人は昨日よりも速いペースで駅に向かい、時間通りの電車に乗った。

「今日は間に合ったな」

「そうですね」

「あと、今日は途中で困ってる人がいても無視しような」

「そんな事、出来ません。秀人君だってそんな事しないはずです」

「俺はお前と一緒にじゃなかったら、昨日だって無視して行ったんだからな」

「秀人君、優しいから、そんな事しませんよ」

「だから……」

このやり取りを既に何回も繰り返しているが、この日も決着はつかなかった。

その後、二和木駅で和孝と夢の2人と合流し、4人で学校に向かった。

「もう明日は文化祭なんだね」

「教室の装飾、ホントに間に合うのか？」

「大丈夫だと言っただろ。予定通りだ」

「私も今日はクラスの準備を手伝う事になってます」

「でも、映画やるって事は、どうせ黒幕とかで暗くするんだろ？」

「そうですね、せっかくなので装飾等をするそうですね」

「無駄に経費を使うなよ」

秀人は呆れた表情で苦笑する。

「でも、あまり大掛かりな装飾はしないそうですね。みんな、楽なものが良いと言っていましたから……」

「俺、A組だったら良かったな」

「B組のお化け屋敷に比べれば、まだ楽なんだ。文句を言うんじゃない」

やる気のない秀人に夢は不機嫌な様子を見せる。

「あ、今日も帰り、同じ時間だと思えますから、一緒に帰りませんか？」

「お前のクラスの方が早く終わるようだったら、先に帰れよ」

「その時は、部活の方に行きますよ」

「わかった。じゃあ、どちらかの教室か、部室集合にするか」

「はい」

春奈が嬉しそうな笑顔を見せると、秀人も自然と笑顔になった。

朝のホームルームは出席を取るだけの簡単なものだけで、それが終わると、すぐ文化祭の準備が始まった。

「先生もいないし、夢ちゃんさえいなければ、屋上にでも行ってサボれるのにね」

「だったら2人で組んで、遠野の目を盗むか」

「え、どうやるの？」

「まず、お前が全裸になって、遠野の気を引く。その間に俺は逃げる。俺達のチームワークが試されるが……」

「試されないよ！俺しか頑張ってるじゃないでしょ！」

「及川、久保、話してないで手を動かせ」

「ごめんなさい！」

「怒られてやんの」

「あなたもですからね！」

和孝は泣きそうな顔になっている。

「及川、天井にポスター付けてくれないか？」

「天井にそんなもの付けたら、取るのが大変だろ」

「文句を言わずにやれ」

「わかったよ」

夢と言い合いする事を諦め、秀人は台の上に乗る、ポスターを付け始める。

「……というか、これ何だよ？」

「萌えと言つものらしい」

「お前が言つと、何か笑えるな」

「どういう意味だ？」

「別に……」

その時、秀人は右手の甲の傷跡が目に入り、少しの間、固まってしまった。

「及川？」

「あ、悪い。とにかく付ければ良いんだな？」

それから、4枚のポスターを天井に付け終え、秀人は一息つく。

「遠野、他には何をやれば良いんだ？」

「……さつき、兄の事を思い出してたのか？」

夢は気を使うような表情を見せる。

「俺、その時の記憶も混乱してるっていうか、実際に何があったのか、よく覚えてねえんだ」

「それは、しょうがない事だ」

「でも……」

秀人はもう1度、右手の甲の傷跡をよく見る。

「この傷跡を見ると、あの時の事がはつきりと思い出せて……兄ちゃんに感謝しねえとなって思える。きつと、こう思えるのは春奈のおかげだな」

秀人は軽く笑う。

その様子を見て、夢も少しだけ笑った。

「秀人君？」

いつもの昼食時間よりも10分程早い時間に、春奈は3年C組の教室にやってきた。

「春奈、どうしたんだ？」

「私のクラス、もう昼食にして良いそうなので……」

「そういえば、今日は学級委員の判断で休みを取れって言ってたな」
秀人はそこで、夢に目をやる。

「遠野、もう休みにしねえか？」

「まだ早いぞ？」

「春奈のクラスは、もう休みにしてるんだから、俺達も良いだろ？」

「……わかった。予定通り進んでるし、午前はここまでにしよう」

夢は呆れた様子を見せたが、クラス全員に指示を出していたため、少しだけ疲れたようにため息もついた。

「じゃあ、屋上で食べようかね」

「そうだな。遠野、お前も切り上げろよ。昼、一緒に食うんだろ？」

「ああ、すぐ行く」

夢は簡単に荷物を整理した後、弁当を手にする。

「今日はほとんど自由時間って感じのところが多いな」

屋上に向かう途中、他の教室の様子を見ながら、秀人は笑う。

屋上に着くと、4人はいつも通り、昼食を始めた。

「明日は1日接客か……」

「そうは言っても午後からだぞ？」

「じゃあ、午前はサボって良いのか？」

「お前、説明聞いてないのか？」

「え？」

秀人は意味がわからず、首を傾げる。

「明日、午前中は大講堂で開会式があります」

「そういえば、秀人は去年と一昨年、開会式もサボってたよね」

「朝、出席取る時だけいれば、1日いた事になるからな」

「全く、しょうがない奴だ」

「ゲストで、お笑い芸人が来たり、先生達の出し物があったり、それなりに楽しめるよ。今年は秀人も一緒に見ようよ」

「和孝が舞台ジャックしてくれるなら考えるよ」

「いや、あなたは俺に何を求めてるんですか？」

「秀人君、せっかいですから、ちゃんと出て下さい」

「たく……まあ、最後の年ぐらいちゃんと出るか」

秀人は軽くため息をつく。

「秀人君達、1日目は接客で忙しいんですよ？」

「ああ、そういう事になるな」

「及川、そんなに嫌そうな顔をするな」

「じゃあ……2日目の午前中、空いていますか？」

「え？」

「演劇の発表の準備は12時過ぎからなんです。それまでは時間が空いているので……」

春奈は勇気を振り絞るように、大きく深呼吸する。

「もし良かったら、皆さん、一緒に回りませんか!？」

春奈の切羽詰った様子に秀人達は少しだけ呆然としてしまった。

「別に2日目なら暇だし、構わねえけど？」

「本当ですか？」

春奈は嬉しそうに笑顔を見せる。

「いつも文化祭は1人で……だから、今年は皆さんと色々な場所を見て回れたらと思っています」

「ああ、そっか……」

春奈にとって、文化祭と一緒に回るよう、お願いする事は、とても勇気のいる事だったのだろうと秀人は感じた。

「だったら、俺、接客サボるから、1日目も一緒に回るか」

「秀人君、それはダメです。私も行きますから、1日目はちゃんと

接客して下さい」

「たく……サボる口実が出来たと思ったんだけどな」

秀人と春奈が話している様子を、和孝と夢は黙って見ていたが、お互いに目配せすると軽く笑った。

「立石、悪いが私は2日目も仕事があるから抜けられないんだ」

「あ、そうでしたね……。じゃあ、3人で回りましょうか？」

「ごめん、俺も2日目は用事あるんだよね」

「お前、2日目は俺と同じで暇だろ？」

「俺にも都合があるんだよ」

「そうですか……」

夢と和孝の都合が悪いと知り、春奈は悲しそうな表情を見せる。

「じゃあ、どうしましょうか？」

「秀人は暇なんですよ？」

「だったら、及川と立石の2人で回ったらどうだ？」

「え？」

秀人は困った表情で春奈を見る。

「いえ、私と2人きりでは、秀人君を退屈させてしまいます」

「いや、俺は別にお前と一緒に楽しいし……お前が構わねえなら2人で回っても良いけど……」

「……だったら、一緒に回りたいです」

「じゃあ、そうするか」

「はい！」

春奈は嬉しそうに笑う。

その様子を見て、夢は小さくため息をついた。

「そつだ、及川？」

「ん？」

「午後、買い出しに行くから付き合ってくれないか？」

「買い出し？」

「コーヒーと紅茶……それから、クッキーといったお菓子も用意する」

「俺で良いのか？」

「あまり大勢で行ってもしょうがないが、だからと言って荷物運びに男子には来てもらいたい。そう考えれば、及川が適任なんだ」

「まあ、教室の準備よりかは楽か……。わかったよ」

「ありがとう。じゃあ、頼んだぞ」

夢は笑顔を見せたが、その笑顔は心なしか悲しそうに見えた。

午後になり、生徒達に指示を出した後、秀人と夢は買い出しに出掛ける事にした。

「和孝、俺達が帰って来るまでに終わらせるぐらいの勢いで頑張れよ」

「何で、俺だけに言うんですかね？」

「及川、早く行くぞ」

「ああ、悪い」

3年A組の前を通る時、秀人は教室の中に目をやる。

そこには、クラスメイトと話をしながら準備を進める春奈の姿があった。

春奈の性格も理解され始めているのか、クラスメイト達がオドオドとしている春奈に合わせているようで、それなりにコミュニケーションは取れているようだった。

秀人はその様子に安心すると、息をついた。

「コーヒー、どういふのにするんだ？」

「ちゃんとポットで作る物にする予定だ。立石のおかげで衣装代が浮いたから、良い物にする」

「インスタントの方が作るの楽だろ。接客しながらだと作るのだって手間取るんじゃないかねえか？」

「及川は接客をするだけで良い。コーヒーを作るのはまた別の担当がやる」

「そうなのか？というか、そもそもどういふ風に出すんだよ？カップとか洗うの大変だろ？」

「お前はホント、話を聞かないな。中でくつろげるようになってい
るが、持ち運びも出来るよう、フタ付の紙コップで出すから問題な
い」

「じゃあ、紙コップも買わねえとな」

「何を買うべきか、私が把握してる。お前は荷物を持ってくれさえ
すれば構わない」

2人は近くにあるスーパーに入ると、必要な物を買った物カゴに入れ
ていった。

夢は簡単なメモを見ながら、足りない物がないか確認する。

「買い過ぎじゃねえか？」

「喫茶店は客の回りが早いんだ。多めに用意しないといけない」

「そんなに客来ねえって」

「それは私がメイド姿で接客しても人を惹き付ける事が出来ない
と言いたいのか？」

「お前、そんな事で怒るなよ」

「とにかく、これで必要な物は全部だ。すぐに戻るぞ」

2人は買い物を終えると、スーパーを後にした。

「寄り道して行かねえのか？」

「教室の装飾だって残ってるんだ。サボりは許さないぞ」

「たく、真面目な奴だな」

秀人は少しだけバカにするように笑う。

「……なあ、及川？」

夢は足を止めると、真剣な表情で秀人を見る。

「何だよ？」

「今まで何回か言ってきたが、私は及川の事が好きだ」

「確かに何回も聞いてるな」

「ただ、今日はお前の返事も聞かせて欲しいんだ」

夢は小さく深呼吸をする。

「私をお前の恋人にしてくれないか？」

「……え？」

秀人は少しの間、どう答えようか考える。

「……俺、お前の気持ち知ってから、お前と恋人同士になったらどうかって考えようとはしたんだよ」

夢は黙ったまま、不安げな表情を浮かべている。

「でも、考えられなかった。お前とは、これからも今のまま……友達でいたいと思ったんだ」

「……そうか」

「別にお前が女らしくねえとか、そんな理由じゃねえからな」

「わかってる」

夢は穏やかな笑顔を見せる。

「及川、もしも私がお前と2人で文化祭を回りたと言ったら、どう答えた？」

「お前、忙しいんだろ？」

「そういう意味じゃない。私が立石のように言っていたら、お前はどうした？」

「え？」

秀人は夢の質問にすぐ答えられなかった。

その様子を見て、夢は笑う。

「罰ゲーム、私への告白だったら良かったのにな」

「何でだよ？」

「そうすれば、少しの間だけでも、お前と恋人になれたからだ」

「嘘ついてる奴と付き合ってたって、しょうがねえだろ」

「確かにそうかもしれない。でも、そうして少しでも恋人として過ごす時間があったら、私の事を好きになる可能性もあったはずだ」

「……どういう意味だよ？」

「何でもない。早く学校に戻るぞ」

夢は秀人を置いて、先に歩き出した。

「待てよ」

秀人も慌てて、後を追いかける。

「及川……これからも友達でいてくれ」

「言われなくても、そのつもりだよ」

「そうか……そうだな」

夢は嬉しそうに笑った。

秀人は夢と一緒に教室に戻った後、他の生徒と共に教室の装飾をした。

そして、昨日と同じぐらいの時間に、準備を終えた。

「うん、良いだろう。みんな、遅くまでご苦労だった」

夢は学級委員として他の者をまとめる必要もあり、人一倍、責任を感じていたのか、無事に準備が終わり、安心したように息をつく。

「明日、これを着るんだよね？」

「どうにかしてサボる口実を見つけたか」

明日、着る予定の執事服を眺めながら、秀人と和孝は考え込む。

「何で、私がメイドに……」

秀人が横に目をやると、同じく接客担当となっている女子生徒が文句を言っていた。

「秀人？」

「ん？」

和孝は周りに聞こえないよう、声を潜める。

「夢ちゃんから何か言われた？」

「お前、そういう事は詮索するなよ」

「結局、秀人は夢ちゃんと付き合わないんだね」

「……友達としてしか見れねえからな」

「少し前なら、もったいない事するなって怒るところかな」

「何で、お前が怒るんだよ？」

「まあ、どっちにしろ、今はその選択で良いと俺も思うからね」

「お前、何様だよ？」

「親友からの助言だと思ってよ」

和孝は軽くため息をつく。

「秀人って、今は好きな人いる？」

「だから、いねえって言っただろ？」

「それは前の事でしょ。今はどうなの？」

「……いねえと思うけど」

秀人の様子を見て、和孝は笑う。

「悩んでるなら、まあ良いかな」

「及川、久保、そろそろ帰るぞ」

「あ、了解。春奈ちゃんは？」

「結構前から廊下で待ってたよ。お前ら、気付いてなかったのか？」

秀人の言葉に和孝と夢は少しだけ笑う。

「どうしたんだよ？」

「別に何でもないよね」

「ああ、何でもない」

2人が何か隠している様子だったが、秀人には何なのか、わからなかった。

秀人達は帰り支度を終えた後、春奈と合流し、学校を後にした。

「準備は終わりましたか？」

「ああ、何とかな」

「じゃあ、明日は必ず行きますね」

「お前、1人でも色々な所、回れるだろ？」

「いえ……去年や一昨年は何もする事がなく、大講堂で文化部の発表を見る以外は、映画を見ていました」

「そういえば、毎年、どっかのクラスで映画やってたな……って、他にも行くところあっただろ？」

「屋上でサボってた秀人よりかはマシじゃないかな」

「和孝、自重しろ」

「何ですか！？」

「及川、今年は充実した文化祭を送れそうで、良かったじゃないか」

「そうか？」

「私も秀人君のおかげで、明日が待ち遠しいです」

春奈は嬉しそうに笑顔を見せる。

「立石、明日は演劇部の練習はないのか？」

「はい、後は本番前に合わせるだけです」

「それで大丈夫か？ミスしても知らねえからな」

「昨日の時点でもほとんど完成していますから、問題ありませんよ」

「吹奏楽部なんかは明日も練習あるらしいね」

「去年や一昨年は私の部もそうでしたが、神楽先生が根詰めてやらないようにと言っていていまして、今年は本番前に軽くリハーサルをする程度になったんです」

「確かに、その方が良いものが出来そうだな」

4人は終始、文化祭の話題を話しながら帰った。

そして、途中で和孝や夢と別れた後、この日も秀人は家まで春奈を送った。

6月26日(土)

秀人は春奈を家まで迎えに行き、一緒に駅を目指していた。

「不思議だよな」

「はい？」

「1ヶ月前には、俺達は話した事もねえ赤の他人だったのに、今はこうして一緒に学校へ行くのが普通になってるもんな」

「そうですね。ずっと覚める事のない夢を見ている気分です」

「詩人みたいな事言うんだな」

秀人はバカにするように笑う。

「あの……秀人君？」

「ん？」

「秀人君が罰ゲームとして、私に嘘の告白をした事……私はもう気にしていませんから」

「は？」

春奈の唐突な言葉に秀人は少しだけ固まる。

「急にどうしたんだよ？」

「秀人君、その事を気にして……私に気を使ってくれてるんですけどね？」

「お前、そんな風に考えてたのか？」

秀人はため息をつく。

「俺、お前と一緒にいて楽しいと思ってるのはホントだからな。罰ゲームの事、悪かったとは思ってるけど、それでお前に気を使うとか、そんな風には考えてねえよ」

「本当でしょうか？」

「兄ちゃんの事でも感謝してるって言っただろ？友達の言う事は信じろよ」

「あ、はい」

春奈が安心した様子だったため、秀人は笑顔を見せる。

「お前、相変わらずネガティブな奴だよな」

「ごめんなさい。秀人君を見習おうとは思うのですが……」

「お前、自分が思ってるより、人から好かれる要素、たくさん持っているよ」

「そうでしょうか？」

「ああ、見た目だけじゃなく、性格も含めてな」

「秀人君にそんな風に言ってもらえて嬉しいです」

「だから、もっと自信持てよ」

「はい！」

春奈の元気な返事に秀人はまた笑顔を見せた。

この日、各クラスで出席を取った後、全校生徒が大講堂に集まり、文化祭の開会式が行われた。

秀人にとっては、初めて見る開会式だったが、やってきた芸人の漫才も、教師による合唱もつまらないものだった。

「和孝、早く舞台ジャックしてこいよ」

「あなたは意地でも俺に恥をかかせたいんですか？」

秀人は終止、和孝をからかい、開会式は適当に見るだけだった。そんな開会式が終わり、生徒達は教室に戻った後、クラスの出し物に向けて、準備を始める。

当然、3年C組もメイド・執事喫茶の準備に取り掛かる。

接客を行う秀人達は早めに簡単な昼食を取った後、服を着替えた。

「何でこんな格好しねえといけねえんだよ？」

「秀人、結構似合ってるよ」

「お前は似合わねえな」

「あなた、ひどい事言いますね……」

「及川、久保、私はどうだ？」

「俺は似合ってると思うが、和孝は小声で似合ってるねえ……」

「言ってるですよ！夢ちゃんも似合ってるよ」

「ありがとう」

「……何で、殴るわけ？」

「名前で呼んだからだろ」

そこで、秀人は違和感を持つ。

「女子、遠野しかいねえのか？」

「え？」

夢は周りを見渡す。

気付けば、接客担当を行うはずの、もう一人の女子がどこにもいない。

「……いないな」

「お前、気付けよ！」

「指示を出したり、忙しかったんだ！」

「……じゃあ、3人でやるのか？」

「コーヒー淹れる人を誰かメイドにしようよ」

「調理担当も忙しいからダメだろ。とりあえず捜しに行くか？」

「学校中捜さないといけないし、それは無理じゃないかな？」

「もうすぐ開く時間だ。とにかく始めよう」

「まあ、途中で戻って来る事に期待するか……」

「そういえば、及川達に説明していなかったが、客が来たら『お帰りなさいませ』だ。男なら『ご主人様』、女なら『お嬢様』を付ける。後、『くつろいでいきますか？それともすぐにまた出掛けますか？』と言って持ち帰りかどうかを聞けば良い。後はやりながら私が説明する」

「わかったよ」

「それじゃあ、調理担当、コーヒーと紅茶の準備を開始してくれ。宣伝担当、看板を持って校内を移動してくれ。コーヒーも紅茶も1杯100円だ。お菓子は自由に食べて良い事にする。じゃあ、開始するぞ」

夢の言葉を合図に3年C組のメイド・執事喫茶がオープンした。しかし、しばらく待っても客は誰も来なかった。

「まだ最初だし、外の屋台に客が集中しちゃうよね」

「このまま、客が来なければ楽なんだけどな」

「及川、少しはやる気を出せないのか？」

「この間にもう1人を捜しに行けば良かったね……。まあ、見つかる可能性は低いけどさ」

「退屈な時間をしばらく送っていたが、少しずつ校内にも人が来ているのか、廊下を通り過ぎる人の数が多くなる。」

「やってるのかな？」

その時、同じ年に見える男2人が中を覗く。

「お帰りなさいませ、ご主人様。くつろいでいきますか？それともすぐにまた出掛けますか？」

「お、本格的だな」

夢の対応にその客は機嫌を良くしたようだ。

「遠野、何事にも本気になれる奴だよな」

「秀人はやる気なさ過ぎるよ」

その時、女の客が来た。

「和孝、行け」

「あなたが行きなさいよ！」

「おい、対応してくれ」

「もう……。お帰りなさいませ、お嬢様。くつろいでいきますか？それともすぐにまた出掛けますか？」

「ホントに執事だー」

「あ、あの人、かつこいいんだけど！変わってくれない？」

その客は秀人を指差す。

「俺の立場って……」

その時、別の女性客が来た。

「……まあ、やるしかねえか」

秀人はため息をついた後、接客を始める。

「お帰りなさいませ、お嬢様。くつろいでいきますか？それともすぐにまた出掛けますか？」

そして、秀人が接客を始めてから、数分後、廊下が騒がしくなり始

める。

「本当だ！及川君がいる！」

「及川君、かつこいい！」

そんな声が廊下から聞こえ、和孝は笑う。

「秀人、モテモテだね」

「さつきから女性客が多くねえか？」

「みんな、秀人目当てなんだよ。秀人、この前の1件で印象変わってから、ファンが増えたもんね」

「おい、客が来たぞ」

「たく……お帰りなさいませ、お嬢様。くつろいでいきますか？それともすぐにまた出掛けますか？」

秀人が執事姿で接客しているという噂がまず校内に広まり、それが次第にイケメン執事がいるという噂に変わっていった結果、女の客が次々にやって来た。

「おい、もう1人、接客増やさねえと、さすがに無理だろ」

「わかつてる。全く、いつになったら戻るんだ？」

「多分、逃げたみたいだし、戻らないんじゃないかな？」

「あの？」

春奈の声が聞こえ、秀人は振り返る。

「すごい人ですね。それに秀人君、似合ってますよ」

春奈は笑顔を見せる。

「部長の集まりがあつて、遅れてしまいました」

「……春奈つて、今日は1日暇か？」

「はい、今日はもう、何もする事ないですよ」

「この際、別のクラスの奴でも良いんじゃないかねえか？」

秀人は夢に笑顔を見せる。

「及川、さすがにそれは……」

「別に問題ねえだろ。それとも規定違反になるのか？」

「いや、そんな事する人いないから、規定も何も無いと思うよ……」

「だったら、何も問題ねえだろ」

「何の話でしょうか？」

状況が飲み込めず、春奈は首を傾げる。

「立石、折り入って頼みがあるんだ」

「何ですか？」

「春奈ちゃん、メイド服とか興味ない？」

「え？」

「まあ、簡単に言うと、接客が1人逃げたから、代わりに春奈がやってくれると助かるって事だよ」

「……え!？」

春奈はまだ、状況が飲み込めていないのか、慌てた様子を見せる。

「でも……」

「あ、また客だ……和孝、頼む」

「はいはい」

「見ての通り、対応し切れてねえんだ。手伝ってくれねえか？」

「……私で良いんでしょうか？」

「お前なら、問題ねえよ」

「……わかりました」

「立石、だったら、この服に着替えて来て欲しい」

夢がメイド服を差し出すと、春奈は少しだけ考えた後、受け取った。

夢から簡単な説明を受けた後、春奈はトイレでメイド服に着替え、戻って来た。

「どうでしょうか？」

「……似合い過ぎてる」

「久保、どういう意味だ？」

「あ、別に夢ちゃんが似合っていないわけじゃ……」

和孝と夢を横目に、春奈は不安げな表情で秀人を見る。

「秀人君、どうでしょうか？」

「ああ、似合ってるよ。よし、じゃあ、何とか対応しよう」

「はい!」

「春奈、早速、男の客だ」

「あ、はい！お帰りなさいませ、ご主人様。くつろいでいきますか？それともすぐにまた出掛けますか？」

「うわ、可愛い！」

「君、彼氏とかいるの？」

「すみません、ここじゃナンパは禁止なんだ」

秀人は威圧するように睨む。

「ああ、悪い……」

「ご主人様、あちらにお座り下さい」

夢は春奈に代わり、対応を始めた。

「秀人君、ありがとうございます」

「礼は良いから、接客してくれ。ほら、また客だ」

「あ、はい」

春奈が接客を手伝い始めてから数分後、今度は噂を聞いた男の客もやって来て、行列が出来る程の盛況ぶりになっていた。

中も満席となったが、代わりに客が帰る度に新たな客を入れると出来るようになり、秀人達は接客に追われる事なく、簡単な雑談をする余裕が出てきた。

「秀人、ホントにモテモテだね」

「お前がもてねえだけだよ。それに春奈目当ての客の方が多いんじゃないか？」

「私は別に……」

「及川も立石もルックスが良いからな。こうして、並んで見るとお似合いのカップルに見えるぞ？」

「え！？」

「バカ、つまらねえ事言うなよ！」

秀人と春奈が照れた様子を見せると、夢は嬉しそうに笑った。

「でも、遠野さん目当てで来ているお客さんもたくさんいますよ？」

「そうか？私、こんな格好、似合わないと思っっているんだが……」

「そんな事ないですよ」

「夢ちゃんも隠れファン多いからね」

「久保、今は接客中だから殴らないが、名前を呼んだ分だけ後で殴るからね」

「……マジですか？というか、そう考えると、俺って必要ないよね？」

「必要ねえなんて今更気付いたのか？」

「あなたね……」

そんな秀人達のバカなやり取りも客の笑いを誘い、3年C組の評判はさらに広がっていった。

「俺、トイレ行って来るね」

その時、和孝は夢の様子を気にしながら、教室を出た。

秀人は客の対応をしていたが、そんな和孝の様子を見て、ある事を確信する。

「遠野、和孝が逃げたと思うから、すぐに追いかける。しばらくは俺と春奈で接客する」

「え、大丈夫か？」

「客のサイクルはそこまで早くねえし、1組の客に2人とかで対応してる今の状態なら大丈夫だ。それより、和孝を連れ戻せ。あと、ついでに少し休憩してきても良いからね」

「それはさすがに……」

「俺達も後で休憩させてもらうよ。それより、早く和孝を捕まえに行けよ」

「ああ、わかった」

夢は慌てて教室を出た。

その時、夢と入れ違いで、また客が入って来た。

制服を着ているため、秀人はすぐに同じ学校の生徒だと気付く。

「やっと入れた……」

行列で長い時間待ったため、その男子生徒は疲れたようにため息をつく。

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様。くつろいでいきますか？」

それともすぐにまた出掛けますか？」

「じゃあ、くつろいでいく」

「ご主人様、お嬢様、こちらの席へお座り下さい」

秀人と春奈が対応すると、一緒にいた女子生徒が首を傾げる。

「お嬢様、どうかしましたか？」

「あ、いいえ。執事の方もメイドの方もルックスが良くて、これなら行列が出来るのも納得ですわね」

「え？」

「えらそうな奴だが、悪気はない。気にしないでくれ」

「ご注文は何になさいますか？」

「そうだな……俺はコーヒーだ」

「私は……」

女子生徒は少しだけ困っているような表情を見せる。

「飲めなかつたら、俺が飲む。だから、頼みたい物を頼め」

「じゃあ、紅茶をお願いしますわ」

「紅茶は嫌いだ」

「頼みたい物を頼んで文句を言われるなんて納得いかないわ」

2人のやり取りを見て、秀人は笑う。

「ホントのお嬢様みたいだな」

「失礼な事、言わないで欲しいわ」

「いや、俺もそう思うから構わない」

「連れとして、ここは弁解するのが普通じゃないかしら？」

「コーヒーと紅茶、すぐにお持ちします」

秀人は笑いを堪えながら、コーヒーと紅茶を持って、その席に戻る。

「ごゆっくり、おくつろぎ下さい」

それからしばらく時間が経ち、夢が和孝を連れて戻って来た。

「捕まえたぞ」

「もう、見逃してくれても良いじゃん」

「お前がいなくなったら、さらに忙しくなるからダメだよ」

「そんな……」

和孝は肩を落とす。

「私達は簡単に休憩を取ってきた。2人も少しの間、休憩して来たらどうだ？」

「ああ、そうさせてもらう……って、この格好で外に出るのか？」

「その格好なら、宣伝にもなるはずだ」

「わかった……じゃあ、行ってくるな」

「私も行って来ますね」

秀人と春奈は接客を夢と和孝に任せ、教室を後にした。

秀人と春奈は外に出た後、何を食べようか考えていた。

「やっぱり、着替えた方が良かったな……」

「それでは時間がかかってしまいます」

「お前、何か食いたいのはあるか？」

「たくさんあって、迷ってしまいます……」

「じゃあ、1つずつ買って適当に分けるか」

「はい、そうしましょう！」

「俺はそば飯食いたいけど、お前はどっする？」

「えっと……」

春奈は屋台を見回す。

「明日もあるんだから、そんなに迷うなよ」

「あ、そうですね。じゃあ、たこ焼きが食べたいです」

「わかった」

2人は食べ物を買って、空いていた場所で食べる事にした。

それぞれ、執事とメイドの格好をしている事もあり、通りがかる人は2人の事を物珍しそうに見ていた。

「執事とメイドのカップルがいるよ」

「しかも美男美女なだけどー！」

時々、そんな声も聞こえ、春奈は顔を赤くする。

「ごめんなさい」

「何で、お前が謝るんだよ？」

「私と一緒にいるせいで、誤解を生んでしまっています」

「それは俺も同じじゃねえかよ」

「でも、今だけは誤解を生んでしまっても、一緒にいたいです。こうしていられるのは今だけですから」

「別にまた遊びに行ったり出来るだろ」

「いえ、秀人君に恋人が出来てしまつたら、一緒にいられなくなつてしまいます」

「は？」

春奈の唐突な話に秀人は固まる。

「何でそんな話になるんだよ？」

「秀人君を見に、たくさんの方が来ていましたので……」

「というか、お前目当ての奴もいただろ？そもそも、お前に恋人が出来るって事もあるんだからな」

「それはないと思います」

「前に話してた初恋の人と再会する事だつてあるかもしれねえだろ？」

秀人は軽くため息をつく。

「まあ、今はこうして一緒にいても、問題ねえんだし、先の事はなるようにしかならねえだろ」

「そうですね」

「ほら、さつさと食つて戻らねえと」

「あ、はい」

2人はそば飯とたこ焼きを食べ終わると、教室に戻つた。

文化祭、1日目が終わり、和孝は大きく背伸びをした。

「今日は疲れたね」

「和孝、役立たずだつたら」

「全くだ」

「そんな事言うなら、サボらせて下さいよ……」

秀人達の様子を見て、春奈は笑う。

「立石もありがとう。とても助かった」

「いえ、私もお手伝い出来て楽しかったです」

「しかし、及川と立石の人気のおかげか、今日も買い出しに行く必要があるな」

「じゃあ、スーパーが閉まる前に行くか？」

「私も一緒に行きますよ」

「いや、及川と立石には頑張ってもらったし、2人は帰ってくれ。買い出しは久保に付き合ってもらおう」

「俺ですか!？」

「私を名前で6回も呼んだからな。買い出しに付き合ってくれれば、今回は勘弁してやるぞ？」

「はい、喜んで行きます!」

「という事だ。立石は明日、演劇部の発表もあるし、早く帰って、体を休めてくれ」

「はい、わかりました。じゃあ、秀人君、帰りましょうか」

「和孝と遠野の2人でホントに大丈夫か？」

「昨日も及川と2人で大丈夫だったんだ。心配するな」

「じゃあ、先に帰るからな」

秀人は帰り支度を済ませると、春奈と一緒に学校を後にした。

「今日は楽しかったです」

「お前は明日の方がメインなんだからな」

帰りの電車の中、春奈はまだ興奮が冷めていないのか、上機嫌だった。

「でも、無理言っつて悪かったな。ホントに助かったよ」

「結局、もう1人の方は戻って来ませんでしたね」

「まあ、明日の午前中、接客やらせるつて遠野が言っつてたよ」

「そうですね」

春奈は眠そうな表情で欠伸をする。

「今日、疲れただろ?今夜は小説読んだりしねえですぐに寝ろよ」

「はい、そうします。最近は忙しくて、小説もなかなか読めないんですよね……」

春奈はため息をつく。

「犯人が誰なのか、気になっています」

「まあ、明日が終われば、少し余裕が出来るだろ？それから続きを読めよ」

「はい」

その時、三枝谷駅に到着し、2人は電車を降りる。

「秀人君も今日は疲れたはずですよ。送ってもらうのは申し訳ないです」

「俺は体力あるし、大丈夫だよ。いらねえ心配するな」

「……それじゃあ、お願いします」

2人は駅を出ると、寄り道する事なく、真つ直ぐ春奈の家を目指す。

「私、秀人君のおかげで、今を頑張る事が出来ます」

「大袈裟な事言うなよ。元々、お前は頑張れる力を持ってたんだよ」

「そんな事ないです。全部、秀人君のおかげです」

「たく、お前の中で俺ってどれだけすごいんだよ？」

「秀人君、実際にすごい人です。将来は教師になる夢を叶えて、誰からも愛される人になると思います」

「……どっかで聞いた台詞だな」

秀人は昔の事を思い返す。

「……俺が兄ちゃんに言ってた言葉だ」

「え？」

「兄ちゃん、スポーツ万能で成績も良いつて周りから評判だったんだよ。きつと将来はすごい人になるんだって思ってた。だから、あの事故で兄ちゃんが亡くなった時、代わりに俺だったら良かったのになんて考えたりもした」

「秀人君、そんな事考えないで下さい」

「わかっている。春奈が言ってくれた通り、兄ちゃんが助けてくれたんだもんね」

「それに、きつと秀人君がお兄さんの事をそう思っていたように、お兄さんも秀人君に対して同じような考えを持っていたと思います」「そうか?」

「もしも、事故に遭ったのが秀人君だったら、お兄さんも自分が身代わりになれば良かったと考えるはずです」

「そっか……そうかもな」

秀人は納得すると、少しだけ笑った。

その時、春奈の家に到着し、2人は足を止める。

「今日もありがとうございます」

「明日も迎えに来るからな。あ、明日は朝食軽めにしろ。何か屋台で食いたいのあるんだろ?」

「はい、そうします」

「じゃあ、今日はすぐ寝ろよ」

「はい、おやすみなさい」

春奈の笑顔に秀人も笑顔を返した後、その場を後にした。

6月27日(日) AM

「何だよこれ？」

目を覚ました秀人は、リビングに散乱しているアルバムを見て、呆れてしまった。

「秀人君、おはよう」

「何やってるんだよ？」

「アルバム見たいって言ってただろ？だから、倉庫から出してきたんだ」

秀人は1つだけアルバムを手に取り、中を開く。

「これ、俺が生まれる前じゃねえかよ」

「あ、それ、懐かしいな。まだ結婚する前の写真だ」

「というか、そもそも何でこんな時間にやってんだよ？」

「今日、文化祭でしょ？それで、カメラを持って行こうと思ったんだけど、そうしたら、アルバムの事を思い出して……」

由香里は笑顔のまま続ける。

「秀人君、今日は羊さんになるんでしょう？後でカメラ持って行くから、撮ってあげるわね」

「羊じゃなくて執事だからな。あと、接客は昨日だけで、今日は何もねえからな」

「そうなの？」

「秀人、今日も接客やれ」

「嫌だよ」

両親の相手をする事に疲れたため、秀人は早めに出発する事にする。

「じゃあ、俺はもう行くからな」

「私達も後で行くわね」

「だから、俺は接客しねえって」

「それでも行くわよ」

「まあ、勝手にしろよ」

その時、重ねてあったアルバムにぶつかり、1冊のアルバムが開いた状態で床に落ちる。

秀人は何となく、その写真に目をやる。

「この写真……？」

それは、アパートを背景に家族4人で撮った写真だった。

「秀人？」

「これ、前に住んでた場所で撮ったのか？」

「ああ、そうだ」

弘と由香里も写真を確認する。

「俺が抱えてるの……黒猫だよな？飼ってたのか」

幼い秀人の腕の中には、小さな黒猫がいた。

「近くに捨てられてた猫だ。ただ、アパートだったから飼えなかったんだよ」

「でも、秀人君、毎日世話してたわよ」

「こいつ、名前あったか？」

「ああ、そういえば、お前が名前付けてたな……」

弘と由香里は思い返そうとしているのか、考え込む様子を見せる。

「……クロって付けてなかったか？」

「ああ、そうだ。黒猫でクロ。安直な名前を付けてたんだ」

「そっか……。あ、そろそろ行ってくるな」

秀人はアルバムを閉じると、家を後にした。

今日も春奈は家の前で秀人を待っていた。

しかし、今日の春奈はどこか浮かない表情だ。

「秀人君、おはようございます」

「おはよう……って何か元気ねえな」

秀人は呆れたように笑う。

「昨日はあんなにはしゃいでただろ？まあ、今日は発表があるもん
な。緊張してるのか？」

「……はい」

「でも、去年や一昨年もやってるんだろ？」
「今年は今までよりも良いものにしたいです」
「ずっと練習してきたんだろ？練習通りやれば、それで十分だよ」
「そうでしょうか……？」
春奈が納得いかない様子だったため、秀人はため息をつく。
「楽しみにしてたんだろ？本番でも楽しめよ」
「はい、そうしたいのですが……」
「ほら、午前中は俺と文化祭回るんだろ？どこに行きたいか今から考えろよ」
「あ……はい！私、昨日食べられなかった、うどんを食べてみたいです」
「朝食は軽めにしたんだろ？だったら、まずはうどんを食うか？」
「はい、そうしましょう！」
「少しずつ、春奈が調子を取り戻し、秀人は安心する。
「何かクラスの出し物で気になるものはねえのか？」
「そうですね……3年F組で占いをやっているそうなので、そこに行ってみたいです」
「占いなんて興味あるのか？」
「ありますよ」
「でも、占いの結果で……」
「どうしました？」
秀人は一瞬、演劇部の発表が失敗すると占いで出たら、どう思うかを聞こうとしたが、やめた。
「好きでもねえ奴と相性ピッタリで、付き合わねえとダメだとか言われたら、どうする？」
「何とか誤魔化せただろうと、秀人は息をつく。
「その時は占いの結果を信じません」
「だったら、初めから占ってもらわねえで良いだろ」
「でも、興味があるんです」
「じゃあ、占いも行くか」

「あと、11時からある、吹奏楽部の演奏も聴きたいです」

「わかった。それも行く」

「秀人君は行きたい所、ないんですか？」

「ああ……考えとくよ」

秀人はそう言ったものの、特に行きたい所もないため、困ったように、ため息をつく。

「あ、そういえば……」

その時、秀人は少しだけ考え、話を中断した。

「どうしました？」

「……いや、他のクラスの出し物、何があつたか覚えてねえんだよ」

「確か、昨日配られたパンフレットに載ってましたよ」

秀人はしようとしていた話をする事なく、別の話題を話し続けた。

文化祭2日目の今日は、各クラスで出席を取った後、すぐにクラス
の出し物が始まった。

その前に毎年恒例のミスコンを決める投票用紙が配られたが、秀人
は何も書く事なく、ポケットにしまった。

「じゃあ、秀人、春奈ちゃんと楽しんできてね」

「お前、今日は何するんだよ？」

「とりあえず、俺は俺で忙しいんだよ。じゃあ、また」

和孝は足早に教室を後にした。

「及川、他の教室を回るなら、暇な時に喫茶店の宣伝をしてくれ」

「気が向いたらな」

夢とも別れ、秀人は春奈が待つ3年A組の教室に向かった。

「春奈」

「あ、秀人君」

「準備とかはねえのか？」

「はい、ないですよ」

「じゃあ、行くか」

2人は予定通り、外の屋台へうどんを買いに行った。

「うどんなら消化も良いですし、朝から食べても問題ないと思ったんです」

「こんな日に健康管理を気にするなよ」

「秀人君は何にするんですか？」

「俺もうどんにするよ。色々食べるのは昼にしよう」

「そうですね」

2人は揃ってうどんを買うと、昨日と同じ場所で食べる事にした。

「何か、1番乗りだったみたいだな」

「うどんも美味しいですね」

「食ったら、適当に色々回るか」

「はい、そうしましょう」

春奈は笑顔で秀人に合わせる。

秀人は流し込むように食べていたため、すぐにうどんを食べ終わった。

「ご馳走様と」

「あ、少し待って下さい」

「別にゆっくりで良いからな」

春奈の慌てた様子に秀人は笑った。

うどんを食べ終えた後、秀人達は様々な出し物を見て回った。

ダーツや的当てのようなゲームだけでなく、プラネタリウムやお化け屋敷にも行き、2人は充実した時間を送った。

「吹奏楽部の発表も見たいんだろ？そろそろ占い、行くか？」

「はい、そうしましょう」

ある程度の時間が過ぎ、2人は春奈の当初からの希望でもある、3年F組の占いに行った。

そこでは5人の生徒が占い師として席に座り、人もそれなりに入っていた。

その様子を見て、秀人はデパートにある占いコーナーのようだと感じた。

「結構混んでますね」

「まあ、5ヶ所で占ってるし、すぐ回ってくるだろ」

秀人の言った通り、数分待っただけで秀人達の番になった。

「何を占う？相性占いかな？」

「いや、俺は……」

「秀人君、せっかくですから、相性を占ってもらいましょうよ」

春奈は真剣な表情を見せる。

「あんな……。春奈だけ占ってもらえよ」

「じゃあ、相性占いね。だったら、2人共座って」

「だから俺は……」

「はいはい、とにかく座りなさいよ」

結局、強引な言葉に乗る形で秀人も春奈と一緒に席に座り、占ってもらった事にした。

「当たらねえと思うんだけどな……」

「秀人君、そんな事言わないで下さい」

「何か希望はある？タロットとか、水晶とか、色々出来るよ」

「別におまかせで良いよな？」

「はい」

「じゃあ、私独自の占いにするね」

「いや、それは胡散臭くねえか？」

「私は、それが良いです」

「まあ、おまかせって言ったもんな」

秀人は軽くため息をつく。

「それじゃあ、私が作ったオリジナルのカードで占うね。まずは彼

氏から、カード切ってもらっても良いかな？」

「俺達、付き合ってるねえんだけど？」

「イマジネーションが狂うから、余計な事は言わないの」

「たく……。適当で良いのか？」

秀人は指示通り、カードを切る。

「こんなもんで良いか？」

「終わったたら、次は彼女が切って」

「あ、はい」

彼女と言われたからか、春奈は顔を赤らめながらカードを切る。

「これで良いでしょうか？」

「うん、ありがとう。じゃあ、2人の運勢を見るね。2人共、手を繋いでもらって良い？」

「そんな事する必要あるのか？」

「ほら、私の言う通りにしてよ」

「ああ、わかった」

秀人が手を握ると、春奈はさらに顔を赤くする。

「そうしたら、2人それぞれ好きなカードを1枚引いて」

「どこから取っても良いのか？」

「うん、どこでも良いよ」

「さつきカード切ったの、意味ねえような気がするな……」

秀人と春奈はそれぞれ、適当にカードを1枚引く。

「カードは裏向きで自分の前に置いてね。次は目を閉じて、相手の事を考えて」

「カードを引いた後に考えたって、しょうがねえだろ？」

「良いから、言う通りにして」

「相手の事……」

春奈が目を閉じ、集中し始めたため、秀人も目を閉じる。それから数秒後、2人は目を開ける。

「じゃあ、2人で1枚だけカードを選んで」

「2人で1枚？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ、これにするか？」

「はい、私もそれが良いと思います」

「じゃあ、その1枚のカードは真ん中に置いて」

秀人は最後に選んだカードを机の真ん中に置いた。

「じゃあ、2人がそれぞれ引いたカードをまず、表にして」

「ああ、わかった」

指示通り、2人はそれぞれのカードを表にした。

「2人の運勢は……」

そのまま、少し間が空き、秀人は首を傾げる。

「どうした？」

「2人、すごいね」

その言葉の意味がわからず、秀人だけでなく、春奈も首を傾げる。

「すごいって、どういう事でしょうか？」

「2人の相性、すごい良いの」

「え？」

「てか、現状でもお互いに考えてる事とか、理解し合ってるんじゃないかな？」

秀人と春奈は思わず顔を見合わせる。

同時に春奈の顔が真っ赤になった。

「お前、顔赤くするなよ。俺まで照れるだろ」

「ごめんなさい」

「最後のカードも見てみようか。このカードは2人の運命を表してるの」

2人で選んだ、最後の1枚が表にされたが、そこには何の絵も描かれていなかった。

「あれ？」

「予備のカードなんて入れているのか？」

「ううん、これは白紙のカードなの」

「え？」

春奈は不安げな表情を見せる。

「つまり、相性は良いのに、2人の運命は何もねえって事か？」

「おかしいな……。この結果を考えると、2人はまだ出会ってもない事になっちゃうんだよね」

「は？」

「むしろ、一生を通して、1度も出会う事ないというか……」

秀人がふと目をやると、春奈は落ち込んでいる様子だった。

「でも、2人の相性は抜群に良いんだし、もう出会ってるなら良かったじゃん！」

「適当な奴だな……」

秀人は軽くため息をついた後、席を立つ。

「まあ、占ってくれてありがとな。春奈、もう行こう」

「あ、はい」

落ち込んだ様子の春奈を無理やり立たせ、秀人はその場を後にした。

春奈は占いの結果を聞いてから、ずっと落ち込んだ様子を見せている。

その様子を見て、秀人はどうしようか考える。

「あんな適当な占い、気にするなよ」

「秀人君と相性が良いと言われて、嬉しかったんです。でも……」

「俺達、罰ゲームがきっかけで知り合っただろ？あの時、俺は随分と低い確率で負けて、罰ゲームを受けたんだよ」

秀人は言葉を選ぶように続ける。

「それがなければ、俺達は出会わなかったんだ。つまり、今、俺達と一緒にいるのは奇跡みたいな事なんだ。そう考えれば、あの結果も納得だろ？」

「そうでしょうか？」

「だから……」

秀人はどう言えば良いかわからなくなり、別の話題を振る事にした。

「ほら、そろそろ吹奏楽部の発表だろ？早めに行って席取った方が良いんじゃないか？」

「あ……そうですね。じゃあ、行きましようか」

2人は大講堂に行くと、空いていた席に座った。

「人、結構入ってるんだな」

「吹奏楽部はコンクールでも上位に入る事が多いですし、有名なんですよ」

「俺は初めて聴くんだけどな」

秀人が横に目をやると、春奈はまた緊張した表情を浮かべていた。

「お前、何でもまた緊張してるんだよ？」

「私もこの後、ここで発表するのかと思うと、緊張してしまいます」

「お前、去年とかどうしてたんだよ？緊張しなかったのか？」

「去年も一昨年も緊張しました。でも、今年は秀人君に見てもらおうと思うと、さらに緊張してしまいます」

「わかった。俺は今年も屋上で寝る事にするな」

「そんなの嫌です。見てもらいたいです」

「冗談だよ。お前の劇、結構楽しみにしてるんだ。見るなって言われても見るよ」

「そこまで言われると、プレッシャーになります……」

「お前、面倒な奴だな」

「……ごめんなさい」

その時、吹奏楽部の部員達が演奏の準備に入る。

「吹奏楽って言うから、吹く楽器だけだと思ったら、ピアノもいるんだな」

「ピアノは1人だけですから、競争率も激しいそうぞ、本当に上手な方でないといけないそうです」

「お前、随分と詳しいな」

「毎年、吹奏楽部の演奏を聴いて、勇気をもらっていますから」

「じゃあ、今年も勇気をたくさんもらって、緊張を消せよ」

「はい、そのつもりです」

秀人は少しだけ、吹奏楽部の演奏が失敗した場合を想定したが、すぐにそんな考えを捨てた。

その時、簡単な挨拶だけした後、吹奏楽部の演奏が始まった。

吹奏楽部の演奏が終わった後、春奈はしばらく席に座ったまま、動かなかった。

「どうだった？」

「……秀人君はどう思いました？」

「音楽とか、よくわからねえけど、良かったと思うな。お前が言っ
てた通り、ピアノもすごかったよ」

「ソロでも演奏していましたよね。緊張しないんでしょうか？」

「緊張は誰だつてするよ。それでも、良いものは見せられるって事
だ」

秀人は春奈に笑顔を見せる。

「緊張したつて、良いものは作れるよ」

「私……勇気をもらえました」

「良かったな」

「実は……主役として舞台上がって良いのか、不安だったんです。
でも……私、頑張ります」

「そっか」

春奈の強い意志を感じ、秀人は安心した。

「よし、昼飯、食いに行くか」

「はい」

2人は席を立ち、外の屋台に向かった。

「何にする？今日も1つずつ頼んで分けた方が良いだろ？」

「そうですね……私は焼きそばが食べたいです」

「この後、発表だろ？歯に青海苔付いても知らねえからな」

「大丈夫です。食べた後、歯を磨きます」

「なら、良いか。俺は珍しいのが良いな……タコスとか言うのにな
るか」

「はい、じゃあ買いに行きましょう」

2人は食べ物を買うつ、すっかり定位置になっているのか、昨日や
朝と同じ場所で食べる事にした。

「これ食ったら、準備に入るんだろ？」

「はい、その予定です」

「今日、回りたい所は全部回れたか？」

「はい、秀人君のおかげです。ありがとうございます」

「俺も楽しめたから、お互い様だよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

春奈が笑顔を見せると、秀人も自然と笑顔になった。

「さっきまで、緊張し過ぎで、正直心配だったけど、その分なら、大丈夫そうだな」

「……まだ緊張はしていますが、さっきも言った通り、私も頑張ろうと思っています」

「ああ、頑張れ」

「はい！」

「でも、何よりもお前自身が楽しめ。ずっとやりたかった事だって言ってただろ？」

「はい、そうですね」

春奈は嬉しそうに笑う。

「秀人君、やっぱり優しいです」

「何で、突然そんな話になるんだよ？」

「でも、この文化祭が終わったら、一緒にいる時間、少なくなると思っています」

「え？」

「受験勉強も本格的に始まりますし、秀人君は教師を目指すんですよ？」

「ああ、そのつもりだよ」

「私は俳優関係の専門学校を考えています。ですから、高校を卒業すれば、それっきりになってしまいます」

春奈は小さくため息をつく。

「今日は、秀人君と文化祭を回れて、本当に楽しかったです」

「何で、急にそんな話するんだよ？まだ占いの事、気にしてるのか？」

「あ、はい」

「悪い結果だったら、信じねえって言ってただろ？」

「そうなんですけど……」

「たく……」

秀人はからかうように春奈の頭を撫でる。

「秀人君!？」

「お前、これから発表、頑張るんだろ? そんなネガティブな事言っ
なよ」

「そうですね……はい!」

「ほら、そうやってポジティブにいろよ。良いな?」

春奈が笑顔を見せると、秀人は軽く春奈の頭を叩いた。

「じゃあ、後で見に行くからな」

「はい、お願いします」

準備がある春奈と別れ、秀人はどうやって時間を潰そうか考えてい
た。

「秀人!」

「和孝、今まで何やってたんだよ?」

「ちよつとね。春奈ちゃん準備に行っちゃったのかな?」

「ああ、2時からだしな。色々準備に時間かかるんだろ」

「じゃあ、それまでは教室に戻ってコーヒーでも飲もうかね。秀人、
飲んでないでしょ?」

「そういえば、そうだな」

「じゃあ、決まりだね」

そのまま、秀人と和孝は自分のクラスがやっている喫茶店に行くと、
コーヒーを頼んだ。

「今日は空いてるんだな」

「これでも客はたくさん入ってるんだ。今考えれば、昨日が入り過
ぎていたんだ」

今日、夢は調理担当となっている。

「お前、昨日接客やったのに、大変だな」

「学級委員だからな。しょうがないんだ」

「別の奴に仕事振るとか出来ただろ」

仕事を頑張っている夢を見て、秀人は呆れたように笑う。

「演劇部の発表は2時からで合ってるか？」

「ああ、そうだよ」

時計に目をやり、秀人は残りの時間をどう過ごすのか考える。

「秀人、一緒にどっか行く？」

「別にもう回りたい所はねえからな……」

その時、廊下から騒がしい声が聞こえてきた。

「何だろ？ちよつと調べてくるね」

和孝は話を聞きに、廊下へ出て行く。

それから数秒後、慌てた様子で戻ってきた。

「秀人、大講堂で看板か何かが落ちたみたいで、怪我人が出たみたい」

「え？」

「聞いた話だと……」

「春奈……」

秀人は飲みかけのコーヒーを残したまま、廊下に出ると、全力疾走で大講堂に向かう。

大講堂の入り口は人が溢れていたが、秀人は人込みを掻き分け、中に入った。

開会式で見た、『二和木高校文化祭』と大きく書かれた看板が割れた状態で落ちているのを確認し、秀人は険しい表情を浮かべる。

「春奈……春奈は！？」

秀人の迫力に質問された生徒は驚いた様子を見せる。

「……秀人君？」

「え？」

振り返ると、驚いた様子の春奈がいた。

「春奈、怪我は！？」

「大丈夫です。私は部室でリハーサルをしていたので……」

「良かった……」

秀人は安心して気が抜けると、その場に座った。

「ただ、準備をしていた方が怪我をされたみたいで……あと、私達の発表、出来なくなってしまうました」

「え？」

「事故が起きてしまいましたから……」

春奈は悲しそうな表情を見せる。

「事故つて、お前らの責任じゃねえだろ？」

「今、神楽先生が校長先生と話しているんですけど……」

「お前、さつき、頑張るって言ってたよな？」

「あ……はい」

「だったら、簡単に諦めるな」

秀人は立ち上がると、校長と神楽の下に向かう。

そこには、村雨もいた。

「今まで、練習してきたんです。それがこんな形で中止になってしまったのは……」

「神楽先生、気持ちはわかりますが、保護者の方の声もありますし、安全のために……」

「生徒達のためを考えれば、発表を中止する事には賛成出来ません。村雨と神楽が説得をしても、校長は納得しなかった。

「おい、校長、演劇部の奴らは何も悪くねえだろ。むしろ、看板をちゃんと付けなかった、あんたらの責任だ。それなのに、何で演劇部の発表を中止するんだよ？」

「及川、お前は黙ってる」

「黙ってられねえよ！」

秀人の態度に校長は表情を険しくする。

「君、名前は？」

「すみません、私のクラスの生徒です……」

「お願いだ！演劇部の発表を中止するな！」

秀人は頭を下げる。

「……私からもお願いします」

秀人を追いかける形でやって来た春奈も頭を下げた。

「君達の気持ちもわかる。しかし……」

「校長先生、中止にする事は良くないと思いますよ」
そんな声が聞こえ、秀人は顔を上げる。

「あれ、じいさん？」

そこには先日、横断歩道を渡れずに困っていた、あの老人がいた。

「あの時はありがとう。助かったよ」

「じいさん、どうしてここに？」

「おい、理事長に何言ってるんだ！」

「え？」

「別に構いませんよ」

秀人と春奈の驚いたような反応に理事長は笑顔を見せる。

「保護者の対応は私がしますから、演劇部の発表は予定通り進めて下さい」

「……わかりました」

理事長の言葉に校長は素直に従う形を取った。

「ありがとうございます」

「困っている時はお互い様ですよ。それじゃあ、頑張りなさい」

理事長は穏やかな表情のまま、その場を後にした。

「良かったな」

「はい！」

「じゃあ、準備を始めよう。俺も手伝ってやるから」

秀人の言葉に春奈は嬉しそうに笑顔を見せる。

「ありがとうございます」

春奈の笑顔を見て、秀人も笑顔を返した。

「そういう事なら、俺も手伝うよ」

声が出た方に目をやると、和孝が立っていた。

「ありがとな」

秀人はそこで、軽く深呼吸をする。

「よし、じゃあ始めよう」

秀人の言葉に、他の部員達は大きくうなずいた。

6月27日(日) PM

演劇部の発表が中止される事はなくなつたが、準備を再開し、すぐに別の問題が明らかになつた。

「時間は？」

「あと1時間ぐらいです」

「遅れてるわね……」

神楽は頭を悩ませている様子だ。

「それに、立石さん達は衣装に着替える必要もあるでしょ？」

「でも……」

不安げな表情の春奈を見て、秀人は笑顔を見せる。

「大丈夫だ。ここは俺達に任せろ」

「でも、このままでは間に合いません」

春奈はため息をつく。

「春奈、ネガティブに考えるな」

秀人は少しだけ説教するような表情を見せる。

「どうにかして、絶対に間に合わせる。例えば手伝いを増やすとか

……」

「だったら、俺達が手伝ってやろうか？」

「え？」

そこには先日、麻雀で勝負をした、あの3人の男子生徒がいた。

「お前ら、何でここに？」

「騒ぎがあると聞いて来たんだ。それに、お前には借りがあつただろ？だから、ここで返させろ。あと、暇そうな奴なら、すぐ集められるぞ」

「……わかつた、頼む。神楽先生、人数が集まれば、間に合いますよね？」

「少ないよりは良いと思うけど、それでも間に合うかどうか……」
「あの……？」

声が出た方に目をやると、1人の男子生徒が手を上げていた。

「何？」

「僕、セッション部の者です。その……もし良かったら、順番を変えませんか？」

「え？」

「僕達、持ち時間は30分で、演劇部の発表の後、3時から始める予定です。その時間を2時からにしてもらえば、演劇部の発表を30分遅らせる事が出来ます」

全く想定していなかった提案にその場にいた者は少しだけ固まる。

「そんな事して良いのか？」

「僕達、セッションなので、練習のようなものは必要ないんです。

多少、出番が早くなっても問題ないですし……」

「じれったいな。私達、先にやりたいの。そっちも、その方が良いんでしょ？」

同じセッション部の部員なのか、一緒にいた女子生徒は強気な態度を見せる。

その様子を見て、秀人は軽く笑う。

「お願いするか？」

「そうですね……。神楽先生、問題ないでしょうか？」

「時間を遅らせれば、準備も間に合いそうだし、お願いしましょうか」

「セッション部の顧問は俺だから、顧問の許可は俺が出せば問題ないな。あと、俺から校長や理事長に話を通しておこつ」

村雨の言葉に、そこにいた者は笑顔を見せる。

「じゃあ、交渉成立だね。他の部員も呼んでくるよ」

「あ、待ってよ」

セッション部の2人は、足早に去っていった。

「じゃあ、立石さん達は衣装に着替えて、及川君達は私と一緒に舞台準備をして下さい」

「はい」

「私も衣装に着替えたら、準備を手伝いますから」

「わかった。じゃあ、さつさと着替えて来い」

「はい！」

演劇部の発表を行う目処が立ち、春奈は嬉しそうに笑った。

「もう少し右……そう、そこに設置して」

秀人達は神楽の指示を聞きながら、順調に舞台の装飾を進めていた。

「セクション部の発表がある時は、幕を下ろすから、それまでにあの程度終わらせましょうね」

「セクション部の発表って、舞台使わねえのか？」

「客席のすぐ近くに楽器を置いて、演奏するみたいだよ」

客席の方に目をやると、セクション部の生徒が楽器を設置していた。その時、舞台衣装に着替えた春奈がやってきた。

「先生、着替え終わりました」

春奈は色鮮やかなローブを羽織り、背中には蝶々の羽のような物が付いている。

「どうでしょうか？」

「似合ってるよ」

秀人の言葉に春奈は嬉しそうに笑う。

「ありがとうございます。あ、神楽先生、相談があるんですけど…」

…

「何？」

「さっきの事故で、照明担当の方も怪我をってしまったじゃないですか？」

「あ、そうだったわね……」

「問題発生か？」

「照明担当の人がいなくなっちゃったのよ」

「それで、他の部員と相談しまして、秀人君にお願いがあります」

「俺が照明やれば良いのか？」

「いえ、照明は色や位置等もあるため、シナリオを知らない秀人君

では難しいです。舞台上がる予定だった方が照明をやる事になりました」

春奈の言いたい事がわからず、秀人は首を傾げる。

「俺にお願いって何だよ？」

「その……1人、照明をやるために抜けてしまったため、舞台上がる方が1人足りないんです」

「おいおい、待て待て……」

「なので、その方の代わりに舞台へ上がって欲しいんです」

「お前、バカか？それこそ練習が必要だろ」

「いえ、台詞もありませんし、出番も少ないですから、秀人君でも大丈夫です」

「……何の役だよ？」

「王子の役です」

「王子って、結構、重要な役じゃねえか。そもそも、台詞がなくて出番の少なえ王子が出る劇って何だよ？」

秀人は頭が混乱してしまった。

「立石さん、それ、部員全員で決めた事かしら？」

「はい、そうです」

「じゃあ、私からも、お願いするわ」

「え？」

秀人は困った表情を見せる。

「秀人、せつかくだから、やってみれば？」

「お前、他人事だな」

「出番は最後だけだし、及川君でも大丈夫よ」

「そんな事言われても……」

秀人が目をやると、春奈は不安げな表情を浮かべていた。

その表情を見て、秀人はため息をつく。

「まあ、昨日手伝ってもらったしな……。ただ、俺のせいで、メチヤクチャになっても知らねえからな」

「それじゃあ……？」

「わかった、俺がやるよ」

秀人は心を決めると、深い息を吐いた。

2時から始まったセッション部の発表が行われている間も、舞台の準備を進め、開始10分前に完了した。

途中、秀人も衣装に着替え、自分の出番の部分だけ台本を読んだ。

「仮面を付けた無口な王子役か……」

「出番は最後、私が舞台を離れ、1人残された後、仮面を外すだけです。秀人君なら出来ますよ」

「これ、俺じゃなくても出来るだろ」

「でも、他の部員から、秀人君に代わってもらおう言われましたので……」

「周りの意見で俺になったのか？」

「はい、そうですよ」

「お前、部長の威厳とかねえのかよ？」

「私もそれが良いと思いましたが……」

秀人は台本をパラパラと、めくる。

「これ、お前がシナリオ書いたって言うてたよな？」

「そうですよ」

「基になった話とか、あるのか？」

「……小さい頃に見た夢を基にしましたけど、ダメでしょうか？」

「ダメなんて言うてねえだろ」

不安げな表情を浮かべる春奈を見て、秀人は呆れたように笑う。

その間も時間が進み、30分遅れとなる、発表の時間がやってきた。

部員達は幕が下りた舞台に集まり、最後の打ち合わせを始める。

「いよいよだね」

「及川、頑張れ」

「というか、何で、ここにお前らがいるんだよ？」

そこには、部員達に紛れ、和孝と夢がいた。

「舞台変えを手伝う事になったんだよ」

「お前がミスしたら、演劇部の連中が今までやってきた事が全て水の泡になるな」

「変なプレッシャーかけないで下さい！」

「私も手伝うから、心配するんじゃない」

「お前、働いてばっかじゃねえか。少しは休めよ」

「友達が困ってるのに、放っておくわけにはいかない」

「……2人共、ありがとな」

本音を言えば、秀人は舞台上上がる事に不安を持っていた。

その不安が、近くに和孝や夢がいるというだけで、薄らいでいくのを秀人は感じている。

「そつだ。部長、みんなに何か言ってやれよ」

「え!？」

部員達が注目すると、春奈は困ったような表情を見せる。

「皆さん、今日まで練習に付き合って頂き、ありがとうございます
た」

「随分と固いな」

「その……良い劇にしましょう」

春奈が笑顔を見せると、部員達は全員笑った。

「よし、お前の出番からだろ？頑張れ！」

「はい！」

舞台上に春奈1人を残し、他の者は舞台袖に移動した。

「それでは、これより、演劇部の発表を始めます」

アナウンスから、数秒後、幕がゆっくりと上がった。

幕が上がると、曲が鳴り始め、照明が春奈に向けられる。

「私は妖精ルナ。困っている人を助けるのが私の役目」

舞台上で、春奈は妖精ルナを演じ始める。

「ほら、あそこに困っている人がいる」

照明が少年のような格好をした人物に向く。

「おかしいな……。どこに落としたんだろう？」

「落し物をしたようね。私が見つつけてあげる」

ルナは踊るように舞台の上を動き回る。

「見つけた。落とし物はこの鍵ね」

ルナは少年のすぐ近くに鍵を落とす。

「あ、あつた！」

少年は鍵を拾い、嬉しそうに去って行った。

「人は私達、妖精の姿を見る事が出来ない。私達の声を聞く事も出来ない。時々、私達の存在を感じて、感謝してくれる人はいる。でも、それだけでは悲しい」

ルナは顔を下に向ける。

「他の妖精達は人と話せない事を悲しいとは思わない。でも、私は1度だけ、人と話した事がある。だから、人と話せないと悲しくなってしまう……」

「ルナ、また王子様の事を考えているの？」

そこで、ルナと同じ格好をした人物が姿を現す。

「幼い頃、王子様と話をしたなんて、ルナの勘違いよ」

「優しい心を持った人なら、私達の姿を見る事が出来る。話をする事も出来るはずよ」

「そんなの嘘に決まってるじゃない。それに、いつだって仮面を付けて、素顔を見せない冷たい人。みんな、王子様の事をそう言ってるわ。優しい心なんて持つてるはずないわよ」

「……きつと理由があるの。何かきつかけがあれば、王子様は、また優しい心を取り戻す事が出来るはずよ」

「そう思ってるのはルナだけよ。最近は人前にも姿を見せないで、何を考えてるのか、わからないわよね」

ルナを残し、もう1人の妖精は姿を消す。

「王子様はそんな人じゃない……」

悲しそうな表情を浮かべた後、ルナは手を組み、祈りを捧げる。

「神様、お願いがあります。私に王子様と話をする機会を与えてくれませんか？」

ルナは少しだけ間を空けた後、また口を開く。

「そのためなら、どんな罰を受けても構いません。どうか、私の願いを叶えて下さい」

その時、照明が消え、舞台は真つ暗になる。

次に明かりがついた時、ルナはキレイなドレス姿になっていた。

「これは……？」

ルナは自分の手や足を注意深く観察する。

その時、老人の格好をした人物が大きな荷物を持ち、現れた。

「君、すまないが、この荷物を運ぶの、手伝ってくれないかい？」

「はい、良いですよ」

ルナはそこで、驚いた様子を見せる。

「おじいさん、私の姿が見えるんですか？」

「ああ、見えるよ？」

「私……人になれたのね」

ルナは嬉しそうに笑った後、そのまま舞台の上を踊るように動き回った。

「裏方も大変だね」

背景を妖精がいる森から町に変え、和孝は息をつく。

「春奈、演技上手いんだな」

舞台の上の春奈を見て、秀人は驚きを感じていた。

「今までは悪役だったけど、今度の役は春奈ちゃんにピッタリな役だね」

「ああ、私もそう思うぞ」

物語はその後、ルナが助けた老人の家で暮らし始め、少しずつ町の人と関わるようになっていった。

ルナは今までと同じように困っている人を助け、次第に多くの人から感謝されるようになる。

「ルナは踊る事が好きなんだな」

「はい、嬉しい事があると、自然と体が動いてしまいます」

「それなら、舞踏会に出てみたらどうだい？」

「舞踏会？」

「優勝した者は城に招かれるそうだよ」

「城に!？」

ルナは嬉しそうに笑顔を見せる。

「じゃあ、王子様に会う事も出来ますか!？」

「ああ、会えるだろうが、この町の王子様は冷たい方だよ。会えたとしても、話すら出来ないかもしれない」

「そんな事ありません。私、舞踏会に出ようと思います」
ルナはまた、舞台の上を踊る。

そこで、舞台裏で劇を見ていた和孝は、ため息をつく。

「ねえ、秀人？」

「ん？」

「この話の王子様って、多分、秀人がモデルだよね？」

「え？」

秀人は首を傾げる。

「気付いてないの？」

「気付くも何も、この話、小さい頃に見た夢を基にしたって、春奈は言ってたよ」

「それ、ホント?多分、演劇部の人みんな、秀人をモデルにしてるって気付いてるみたいだよ？」

「え？」

秀人は周りに目をやり、和孝の言葉を理解する。

「及川君？」

神楽は穏やかな表情を見せる。

「この物語の結末は見た？」

「この後、妖精と王子が会って、2人は何も話さなのまま、別れるってところですか？」

「この話、王子様の出番が少ないのはなぜかって立石さんに聞いたの。そうしたら、ルナと王子様は一緒になれないから、ルナの物語

に王子様は、ほとんど登場しないんだって言ったの」

神楽の話聞きながら、秀人は台本を読み返す。

「物語の中で、王子様はルナと会って、優しい心を取り戻す。ルナもそれで目的を達成出来て、ハッピーエンドだって立石さんは言っていたわ。でも、他の部員はそう感じていないの」

「俺もハッピーエンドとは思えないね」

神楽はまた穏やかな表情を見せる。

「及川君、この台本通りの結末にしても構わないわ。でも、少しだけ、この物語の本当のハッピーエンドを考えてもらえないかしら？」

「何で俺に？」

「……教師としてこんな事を言うのは良くないのかもしれないけど、あなた達2人、お似合いに見えるの」

神楽は笑顔を見せる。

「秀人、後悔のない選択しなね」

和孝はからかうように笑う。

「及川、もうすぐ出番だぞ。……あと、私もお前と立石、お似合いだと思ってる」

夢は少しだけ気を使うような態度を見せる。

「……たく、勝手な事、言うなよ」

この時、秀人は春奈との時間を思い返していた。

本当は、ずっと前に答えが出ていた。

しかし、秀人は素直になる事が出来ず、その答えを無視していた。

秀人は自分なりの結論を出すと、大きく深呼吸をした。

「舞踏会、優勝者は……ルナです！」

物語は台本通り、進んでいた。

ルナは舞踏会に優勝し、城に招かれた。

そして、秀人が演じる王子と、この後、会う事になる。

「秀人、もうすぐだね」

「及川、頑張れ」

「……たく、本当は台詞もねえ、楽な役だったのにな」

それは、誰にも聞こえないような、小さな声だった。

もう1度だけ、大きく深呼吸をした後、秀人は仮面を被る。

物語は城に招かれたルナが王子を探すところまで進んでいた。

「よし、行ってくる」

「秀人、頑張つてね」

和孝の声援を背後に、秀人は舞台上がった。

客席は満席に近い状態で、同時にこんな大勢の前で堂々と演技をしている春奈に秀人は驚きを感じた。

「王子様、ずっと話がしたかったんです」

ルナは深く頭を下げる。

「王子様は忘れてしまわれているかもしれませんが、以前、私は王子様とお会いした事があります。その時、私は王子様の優しい心を感じました」

ルナは顔を上げる。

「国をまとめるため、冷たい心を持った王子を演じられているのかもしれませんが。しかし、町の人は優しい心を持った王子を望んでいると思います」

ルナは両手を前に差し出す。

「私は……あなたの心を隠す、その仮面を外したいのです」

ルナは寂しそうに笑った後、手を下げる。

「それだけを伝えるに参りました。どうか、王子様が優しい心を取り戻して下さいますよう、私は祈りを捧げます」

ルナは背を向け、歩き出す。

台本では、ルナが去った後、1人残された王子が仮面を外し、物語が終わる。

しかし、秀人が出した答えは、そんなエンディングではなかった。

「待て！」

台本にはない台詞に、春奈は驚いた様子で足を止める。

「お……私も、お前の事を覚えている」

「え？」

「私は……臆病者なんだ。人に本心を見せる事が怖いんだ」

秀人は演技ではなく、自分の本心を話していた。

「でも、お前と一緒にいてくれれば、優しい心を取り戻せる……心を晒す事が出来る。そう思えるんだ」

秀人は仮面を外した後、春奈に向け、手を差し出す。

「私と、ずっと一緒にいてくれないか？」

春奈は少しだけ考えた後、秀人に近寄り、手を握った。

「……はい、私もあなたと一緒にいたいです」

同時に幕が下り始め、客席からは大きな拍手が聞こえた。

幕が下りると、秀人は手を引き、春奈を抱き寄せる。

「あ……」

春奈は少しだけ慌てた様子を見せる。

「エンディング、勝手に変えちまって悪いな」

「いえ……私は、このエンディングの方が好きです」

2人は少しの間、そのままだった。

「悪いけど、キャスト紹介があるから、中断してね」

「あ、ごめんなさい」

秀人と春奈は離れると、顔を真っ赤にさせた。

キャスト紹介も終わり、演劇部の発表は大成功で終わった。

部員達が挨拶をしに舞台を下りたため、秀人もついていく形で舞台を下りる。

「とりあえず、さつさと着替えるか」

「あ、秀人君、私はこの後、片付けがあるので……」

「俺も手伝つよ」

「でも……」

「ここまで来て遠慮するなよ。そもそも人が少なくて大変なんだろう？」

「じゃあ、お願いします」

春奈は丁寧な頭を下げる。

「秀人、劇に出るなら出るって言え」

「最悪なのに見つかった」

「おい、自分の親に対して、そんな事言うな！」

「秀人君、素敵だったわよ」

秀人は両親に対して、ため息をつく。

「せっかくだ。春奈ちゃんと一緒に写真を撮ってやるよ」

「そんな事しねえで良いよ」

「あ、秀人君、一緒に撮ってもらいたいです」

「……たく」

秀人は春奈と並び、写真を撮ってもらった。

「立石さん、ちょっと良いかしら？」

「あ、先生、俺も手伝いますよ」

「そう？じゃあ、及川君もお願い」

「じゃあ、片付けとかあるから行くな」

両親と一緒にいたくないという気持ちも重なり、秀人は春奈と共に足早にその場を後にする。

「ミスコンの投票用紙はこちらに入れて下さい！」

途中、そんな声が聞こえたが、秀人はそのまま通り過ぎた。

秀人達が片付けや着替えを終えた頃には、文化祭の終了が間近に迫っていた。

各クラスの出し物もほとんど終わり、片付けを始めているクラスもある。

「春奈？」

「はい？」

「その……屋上で少し話さねえか？」

「はい、良いですよ」

「じゃあ、行くか」

2人は屋上に行き、誰もいない事を確認すると、適当な場所に座っ

た。

「そろそろ閉会式が始まりますね」

「そうだったな……見に行きたかったか？」

「いえ、ここで放送を聞くだけで十分です」

開会式とは違い、閉会式は同時に放送も流す形式で、生徒達のほとんどは大講堂に行く事なく、放送を聞くだけで済ませる。

「あ、春奈？」

「はい？」

「俺達つて……」

秀人は朝、話そうと思っていた事を話すつもりだったが、やめた。

「やっぱり、何でもねえ」

「何ですか？」

「ちゃんと思いついたら、話すよ」

その時、放送を伝えるチャイムが鳴る。

「これより、閉会式を開始します」

秀人と春奈は、そのまま特に何も言う事なく、放送に耳を傾ける。

「それではまず、クラスの出し物について、最も評判の良かったクラスを発表します」

少し間を置くように、簡単なBGMが聞こえた。

「3年C組のメイド・執事喫茶です」

「え？」

「……秀人君、おめでとうございます」

「お前が手伝ってくれたおかげだよ」

秀人の言葉に春奈は嬉しそうに笑う。

「続いて、ミスコンの結果を発表します。今年のミスコンは……」

そこでも、また簡単なBGMが聞こえた。

「3年A組、立石春奈さんです。立石さんは史上初となる、3連覇を達成しました」

「また選ばれてしまいました……」

春奈は複雑な表情を浮かべる。

「おめでとっ」

「……ありがとうございます」

「もつと喜べよ」

「そうなんですけど……」

春奈はため息をつく。

「まあ、前に言った通り、集計なんてしねえで、好きなら直接伝えろって思うけどな」

秀人はポケットから投票用紙を取り出す。

「秀人君、投票しなかつたんですか？」

「お前、何か書く物ねえか？」

「えっと、ボールペンなら、ありますけど？」

「じゃあ、借りるな」

秀人は投票用紙に『立石春奈』と書いた後、春奈に差し出した。

「ほら」

「これは……？」

春奈は意味がわからず、渡された投票用紙をじっと見つめる。

そんな春奈を見ながら、秀人は軽く深呼吸をする。

「……俺は春奈の事が好きだ」

「……え？」

「今までも、それなりに毎日を楽しんでた。でも、お前と一緒にいると、毎日がもつと楽しくなるんだ」

春奈が意味を理解しているか、不安だったが、秀人は話を続ける事にした。

「俺はお前とずっと一緒にいたいんだ。だから、俺の恋人になってくれねえか？」

春奈はしばらく何も言わず、黙っていた。

「そ……それも罰ゲームでしょうか？」

「違う」

「……私をからかっているのでしょうか？」

「違う」

「それでは……」

「俺は春奈の事が好きだ！」

それは学校中に響き渡る程、大きな声だった。

「秀人君、声が大きいです……」

「お前だけに言っても信じねえんだろ？ だったら、学校中に言っ
て回る。そうすれば、周りの奴から色々言われて、さすがに春奈も俺
の言う事を信じるようになるだろ」

「そんな事しないで下さい」

春奈は困ったような表情を浮かべる。

「春奈の気持ち、聞かせてくれねえか？」

「はい」

春奈は大きく息を吸う。

「私も秀人君の事が好きです！」

「何で、お前も大声なんだよ！？」

「あ、私も1度、嘘だと言ってしまったので、信じてもらえないか
と思いましたが……ごめんなさい」

春奈の困った表情を見て、秀人は笑う。

「俺の恋人になってくれるか？」

「はい、こんな私で良かったら……よろしく願います」

春奈は恥ずかしそうに笑う。

「……でも、やっぱり信じられないです」

「だったら、もう1度大声で……」

「それは恥ずかしいです！ こんな、幸せな事があるなんて……どう
しても、前のように嘘ではないかと思ってしまいます」

「それじゃあ……恋人にしかしねえ事すれば、信じるか？」

「え？」

そのまま、秀人は春奈に顔を近付け、キスをした。

「え！？」

「これでも信じられねえか？」

「あ、その……」

「キス以上の事でもしねえとダメか？」

「え!？」

春奈は慌てた様子を見せる。

「私もしたいですけど、ここでは恥ずかしいです!初めては私か秀人君の部屋が良いです!でも、秀人君がお望みでしたら……」

「お前、とんでもねえ事言うんだな……」

「……ごめんなさい」

秀人はからかうように春奈の頭に手を置く。

「でも……機会があったら、そのうちな」

「え……あ、はい」

2人は顔を赤くしながら、また笑った。

「そろそろ教室に戻らないといけないですね」

「そうだな……じゃあ、戻るか」

「はい」

2人は屋上を後にし、階段を下り始める。

「今、俺達……恋人なんだよな？」

「はい、そうだと思います……」

「じゃあ、改めてよろしくな」

秀人が手を差し出すと、春奈も握り返し、2人は握手をした。

エピソード

8月28日(土)

秀人は春奈を家まで迎えに行った後、2人で近くの公園に行った。

「こういうの、公園デートって言うんですね」

「こんな手抜きみたいなデートで良いのか？行きたい所があれば連れてくのに……」

「私、秀人君と一緒になら、どこでも構いません。ただ、今日は秀人君とゆつくり話がしたかったんです」

「そっか」

「秀人君は、どこかへ行く方が良かったですか？」

「そんな事ねえよ。俺もお前と一緒にいるだけで楽しいからな」

「それなら、良かったです」

2人は空いていたベンチに並んで座る。

「こうやって、のんびりしていると、夏休みって感じがするな」

「そうですね。でも、もうすぐ終わってしまいます」

「そうしたら、本格的に受験って感じになるだろうな……」

秀人は軽く、ため息をつく。

「秀人君、大学はどこにするか決めましたか？」

「村雨とかと相談して、少しずつ決めてるよ。春奈は結局、どうするんだ？」

専門学校を受けようと思っていた春奈だったが、文化祭で劇を見た人から、大学のサークルに誘われ、今は迷っているところだ。

「まだ、悩んでいます……」

「まあ、春奈のやりたいようにやれよ」

「はい、そうします」

春奈は笑顔を見せる。

2人が交際を始めてから、既に2ヶ月が過ぎた。

秀人と春奈の大声による告白が学校中の噂となり、2人は学校公認のカップルとなっている。

今は夏休みで、補習の時しか学校に行かないが、その度に周りの生徒から噂されている状態だ。

「そっいえば……」

「はい？」

「和孝が言ってたんだ。恋人って3週間目と3ヶ月目と3年目の3が付く時期に別れやすいって」

「……私達、丁度3ヶ月目に入ったばかりです」

春奈は少しだけ落ち込んだ様子を見せる。

「あ、別に俺は別れる気なんてねえからな」

「え……あ、はい、私も別れる気なんてないですよ」

春奈は安心したように笑顔を見せる。

「私、秀人君の事、好きです」

「急にどうしたんだよ？」

「今、急に言いたくなっただんです」

秀人は照れくさくなり、顔を赤くする。

「秀人君は私の事、どう思っていますか？」

「お前、昨日もそれ、聞かなかったか？」

「何度も聞きたいんです」

秀人は軽くため息をついた後、笑った。

「俺は……春奈の事、好きだよ」

「ありがとうございます。あと……わがママを言っつてしまい、ごめんなさい」

「お前、そっやって気を使っつてばかりいたら、疲れちまっつたら？」

「秀人君だつて、私に気を使っつてくれます」

「とにかく、俺に対しては、もっと、わがママも言えよ。お前は俺だけじゃなくて、色んな奴に気を使っつてるだろ？」

「じゃあ……」

春奈は真剣な表情で秀人を見る。

「1つだけ、わがままを言っても良いですか？」

「ああ、別に1つじゃなくて、たくさん言えよ」

「それは、秀人君に悪いです」

「別に俺は……とりあえず、その1つを聞くよ」

話が脱線しかけていたため、秀人は少しだけ笑う。

「この先、何があるかはわかりませんが……」

春奈は軽く深呼吸をする。

「ずっと、私と一緒にいて下さい」

「お前、そんな恥ずかしい事、よく言えるな」

「……ごめんなさい」

秀人は少しだけ考えた後、真剣な表情を見せる。

「でも……俺もお前と一緒にいたいと思ってる」

「え？」

春奈は驚いた様子を見せた後、笑った。

そんな春奈に合わせ、秀人も笑った。

「ありがとうございます」

「ずっと、一緒にいような」

「はい」

春奈は、そのまま秀人に寄り掛かる。

「秀人君と一緒にだと、安心します」

「お前、俺がからかう度に慌てるじゃねえかよ」

「そうですけど……」

「まあ、俺も、お前と一緒にいると、安心するよ」

「それなら、良かったです」

2人はしばらくの間、何も話す事なく、そのままだった。

「そういえば、俺……思い出した事があるんだ」

それは春奈に2度目の告白をした日に気付いた事だ。

それから、秀人は記憶を少しずつ思い返し、その時の事を思い出す事が出来た。

「俺、小さい頃に、お前と……」

秀人は春奈に目をやり、話を中断する。

春奈は目を閉じ、いつの間にか眠ってしまっていた。

「デート中に寝る奴がいるかよ？」

秀人は呆れつつも、春奈の寝顔を見て、軽く笑った。

そして、寄り添うように秀人も春奈に寄り掛かると、そのまま眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500k/>

バツラブ

2010年10月8日23時15分発行